

多賀城市文化財調査報告書第103集

多賀城市内の遺跡2

—平成22年度発掘調査報告書—

平成23年7月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市は、古来より多くの人々が生活を営み、文化を育んだ地であり、その証として数多くの有形・無形の文化財が残されています。特に、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであり、関連する多くの文化財が所在しています。さらに、本市においては一般に「遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財が市の総面積の約1/4を占めており、毎年発掘調査において貴重な成果を得ています。

昭和54年度に本市単独による発掘調査を開始して以来、平成21年度までの31年間に実施した調査件数は423件、調査面積は264,878m²にのぼります。当教育委員会では、その成果を単に記録の保存だけにとどめず、広く公開するとともに、開発事業に伴う発掘調査においては、事業との円滑な調整をはかりながら、埋蔵文化財の適正な保護と活用に努めているところであります。

さて、本書は平成22年度の国庫補助事業として実施した27件の発掘調査の成果を収録したものです。これらの調査のうち、高崎古墳群第11次調査においては、東北地方では非常に珍しい古墳時代の須恵器の窯跡が発見されました。このことは、国府多賀城が設置される以前に、この地がすでに中央の進んだ技術を導入できる先進的な地域であったことを物語っています。また、新田遺跡第66次調査では、古墳時代の祭祀に用いられたと思われる特異なミニチュア土器が出土しました。さらに、山王遺跡第81・85次調査では、古代のまち並みの根幹となった道路跡のうち、南北大路から西へ9条目の南北道路跡を発見しました。このほか、八幡館跡第6次調査では、奈良時代の堅穴住居跡をはじめ多くの建物跡が見つかりました。この場所が城館として使用される以前から、この付近の中心地であったことを伺わせます。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後に、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成23年7月

多賀城市教育委員会
教育長 菊地 昭吾

例　　言

- 1 本書は、平成22年度の国庫補助事業として実施した発掘調査27件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 本書の執筆・編集は、I・VII・III・IX・VII・IIIを島田敬、II・III・V・IX・XII・X・XIII・XIV・XV・XVI・XVII・XVIII・XIX・XVII-i～XIX-1・XXを石川俊英、VII・XI・XVIIを武田健市、XII・XIII・XIV・XV・XVI・XVII・XVIII・XIX・XVII-2を村松稔、XIII-iii-2を高橋守克が担当した。また、図版作成等は各担当者が行い、鈴木琢郎・畠山未津留・四家礼乃がこれを助けた。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I 遺跡の地理的・歴史的環境	1	XV 高崎遺跡第84次調査	73
II 新田遺跡第63次調査	3	XVI 高崎遺跡第85次調査	74
III 新田遺跡第64次調査	13	XVII 高崎古墳群第10・11次調査	78
IV 新田遺跡第65次調査	14	XVIII 西沢遺跡第18次調査	123
V 新田遺跡第66次調査	16	XIX 西沢遺跡第19次調査	124
VI 新田遺跡第67次調査	34	XX 西沢遺跡第20次調査	135
VII 新田遺跡第68次調査	40	XI 小沢原遺跡第17次調査	139
VIII 山王遺跡第81・85次調査	41	XII 東田中窪前遺跡第6次調査	141
IX 山王遺跡第82次調査	58	XIII 志引遺跡第3次調査	143
X 山王遺跡第84次調査	60	XIV 八幡館跡第6次調査	144
XI 山王遺跡第86次調査	64	XV 橋本開横穴墓群第1次調査	160
XII 市川橋遺跡第80次調査	68	XVI 大代遺跡第2次調査	161
XIII 市川橋遺跡第81次調査	70	・橋本開横穴墓群第2次調査	
XIV 高崎遺跡第83次調査	71		

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 加藤佳保
 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
 副主幹 武田健市 研究員 石川俊英 島田 敬 相澤清利 村松 稔
 調査員 高橋守克 鈴木琢郎 岛山未津留 四家礼乃

調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査積	調査担当者
1	新田遺跡第63次調査	山王字南寿福寺12-2	4月16日～5月20日	35m ³	相澤・畠山
2	新田遺跡第64次調査	新田字後2-4	5月21日	8m ³	相澤・畠山
3	新田遺跡第65次調査	新田字北閑合30-2	5月27日	2m ³	石川
4	新田遺跡第66次調査	山王字南寿福寺21-3	6月9日～8月5日	60m ³	相澤・畠山
5	新田遺跡第67次調査	新田字後11-14の一部	11月10日～12月2日	52m ³	石川
6	新田遺跡第68次調査	新田字後32-6	2月2日	13m ³	武田
7	山王遺跡第81次調査	山王字山王四区185-6	4月9日～5月14日	49m ³	島田・四家
8	山王遺跡第82次調査	山王字山王二区129外	5月28日	100m ³	相澤・畠山
9	山王遺跡第84次調査	山王字山王二区129外	7月28日～8月7日	138m ³	石川
10	山王遺跡第85次調査	山王字山王四区185-7	8月18日～9月30日	43m ³	島田・四家
11	山王遺跡第86次調査	山王字多賀前地内	11月5日～11月12日	201m ³	武田・村松・鈴木・畠山・四家
12	市川橋遺跡第80次調査	城南一丁目12-17	6月10日	12m ³	石川
13	市川橋遺跡第81次調査	城南一丁目2-11	9月10日～10月1日	67m ³	相澤・畠山
14	高崎遺跡第83次調査	高崎二丁目81-11・13	4月21日	8m ³	武田
15	高崎遺跡第84次調査	高崎二丁目51-3	5月7日	8m ³	相澤・畠山
16	高崎遺跡第85次調査	高崎二丁目185-1外	9月10日～9月21日	47m ³	石川
17	高崎古墳群第10次調査	高崎二丁目505-3、507	5月1日～6月29日	46m ³	石川・鈴木
18	高崎古墳群第11次調査	高崎二丁目505-1	5月8日～7月26日	86m ³	石川・高橋・鈴木
19	西沢遺跡第18次調査	市川字伊保石21-1～7	5月15日～6月19日	26m ³	島田・四家
20	西沢遺跡第19次調査	市川字秦社35-6・7	5月15日～6月19日	121m ³	島田・四家
21	西沢遺跡第20次調査	市川字秦社31-7	12月7日～12月25日	33m ³	石川
22	小沢原遺跡第17次調査	浮島二丁目38-3	10月8日	8.5m ³	村松
23	東田中窪前遺跡第6次調査	東田中一丁目242-22外	12月16日～12月17日	147m ³	相澤・畠山
24	志引遺跡第3次調査	東田中二丁目124-18	6月18日	12m ³	島田
25	八幡館跡第6次調査	八幡二丁目327-2	12月1日～2月10日	106m ³	村松・鈴木・畠山・四家
26	橋本開横穴墓群第1次調査	大代五丁目63の一部	7月13日	14m ³	島田
27	橋本開横穴墓群第2次調査・大代遺跡第2次調査	大代六丁目46-1、48-2	11月18日	21m ³	村松

- 4 調査協力者 品川 順 星 欣一 遠藤寿昭 野沢雄一郎 大泉 仁 熊谷正男 大山史洋
制野信宏 菅野真由美 佐竹道子 今村光一 相田隆宏 高橋英司 高橋 修
佐藤壯之助 高橋 磨 佐藤裕文 田口 学 田口雪子 佐藤 圭 佐藤香織
平山裕三 平山則子 松浦睦男
(株)アーネストワン (株)千葉重機 (有)大国商事 M I D都市開発(株)
- 5 調査従事者 涼美静香 阿部信夫 市川菖晩 遠藤好巳 大江かおり 小野玉乃 輿 清志
片倉 忠 加藤義宏 川口久美子 小出博秋 小松まり 今野和子 佐藤 正
佐藤十五 佐藤澄保 佐藤 博 佐藤 唯 清水 亮 鈴木統三 鈴木幸夫
戸枝瑞恵 中村敏雄 芳賀かずみ 橋沼茂二 藤田恵子 星 彰 山田理
山田佐男 若生要一
- 6 整理従事者 丑田明希 内海美由紀 菅野良子 佐々木清子 高橋昭子 千葉郁美 畠山志穂
宮城ひとみ 村上和恵

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
S I : 竪穴住居跡 S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 S R : 窑跡
Pit : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(多賀城市教育委員会 2003)に従った。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)と、「扶桑略記」延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」「日本第四紀地図」1987、阿子島功・塙原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」「中山久夫教授退官記念地質学論文集」1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城庵寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に実施した発掘調査のうち、主な遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。多賀城跡南面に広く占地し、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城庵寺跡の西側で約80軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

高崎古墳群は、北西側に張り出す低丘陵の先端付近に立地し、その範囲は東西約120m、南北約140mの広さを有する。現在確認できる古墳は1基のみである。これまで、古墳の周辺で9回の発掘調査が実施されているが、発見された遺構は、堅穴住居跡や掘立柱建物跡などいずれも古代のものである。

西沢遺跡は、低丘陵の緩斜面に立地し、その範囲は東西約450m、南北約700mの広さを有する。これまでの調査では、縄文時代と古代～近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。とりわけ平安時代に入ると、鍛冶工房を含む堅穴住居跡や掘立柱建物跡が整備されるようになる。

八幡館跡は、標高6～13mの低丘陵に立地し、その範囲は東西約300m、南北約250mの広さを有する。これまでの調査では、平安時代の堅穴住居跡、中世城館に伴う空堀や溝跡が発見されている。

II 新田遺跡第63次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成21年12月4日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径60cm、長さ7.5mの柱状改良杭を32本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成22年1月17日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は4月16日から開始し、はじめに重機を使用して盛土(I1層)・現代の水田耕作土(I2層)の除去を行った。土砂は調査面積と作業時の安全確保のためすべて場外搬出とした。20日より作業員を動員してII層上面での遺構検出作業を行い、並行して調査区間に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレーナーを設定した。調査区の北西端でSD1981溝跡を南半部ではIV層上面で比較的規模の大きいSD1982溝跡を発見した。24日、SD1982溝跡は平面と断面での観察の結果、2時期の変遷があることが判明した。27日までには、溝埋土の掘り下げ、各遺構の平面・断面図作成と写真撮影がほぼ終了した。5月1日より下層の調査を開始する。近隣の調査成果によればVII層上面では古墳時代前期の水田跡が検出されており、今回の調査区でもその存在が予想されていた。しかし、畦畔等は確認できなかった。11日には一部深堀区を設けさらに下層の調査を行ったが遺構、遺物は発見されなかつた。13・18日、補足調査、器材の撤収を行う。20日には埋め戻しを行って現地の調査を完了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

I1層：現代の盛土層で、厚さは1m前後である。

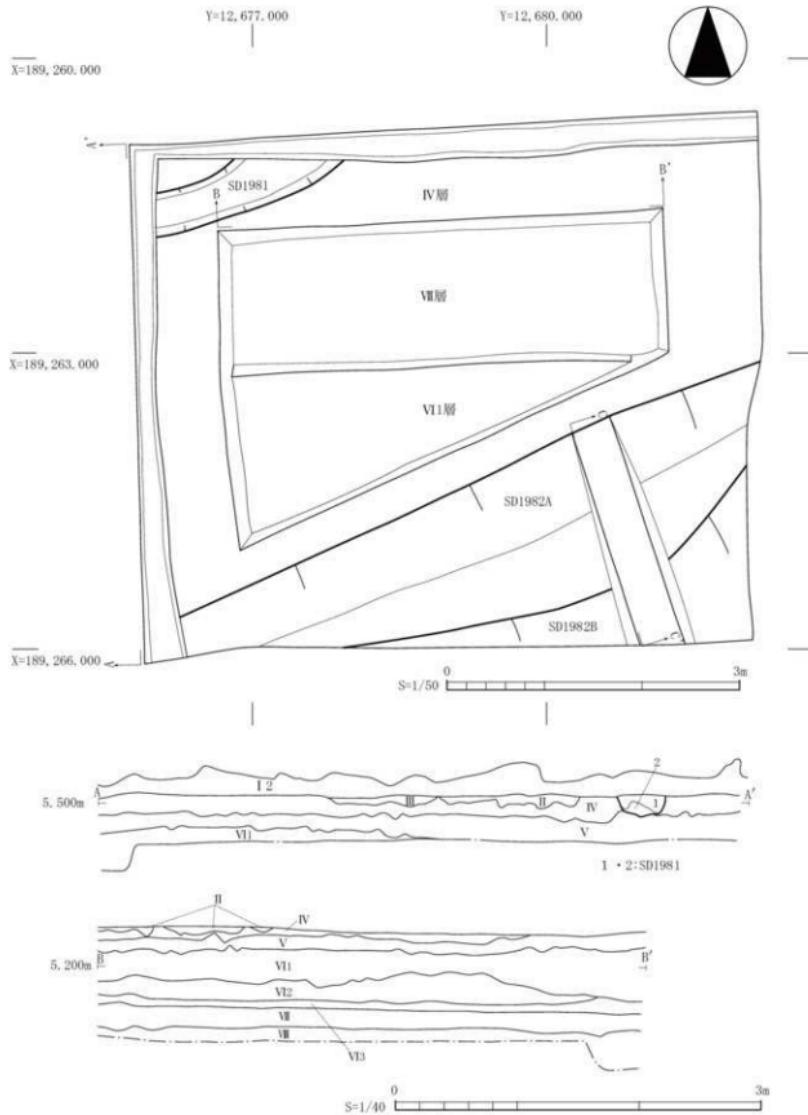
I2層：現代の水田作土層で、厚さは10～30cmである。

II層：黒色粘質土で、厚さは3～10cmである。調査区北半に分布する。中世の遺構検出面。

III層：灰黄褐色砂質土で、厚さは5～10cmである。調査区中央付近に幅約1mを持って東西方向に分布する。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面・断面図

- IV 層：褐灰色粘質土で、厚さは5～20cmである。ほぼ調査区全域に分布する。中世の遺構検出面。
- V 層：黒褐色粘質土で、厚さは10～20cmである。均質。調査区全域に分布する。
- VI1層：灰色土で、厚さは15～40cmである。調査区全域に分布し、上面に灰白色火山灰粒が堆積する。
- VI2層：暗灰黄色砂で、厚さは10～25cmである。調査区全域に分布する。
- VI3層：暗灰黄色砂で、厚さは5～10cmである。調査区全域に分布する。
- VII 層：黒色粘土で、厚さは15cm前後である。調査区全域に分布する。古墳時代前期相当層。
- VIII 層：灰褐色砂質土で、厚さは30cmである。調査区全域に分布する。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、II層とIV層上面で溝跡を発見した。

S D 1981溝跡

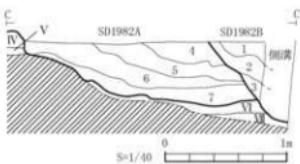
調査区北西部のII層上面で発見した東西方向の溝跡である。規模は長さ2.1m以上、上幅0.4～0.6m、下幅0.3～0.4m、深さ18cmである。底面はやや凹凸があるが、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層が褐灰色粘質土で、2層が褐灰色土が混じる灰黄褐色土である。

遺物は、土師器坏B類、須恵系土器坏の小片が若干出土している。

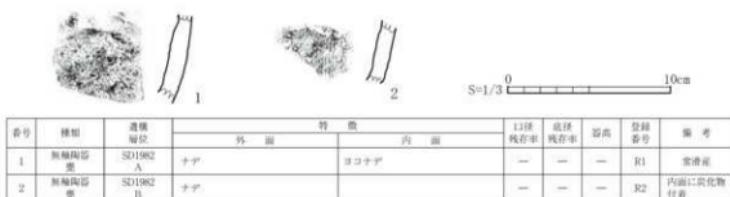
S D 1982 A・B溝跡

調査区南半付近のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。2時期(A→B)の変遷を確認した。方向はA期みるに東で約23度北に偏している。

A期の規模は長さ6.5m以上、幅1.6m以上、深さ50cmである。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層(4～7層)に分けられ、4層が褐灰色土、5層が褐灰色粘質土、6層が灰褐色粘土でいずれも灰褐色土と互層になる。7層は均質な褐灰色粘質土である。



第3図 S D 1982 A・B溝跡断面図



第4図 S D 1982 A・B溝跡出土遺物

遺物は、土師器坏B類、須恵器壺、須恵系土器坏の小破片が若干と、無輪陶器壺の小破片が1点出土している。

B期はA期より1mほど南に造られたもので、規模は長さ4.5m以上、幅1.2m以上、深さ65cmである。壁

は比較的急に立ち上がる。埋土は3層(1～3層)に分けられ、1層が均質な褐灰色土、2層が褐灰色粘質土でⅦ層の小ブロック層と互層になる。3層は均質な褐灰色粘土である。

遺物は、無釉陶器壺の小破片が1点出土している。

その他の出土遺物

Ⅱ・Ⅲ層より土師器壺・壺B類、須恵系土器壺の小破片が若干出土している。

3まとめ

- (1) Ⅱ・Ⅲ層については、新田遺跡寿福寺地区で確認されている中世期に属する「第Ⅲ層」に類似することから、概ね中世の時期に堆積したとみられる。
- (2) Ⅳ層上面検出したSD1982溝跡の年代については、無釉陶器壺が出土したことから、概ね中世の時期とみられる。
- (3) 今回発見したSD1982溝跡は、新田遺跡寿福寺地区で発見されている大規模な溝で区画する15～16世紀の屋敷跡との関連で考えることができる(第1図参照)。本溝跡は、この屋敷跡の外周の区画溝から西に派生した1区画の南辺に位置していることがわかる。したがって、この区画の広さは一辺約55m四方を有していたと推定される。
- (4) Ⅶ層は、周辺の調査(第15・29次)において古墳時代前期の水田耕作土であることが判明しており、今回の調査でも畦畔等の検出を目的として深堀区を設定したが、関連する遺構は発見されなかった。また、プラントオバール分析を実施したところ、イネは検出されず、調査地で稲作がおこなわれた可能性は考えにくいとされた(附章参照)。のことから、当該地域では、比較的狭い範囲の中で耕作域と非耕作域が存在することが明らかとなった。



調査地近景(南西より)

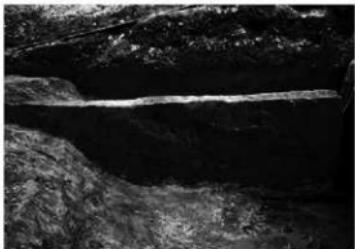


調査区全景(東より)

写真図版1



S D 1982溝跡完掘状況(東より)



S D 1982溝跡土層断面(西より)



調査区北壁断面(南より)



VII層上面検出状況(西より)

写真図版2

附章 新田遺跡第63次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

ここでは、新田遺跡第63次調査における稻作の可能性を検討する目的で、発掘調査担当者により採取された試料を対象にプラント・オパール分析を行った。

2. 試料

分析試料は、VI3層、VII層、VIII層の3点である。試料は、いずれも調査担当者によって採取され当社に送付されたものである。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1 gに対し直徑約40 μmのガラスピーズを約0.02 g添加
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300 W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g)を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。各分類群の換算係数は、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山, 2000)。

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)＼層位		V13	VII	VIII
イネ科	Gramineae (Grasses)			
キビ族型	<i>Paniceae type</i>	6	6	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	24	6
ススキ属型	<i>Misanthus type</i>	6	91	18
ダンチク属	<i>Arundo</i>		6	
ジュズダマ属	<i>Cox</i>		6	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	12	6	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	12	6	18
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	12	6	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	6	6	6
その他	Others	6	6	6
未分類等	Unknown	103	217	73
樹木起源	Arboreal	12	6	12
(海綿骨針)	Sponge	6	18	6
プラント・オバール総数	Total	187	380	175

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²·cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.76	1.52	0.38
ススキ属型	<i>Misanthus type</i>	0.07	1.12	0.22
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.14	0.07	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.06	0.03	0.09
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.09	0.05	0.09
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.02

表1 新田遺跡第63次調査のプラント・オバール分析結果

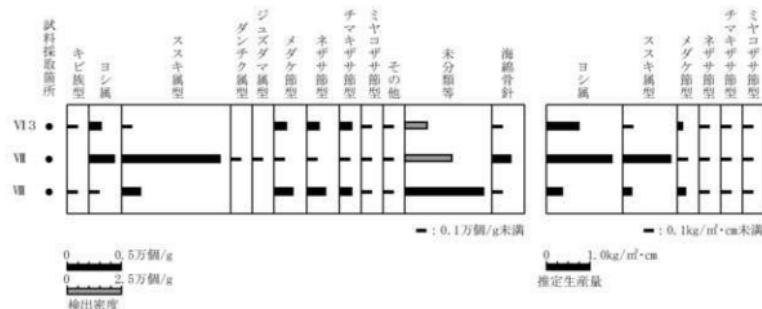


図1 新田遺跡第63次調査のプラント・オバール分析結果

4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オバールは、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ダンチク属、ジュズダマ属、タケ亜科(メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他)および未分類である。また、プラント・オバール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オバールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごと

に異なる。

VI3層では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。プラント・オバール密度は、いずれも低い値である。

VII層では、ヨシ属、ススキ属型、ダンチク属、ジュズダマ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。このうち、ススキ属型が非常に高い密度であり、ヨシ属も比較的高い密度である。

VIII層では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。プラント・オバール密度はいずれも低い値である。

なお、低密度であるがすべての試料で海綿骨針が検出されている。

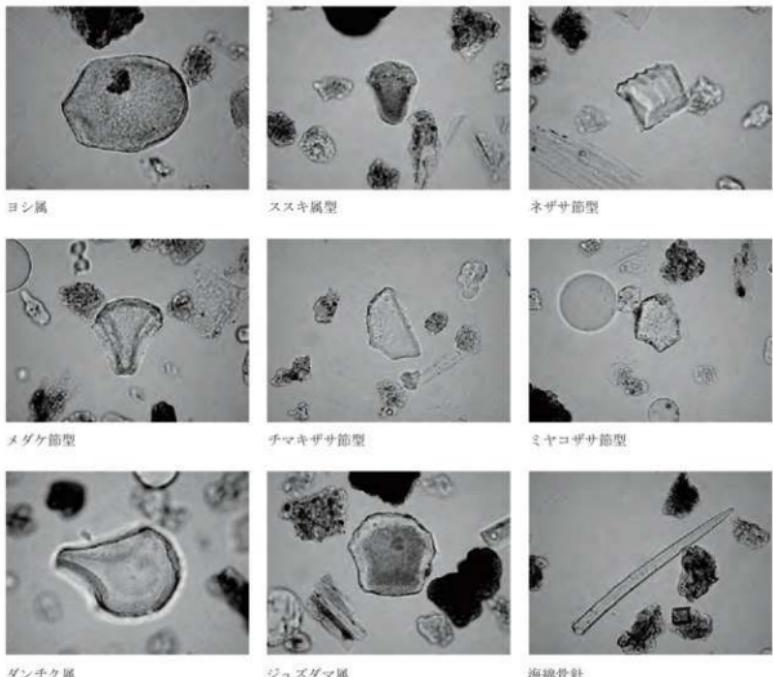
5. 所見

新田遺跡第63次調査においてプラント・オバール分析を行った。分析の結果、VI3層、VII層およびVIII層のいずれからもイネは検出されず、これらの層では調査地において稲作が行われていた可能性は考えにくい。なお、VII層ではススキ属型が非常に高い密度で検出されており、調査地にはススキ属が繁茂していたと推定される。また、ヨシ属が比較的高い密度であることから、当該層堆積時の調査地周辺は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定される。

VI3層とVIII層では、プラント・オバールの検出総数が20,000個/g未満と少ないとから、土層の堆積速度が速かったか、イネ科草本植物の生育には適さない環境であった可能性が示唆される。

文献

- 杉山真二(1987)タケ亞科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31, p.70-83.
杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オバール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として一、考古学と自然科学、20, p.81-92.
藤原宏志(1976)プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9, p.15-29.
藤原宏志(1998)稻作の起源を探る、岩波新書。



プラント・オパールの顕微鏡写真

— 50 μ m

III 新田遺跡第64次調査

調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成22年1月26日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に現表土から約65cmの掘削を行うことが示されており、埋蔵文化財への影響も考えられた。基礎工法の変更は不可能であることから、事前に遺構検出面の深さを知る目的で確認調査を実施し、遺構が確認された時点で本発掘調査に係る協議を行うこととなった。5月1日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受け発掘調査の実施に至ったものである。

調査は5月21日に実施した。住宅建築予定地の北端と南端の2ヶ所に調査区を設定した。重機に

より現代の盛土と畑耕作土の除去を行ったところ、いずれの調査区も基礎工事の際に掘削する深さの中で収まることが明らかとなった。よって、遺構・遺物は発見されなかった。写真撮影及び調査範囲の記録を作成し、現地調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



1T全景(東より)

IV 新田遺跡第65次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、既存建物解体及び長屋住宅新築建設に伴うものである。平成22年4月6日に地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。当該区は埋蔵文化財の包蔵地に隣接する位置にあるため、建築工事計画では、既存建物解体撤去後、長屋住宅基礎工事の際、直径600mm、長さ7.0mの杭を124本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が図れないか協議を行つたが、建物を支える十分な強度が得られないことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、4月28日に地権者より発掘調査に関わる依頼・承諾書の提出を受け、第65次調査として実施したものである。

調査は5月27日より開始し、重機を使用して掘り下がったが、湧水によって壁が崩落するため遺構・遺物は発見できなかった。調査は図面作成、全景写真撮影等を行い、調査終了後、直ちに埋め戻し作業を行って、同日現地調査を終了した。

2 調査成果

発見遺構

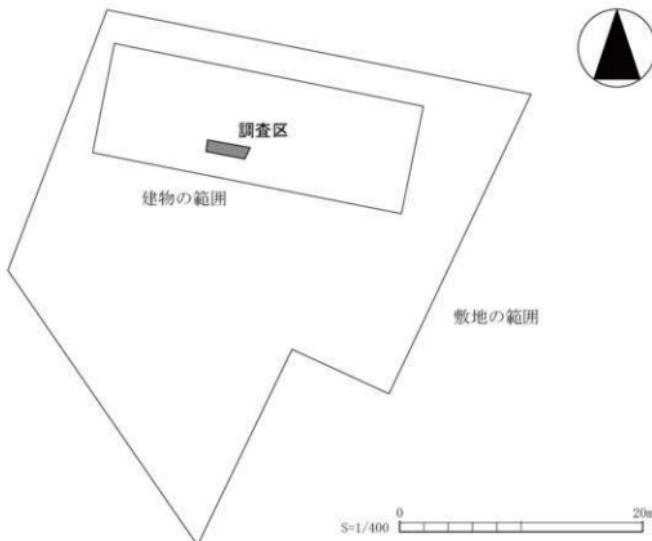
今回の調査では、遺構・遺物は発見できなかった。

3 まとめ

(1) 今回の調査では、遺構・遺物は発見できなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



深掘り状況(南より)

V 新田遺跡第66次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成22年1月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約40cm、長さ6mのコンクリート杭40本を打ち込むことと、深さ74cmの掘削を伴う給排水管付設工事等が示されていた。近接地の調査成果では、現表土下約40cmで中世の遺構が検出されていることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を実施することとなった。平成22年5月27日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、6月9日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により表土除去を行ったところ、ほぼ調査区全域で炭化物が多量に混入する黒褐色土

(II層)が分布していた。10日には作業員を投入して調査区内に排水用の側溝を設けるとともに、II層が3層に細分されることが明らかとなった。12日からは遺構検出作業を開始し、北半部でSD 1975東西溝跡、南半部で多くの柱穴等を検出した。17日、実測図作成用の基準点を設置し、これらの平面・断面図の作成及び写真の撮影を行なながら埋土を掘り下げた。6月29日にはII・I・II層上面検出遺構の調査を終了した。同層を除去した後、II・III層上面での遺構検出作業を開始し(7月3日)、SD 1976・1977南北溝跡、SX 1980を検出した。これらの調査を終了した後、II・III層の除去を行った(8日)。9日には調査区周辺の堆土を場外へと搬出した。10日よりIII層上面での遺構検出作業を行い、SX 1777東西道路跡の北側溝(SD 1974)を検出した。平面と断面の観察からほぼ同位置で3時期の変遷が確認された。28日、SD 1974北側溝の調査が終了したことから、III層を掘り下げ、古墳時代の遺構検出面であるIV層上面でSX 1972・1973を確認した。すでに排水用の側溝を掘削する際に確認されていたミニチュア土器2点は、SX 1973埋土上層に位置していることが把握された。古墳時代の調査が終了したのは31日で、引き続き8月3・4日に調査区の壁面上層断面図の作成と補足的な調査を行う。5日、器材の撤収と重機による調査区内の埋め戻しを行い、現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

I 層：宅地造成に伴う盛土とそれ以前の耕作土で、厚さは60～70cmである。



第1図 調査区位置図

- II 1層：調査区北・南端付近に分布する黒褐色土で、炭化物や明黄褐色砂質土小ブロックが多く混入している。厚さは15cm未満で、この上面が中世の遺構検出面である。
- II 2層：調査区南半に分布する褐灰色砂質土で、厚さは15cm未満である。
- II 3層：調査区全域に分布する褐灰色砂質土で、III層起源の浅黄橙色土粒が多く混入している。厚さは5～20cmで、この上面が中世の遺構検出面である。
- III 層：調査区のほぼ全域に分布する浅黄橙色土で、均質な土相である。厚さは5～15cmであり、この上面で奈良時代のS X 1777東西道路跡を検出している。古墳時代前期の遺物を含む。
- IV 層：調査区南端に分布する灰色砂質土で、厚さは5～23cmである。古墳時代前期の遺構検出面であり遺物も含む。
- V 層：調査区の南半に分布する褐灰色砂質土で、均質な土相である。厚さは10～30cmである。
- VI 層：調査区中央付近に分布する褐灰色土で、厚さは10～20cmである。古墳時代前期の遺物を含む。
- VII 層：調査区全域に分布する灰黄褐色砂で、厚さは40～50cmである。
- VIII 層：調査区全域に分布する灰白色土で、均質な土相である。厚さは15～20cmである。
- IX 層：調査区全域に分布する黒色粘土で、厚さは20cm前後である。

(2) 発見した遺構と遺物

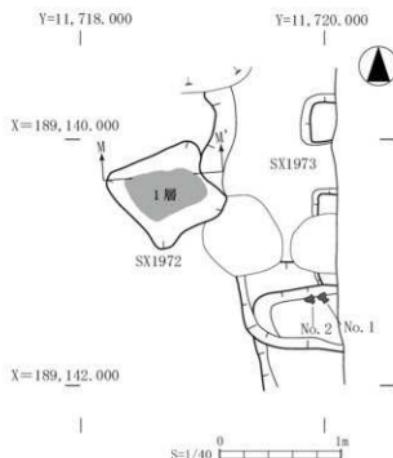
[IV層上面・古墳時代]

S X 1972

調査区南東隅で発見した。S X 1973と重複しておりそれより古い。平面形は隅丸の菱形をなし、規模は一辻70～75cm、深さ5～15cmである。底面はやや凹凸があり、東側に向かい低くなっている。壁は西側で見ると、非常に緩やかに立ち上がりついている。埋土は2層に分けることができる。1層は褐灰色土で炭化物が主体、2層はにぶい黄橙色土で、III層起源の小ブロックが多量に混入する。遺物は出土していない。

S X 1973

調査区南東隅で発見した。S X 1972と重複しておりそれより新しい。ほとんどが調査区外へ延びているためその西端の一部を検出したにすぎない。南北方向をとる西辺から東側約70～80cmのところに高さ10～20cmのIV層を削りだした畦状の高まりが2カ所確認された。その南側には一段くぼむ落ち込みがあり、埋土最上層からは横倒しの状態でミニチュア土器2点が並んで出土した(第2図No.1・2)。畦状の高まり間の埋土はにぶ



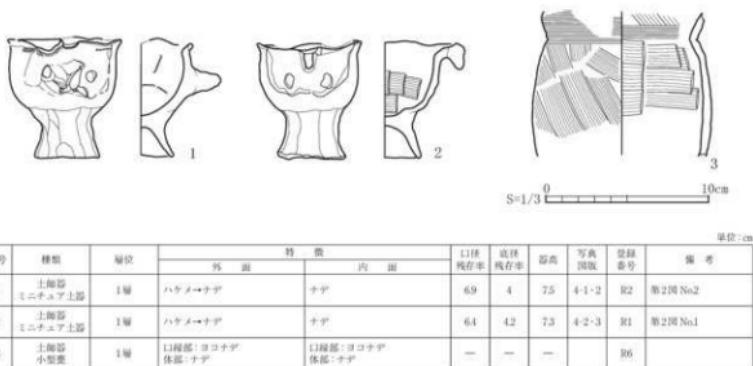
第2図 IV層上面検出遺構平面図



第3図 S X 1972断面図

い黄橙色土の単層である。一方、その西・南側の埋土は3層に分けられ、灰・灰白色砂質土～細砂の自然堆積土と違いがある。

遺物は、土師器器台・鉢・甕・ミニチュア土器が出土している。



第4図 S X 1973出土土器

〔Ⅲ層上面・奈良時代〕

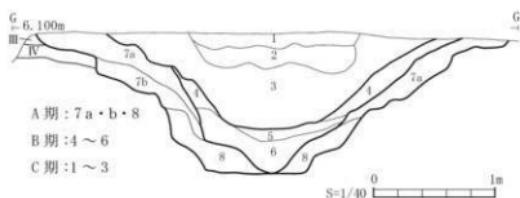
S X 1777東西道路跡

調査区の南半部で発見した東西道路跡である。位置関係より、第37・45・48・49・50次調査で検出した東西道路跡と一連のものである。今回はその北側溝S D 1974を長さ5.4mまで検出した。路面等に関わる施設、整地などは確認されなかった。側溝の状況から、ほぼ同位置で3時期(A→C期)の変遷が認められた。

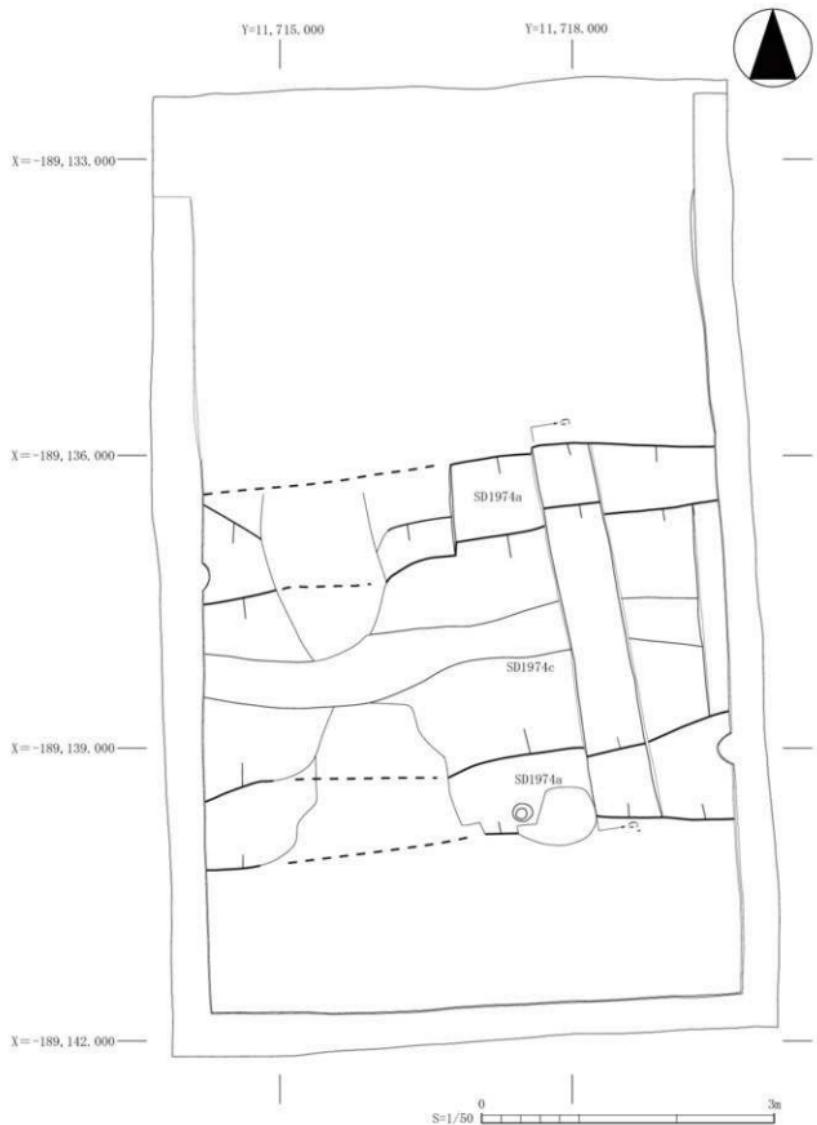
A期: S D 1974 aを発見した。方向は東で約8度北に偏しており、規模は上幅3.8～3.9m、下幅0.35～0.5m、深さは約0.8mである。壁は中位付近に段が認められ、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は平坦で、東西の比高はほとんどない。埋土は大別2層に分けることができる。7a・b層は灰色砂質土で、下層がやや暗く粒子が細かい。8層はにぶい黄橙色土で、褐灰色土小ブロックと浅黄橙色土小ブロックが混じりあう。

遺物は、古墳時代前期の土師器鉢・甕が出土している。

B期: S D 1974 bを発見した。C期側溝に北壁上半部を壊されている。方向は東で約11度北に偏しており、規模は上幅2.4m以上、下幅0.45～0.7m、深さは1.1mである。壁は非常に緩やかに立ち上がり、底



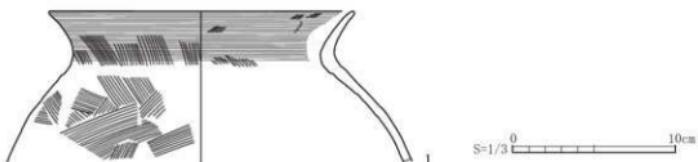
第5図 S X 1777東西道路北側溝(S D 1974)断面図



第6図 S X 1777東西道路跡北側溝 (SD 1974) 平面図

面は丸く掘り窪められている。東西の比高はほとんどない。埋土は3層に分けることができる。4層は褐灰色粘質土で、上層が砂質、下層が粘土質である。5層は褐灰色粘土で黒褐色粘土と褐灰色粘土の互層である。6層は灰黄褐色粘土で下部に小ブロックを含む。5・6層には炭化物を顯著に含む。

遺物は、古墳時代前期の土師器鉢・壺・甕と砥石片が出土している。



番号	種類	層位	特徴		L1H 現存率	底材 現存率	器高	写真 図版	記録 番号	備考	単位:cm
			外一面	内一面							
1	土師器・甕	B	L1縁部:ハケメ→ヨコナテ 体部:ハサツ	L1縁部:ハケメ→ヨコナテ	[18.6] 26/24	—	—	—	R.6		

第7図 SD 1974 北側溝跡出土土器

C期: SD 1974 c を発見した。方向は東で約7度北に偏しており、規模は上幅27～3m、下幅0.35～0.6m、深さは約0.75mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。東西の比高はほとんどない。埋土は3層に分けることができる。1層は浅黄色土の小ブロックが主体、2層は灰黄褐色砂、3層は灰黄褐色砂とぶい黄橙色土の互層である。遺物は出土していない。

〔II 3層上面・中世〕

S D 1976溝跡

調査区北西部で発見した南北方向の溝跡である。2時期 (A→B期) の変遷があり、長さは約1mまで確認した。方向はほぼ発掘基準線に沿う。

A期: 規模は上幅1m以上、下幅0.6m、深さ0.4mである。断面は逆台形をなす。埋土(3層)は褐灰色粘質土でⅧ層起源の小ブロックを含む。

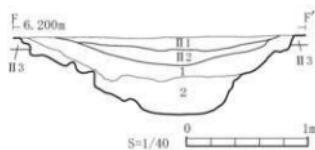
遺物は、古墳時代前期の土師器甕が出土している。

B期: 規模は上幅1.2m以上、下幅0.15m、深さ0.6mである。底面はやや丸みを持ち、壁は開き気味のV字型をなす。埋土は2層に分けられ、1層は炭化物片を含む灰褐色土で2層が均質な褐灰色土である。

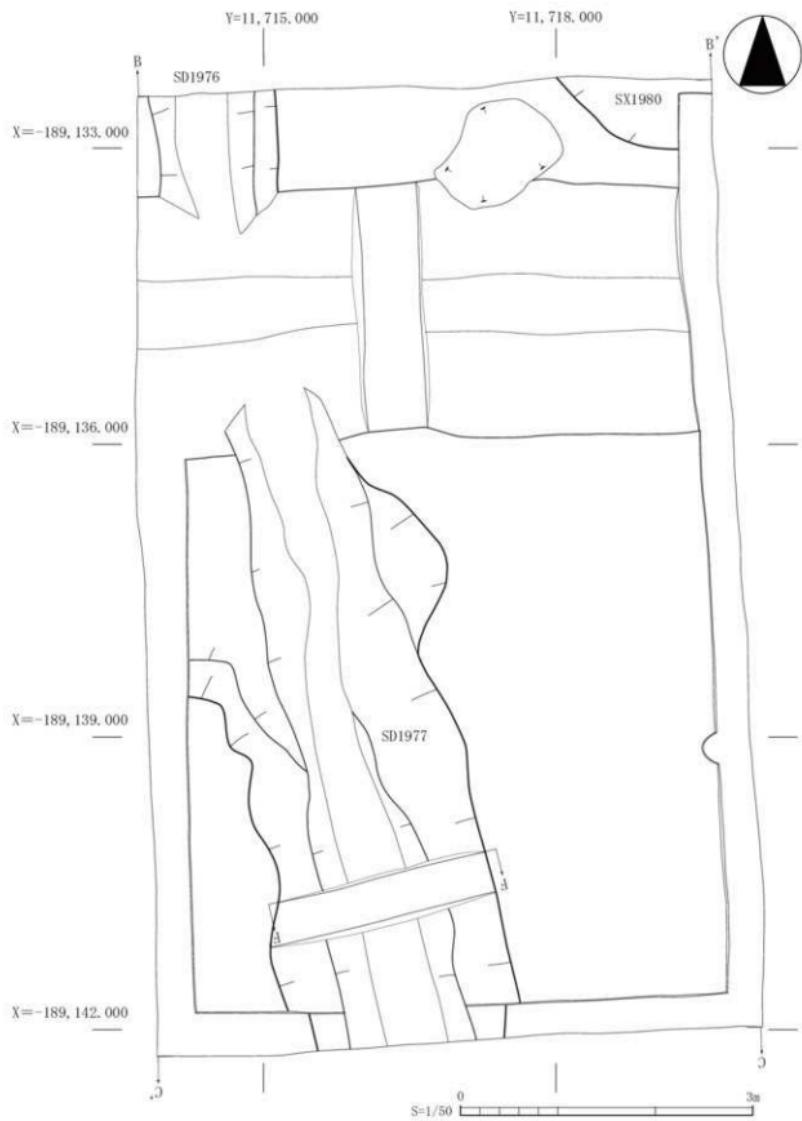
遺物は、無釉陶器甕の口縁部破片(第12図11)が出土している。常滑産とみられ、常滑窯編年の8形式に比定され14世紀後半に位置づけられる。

S D 1977溝跡

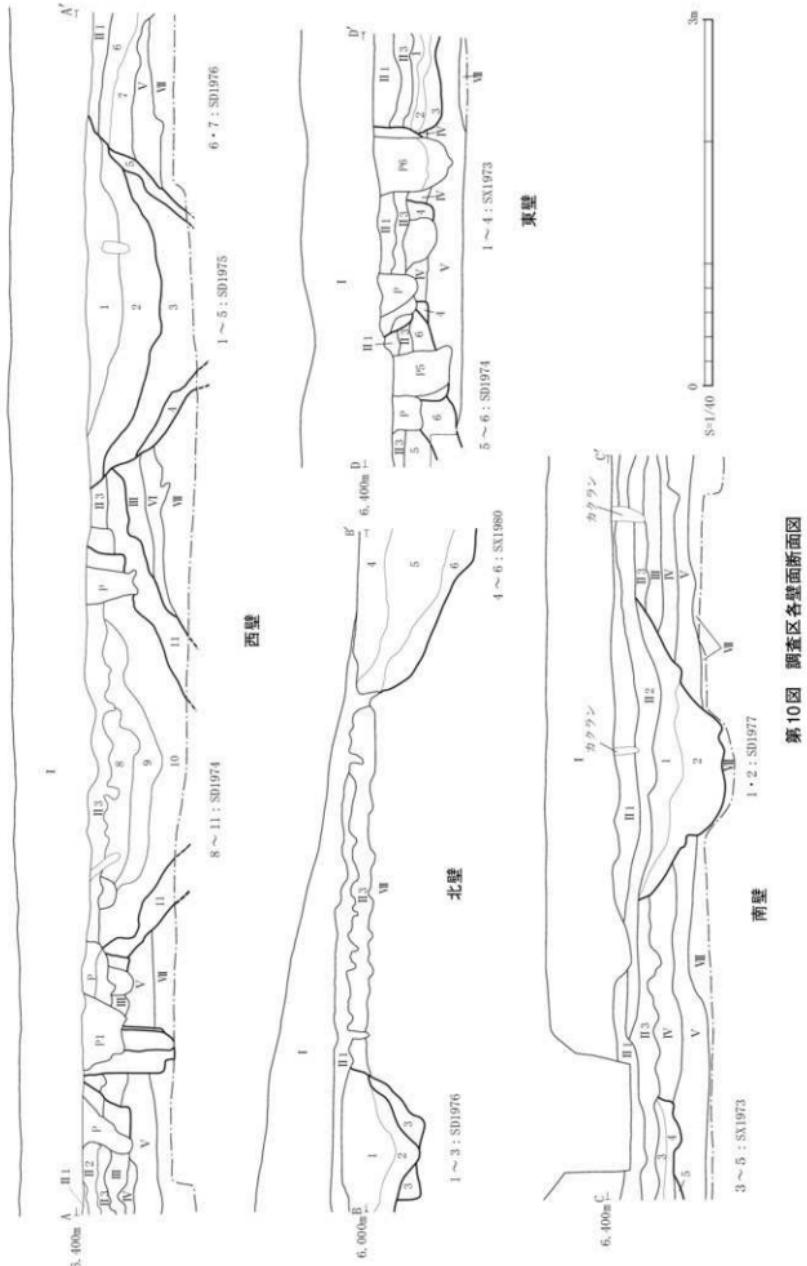
調査区西半部で発見した南北方向の溝跡である。長さは約6.7mまで確認した。方向は北で約12度西に偏している。規模は上幅2～2.4m、下幅0.3～0.6m、深さは0.6



第8図 SD 1977 溝跡断面図



第9図 II 3層上面検出構造平面図



第10図 調査区各壁面断面図

~0.7mである。断面は逆台形をなす。埋土は2層に分けられ、1層は黄橙色土粒を含む均質な黒褐色土で、2層が下層に黄橙色土粒を多く含む褐灰色砂質土である。なお、1層が堆積時にはまだ埋まり切っておらず、この部分にII・I・2層が堆積する。

遺物は、古墳時代前期の土師器壺、古代の土師器坏B類・高台付坏、須恵器坏、無釉陶器壺・すり鉢の他に土師質の取手、鉄釘が出土している。

S X 1980

調査区北東端部で発見した性格不明の遺構である。北東側に向かって落ち込んでおり、確認できる深さは95cmである。壁は比較的緩やかに傾斜している。埋土は3層(第10図:北壁4~6)に分けることができる。4層は褐灰色土であり炭化物を若干含む。5層は褐灰色土で浅黄橙色土のブロックを多量に含む。6層は浅黄橙色土と褐灰色土が互層となる。

遺物は、古墳時代前期の土師器片、無釉陶器片口鉢の他に不明鉄製品が出土している。

(II 1層上面・中世)

S D 1975溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。ほぼ同位置で3時期(A→C期)の変遷があり、長さは約6mまで確認した。方向はほぼ発掘基準線に沿う。

A期:規模は上幅1m以上、下幅0.5~0.6m、深さ1.25mである。底面はやや丸みを持ち、断面は逆台形をなす。埋土は2層確認され、5層が褐灰色粘土と青灰色細砂の互層、北壁上位付近の6層が灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

B期:規模は上幅1.5m以上、下幅0.3m、深さ1.05mである。底面はやや凹凸があり、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、3層は黄橙色土のブロックを含む褐灰色粘質土、4層が均質な褐灰色粘質土である。

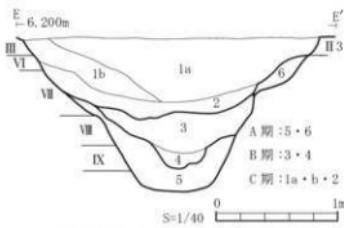
遺物は、青磁碗(龍泉窯系)の底部破片(写:4-13)が出土している。

C期:規模は上幅2.5~2.7m、下幅1.1~1.2m、深さ0.6mである。底面はやや凹凸があり、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は大別2層に分けられ、1a・b層は炭化物片を含む灰褐色土、2層が炭化物粒を含む均質な褐灰色粘質土である。

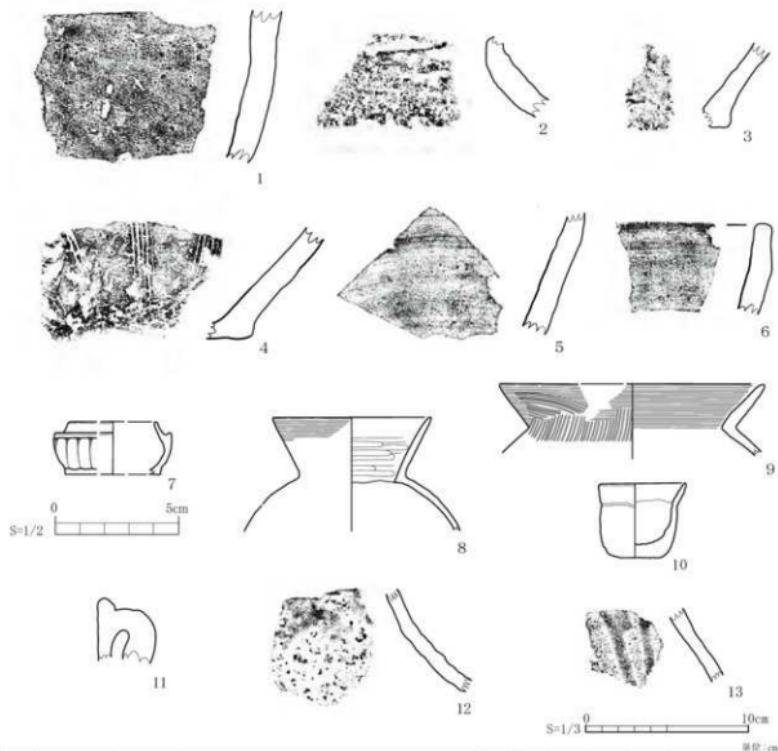
遺物は、古墳時代前期の土師器鉢・壺・壺・ミニチュア土器、古代の土師器A・B類、須恵器坏・瓶・壺の小破片、白磁梅瓶(写:4-12)・合子身、褐釉陶器(印花文)、無釉陶器壺・すり鉢の破片の他に不明鉄製品、砥石、桃の種が出土している。

S B 1978掘立柱建物跡

調査区南西部で発見した掘立柱建物跡である。西側は調査区外へ延びるため3個の柱穴を検出したことにとどまった。東西1間、南北1間の建物あるいは東西2間以上、南北1間の東西棟が考えられる。3基のうち2基で柱抜取り穴、1基(P1)で柱切り取り穴と柱痕跡を確認している。方向は、北で約27度西に偏している。規模は東側柱列で約2.8m、南側柱列で約3.2mである。掘方の平面形はおおむね隅丸方形であり、規模は

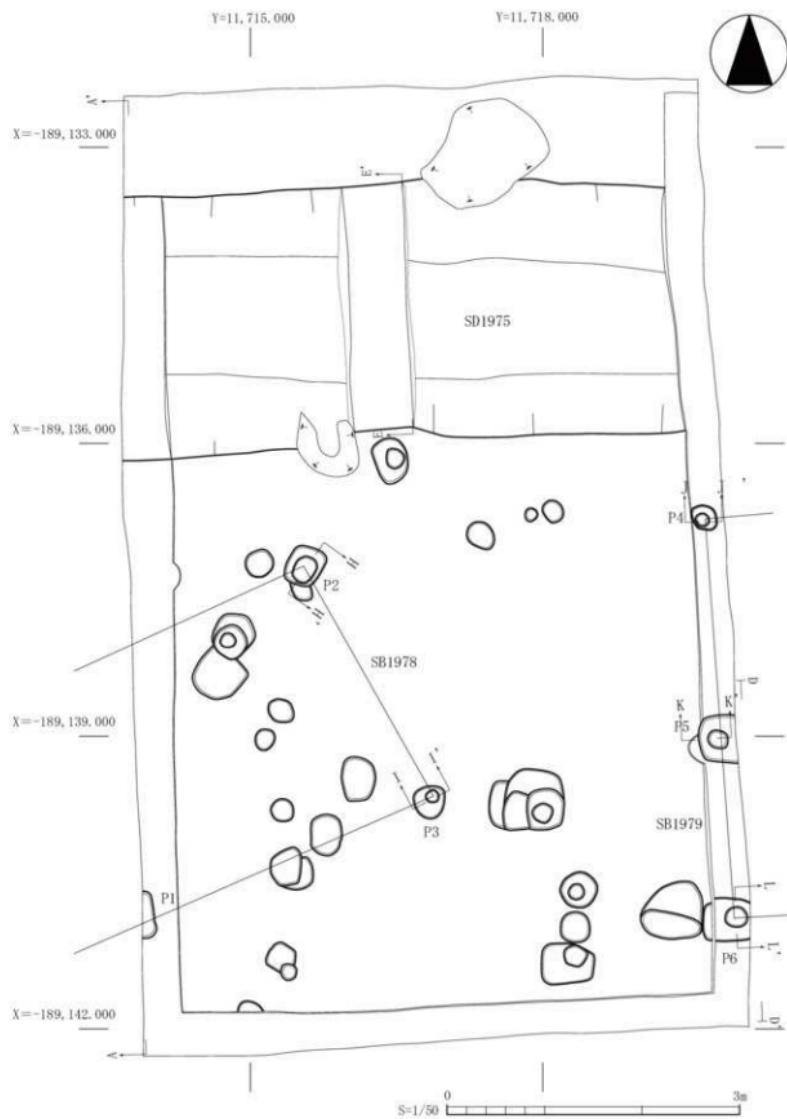


第11図 S D 1975溝跡断面図

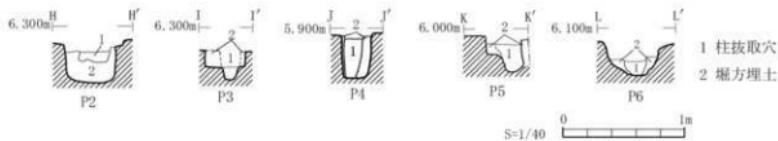


番号	種類	遺構 部位	特 徴		口径 保存率	底径 保存率	器高	写真 図版	登録 番号	備 考
			外 面	内 面						
1	黒釉陶器 蓋	SD1975 C	ナデ	ナデ	—	—	—		R11	
2	黒釉陶器 蓋	SD1975 C	洞窓、磨成	洞窓、磨成	—	—	—	4-7	R13	
3	黒釉陶器 寸胴	SD1975	ナデ	ナデ、垂乳痕	—	—	—		R14	
4	黒釉陶器 寸胴	SD1975 B	ケズリ→ナデ	摩耗痕、5本単位の筋目	—	—	—		R12	
5	黒釉陶器 寸胴	SD1975 C	ヨコナデ	ヨコナデ、摩耗痕	—	—	—		R16	
6	黒釉陶器 寸胴	SD1975 C	ヨコナデ	ヨコナデ、摩耗痕	—	—	—	4-8	R17	
7	白磁 合子身	SD1975 B			(37) 2/24	(39) 6/24	215	4-11	R21	口縁部と底部下半無釉 中国産
8	土加器・蓋	SD1975 B	ヨコナデ	ハウミガキ	(96) 2/24	—	—		R8	
9	土加器・蓋	SD1975 C	ヨコナデ→ハゲメ	ヨコナデ	(162) 5/24	—	—		R9	
10	土加器 ミニチュア上部	SD1975 B	鈎ナデ	鈎ナデ	51 24/24	35 24/24	4.6	4-5	R3	
11	黒釉陶器 蓋	SD1976 B	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—		R15	常滑產
12	黒釉陶器 蓋	SD1976 B	自然釉	ナデ	—	—	—		R16	常滑產
13	黒釉陶器 蓋	SD1977 1号	ナデ。自然釉	ナデ	—	—	—	4-9	R19	常滑產

第12図 SD 1975・1976・1977溝跡出土遺物



第13図 II 1層上面検出遺構平面図



第14図 SB 1978・1979掘立柱建物跡断面図

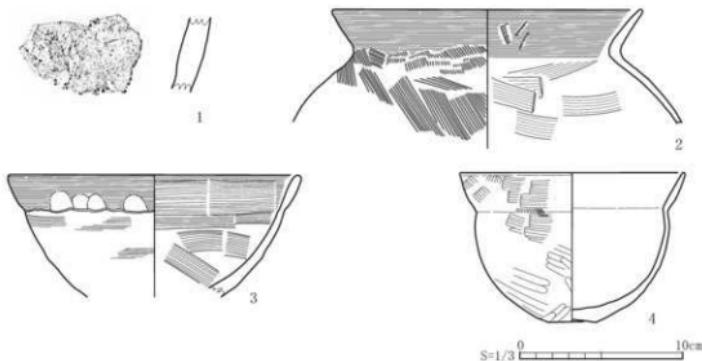
一辺35~50cm、深さ30~70cmである。埋土は暗褐色土であり、灰褐色土粒が多量に混入している。柱抜取り穴埋土は褐灰色土で、炭化物粒が多く混入している。

遺物は、P2埋土より縁釉陶器盤(中国産)の体部破片(写4-14)が出土している。

S B 1979掘立柱建物跡

調査区東端部で発見した南北2間から推定した建物跡で、西側柱列と推測される。全ての柱穴で柱抜取り穴を確認している。方向は北で約3度西に偏している。総長は約4.1m、柱間は北から約2.3m、約1.8mである。掘方の平面形は北西隅柱穴が不整形で、他は隅丸方形を基調とする。規模は北西隅柱穴が一辺25cm、深さ35cmである。他は一辺40~50cm、深さ25cmである。埋土にはぶい黄橙色~ぶい黄褐色土の小プロックが多量に混入する黒褐色砂質土である。柱抜取り穴埋土は暗褐色~灰黃褐色土である。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土している。



第15図 堆積層出土遺物

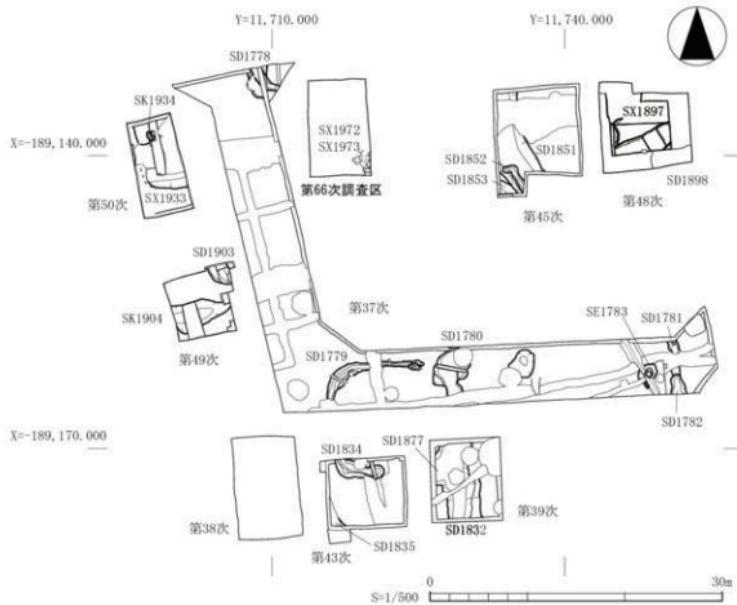
堆積層の出土遺物

Ⅱ1層から古墳時代前期の土師器壺、施釉陶器深皿(写:4-10)、無釉陶器壺、Ⅱ2層から古代の須恵器高台付杯、カワラケ、Ⅲ3層から古墳時代前期の土師器壺・壺、Ⅲ層から古墳時代前期の土師器鉢・壺・瓶、VI層から古墳時代前期の土師器甕が出土している。

(3)まとめ

古墳時代の遺構にはIV層上面で検出したSX1972・1973がある。SX1973はその形態から畠と畠溝の可能性が高く、畠跡の西端の一部を検出したものと考えられる。

特筆すべき遺物には、SX1973埋土1層中から出土した第4図1・2のミニチュア土器2点がある。いずれもほぼ同じ形状を呈しており、基となった器形は台付甕と判断して良いだろう。1には口縁部から体部上半にかけて動物の顔面をデフォルメして表現したものと思われるものが造作されている。右半分は欠損しているが粘土の剥離痕や貫通孔の位置関係からみて、左右対称形に形作られていたと考えられる。2には口縁部から垂下する突起があり、その下の左右に貫通孔が認められる。貫通孔の周辺には粘土の剥離痕が観察されることから、造作部分は欠損しているものとみられる。1の口縁部にも剥離痕と粘土圧着による窪みが観察されることから、2と同様に口縁部から垂下する突起があったものと考えられる。以上のことから、この2点の土器には同様な顔面様の造作がなされていたと推察できる。一般的にミニチュア土器

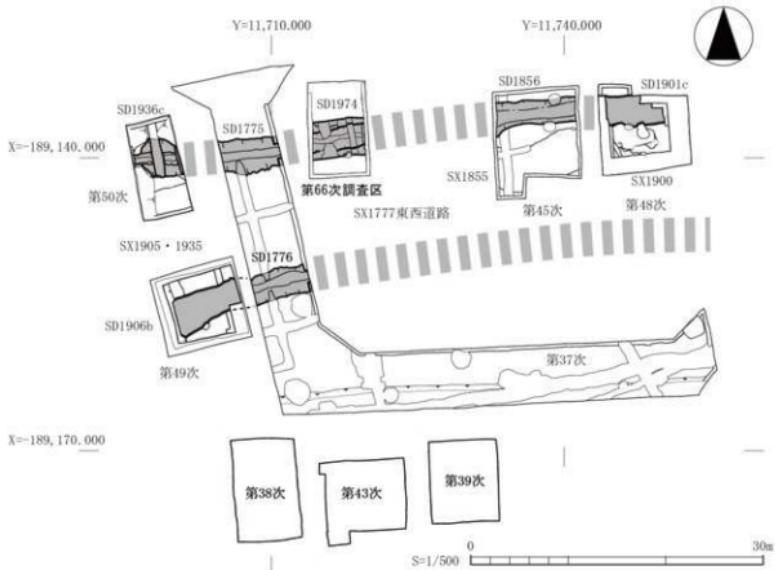


第16図 古墳時代前期の遺構配置図

は祭祀に用いられたものとされているが、本資料には動物の顔面が付加されておりさらに特異性を増している。出土状況からは原位置を保っておらず、痕跡との関係も不明瞭である。この土器の年代については、台付甕のミニチュア土器であるから前期の範疇に収まることは明らかである。近隣調査区での調査成果(村松2009、武田2010)を参考にすると、検出された遺構(溝跡等)の年代は、辻編年(辻1995)のⅢ1～Ⅲ3期にかけてのものとされている。したがって、本遺構とその出土遺物についてもほぼこの頃としておきたい。

奈良時代の遺構としては、S X 1777 東西道路跡・北側溝(S D 1974)を発見した。この道路跡はすでに第37・45・48・49・50次調査区でも検出されており、それらを合わせると長さ約57mまで確認している。道路の規模は幅13.2～16.9m、側溝は3時期の変遷があり、深さは0.8～1.2mであることが判明している。

今回の調査では、想定していた位置で北側溝を確認し、その変遷も第48次調査で把握された3時期の変遷を追認した。年代を特定できる遺物は出土しなかったが、近隣の調査成果(村松2009、武田2010)によると8世紀後半以前の時期とされている。本遺構の評価については、方格地割りの施工以前の東山道と推測されているが、いまだ点的な調査の段階であり、さらなる調査の積み重ねが必要であろう。



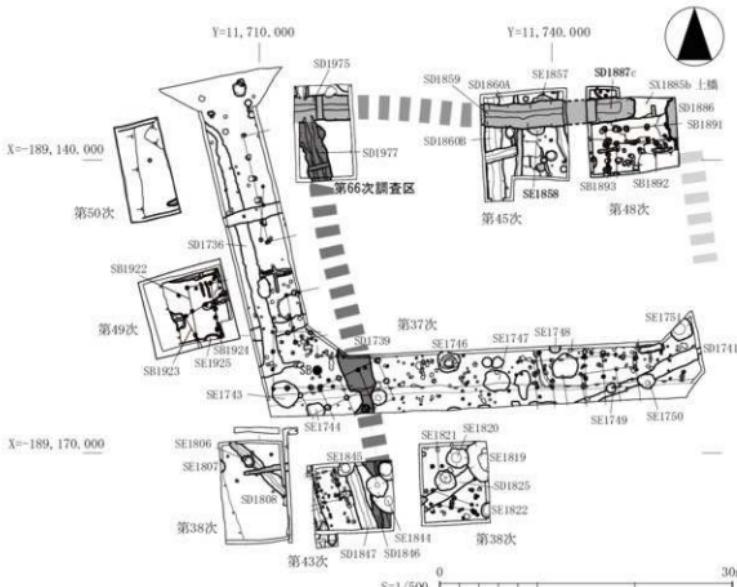
第17図 奈良時代の遺構配置図

中世の主な遺構としては、II 1層上面で S D 1975 東西溝跡と II 3層上面で S D 1976・1977 南北溝跡を発見した。これまでの周辺地域の調査成果によると、12～14世紀の遺構群と15・16世紀の遺構群に大別されることが判明している。ここでは、第52次調査の考察(武田2010)に基づき前者を「中世Ⅰ期」、後者を「中世Ⅱ期」とする。中世Ⅱ期は寿福寺地区において南北310m、東西200m以上の範囲にわたり、大溝をめぐ

らせた屋敷群が機能した時期である。

S D 1976・1977南北溝跡は検出面から中世Ⅰ期に属するものであり、第37次調査区で発見した S D 1739南北溝跡の延長線上に位置することや検出面から同一の溝跡と考えられる。また、S D 1739溝跡は第43次調査の S D 1846溝跡と同一の溝跡とされていることから、ここまで含めると南北約45m以上の長さを有することになる。

S D 1975東西溝跡は検出面から中世Ⅱ期に属するものであり、東側に隣接する第45・48次調査区でも発見されている。特に、第48次調査ではほぼ同位置で3時期の変遷が確認されており、本調査においても同様の成果が得られた。ただし、西側に近接する第37次調査区では検出されていないので、本調査区と第37次調査区において立ち上がるかもしくは北へと屈曲するものと推察される。



第18図 中世の遺構配置図

【引用・参考文献】

- 中野晴久 「生産地における編年について」全国シンポジウム「中世常滑焼をとて」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
中野晴久 「Ⅲ 土器・陶磁器 9. 中世陶器 [2]常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995
辻 秀人 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集』第27号 1995
千葉孝弥 「新田遺跡第37発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第93集 2008
村松 稔 「新田遺跡 第38・39・40・43・45次調査」「多賀城市内の遺跡2—平成20年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第95集 2009
武田健市 「新田遺跡 第48・49・52次調査」「多賀城市内の遺跡2—平成21年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第99集 2010



3 SD 1975溝跡完掘状況(西より)



4 SD 1975溝跡土層断面(東より)



1 II層上面検出遺構完掘状況(南より)



2 調査区南壁土層断面

写真図版1



3 SD 1974 北側溝完掘状況(西より)



4 SD 1974 北側溝土層断面(西より)



1 SD 1977 溝跡完掘状況(北より)



2 SD 1977 溝跡土層断面(北より)



3 ミニチュア土器出土状況①



4 ミニチュア土器出土状況②

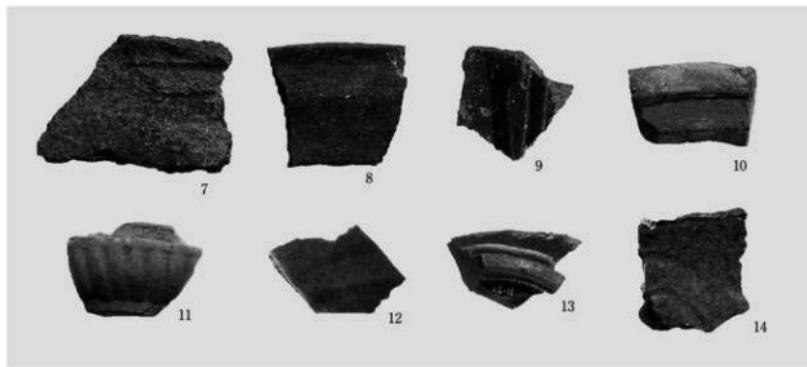
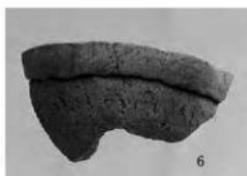
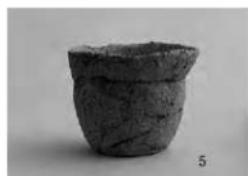


1 SX 1972半截状況(南より)



2 SX 1973完掘状況(南西より)

写真図版3



1～4: S X 1973 5: S D 1975 B 6: III層 7: S D 1975 C 8: S D 1975 B 9: S D 1977
10: II 1層 11: S D 1975 B 12: S D 1975 C 13: S D 1975 B 14: S B 1978

写真図版4

VI 新田遺跡第67次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成22年10月5日に地権者より当該地区における個人住宅建設と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎工事の際に径20cm、長さ6.0mの杭を33本を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が図れないか協議を行ったが、建物を支える十分な強度が得られないことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、10月29日に地権者より発掘調査に關わる依頼・承諾書の提出を受け、第67次調査として実施に至したものである。

調査は11月10日より開始し、重機を使用して盛土（第Ⅰ層）以下、第Ⅱ層まで除去した。掘削土は、調査対象地内の安全と調査面積確保のため、全て場外へ搬出した。翌日、作業員を動員して最初に土層観察と排水を兼ねた側溝を掘る。これらの作業と並行して遺構検出作業と平面図作成のための基準点の設定も行う。検出作業の結果、調査区の中央部で東西方向の溝跡と南北方向に延びる溝跡と北東部で土壤状の落ち込みも発見した。重複関係を検討後、同時に遺構の新旧順に写真撮影、平面・断面図作成を行い、これらの遺構の埋土を掘り上げた。30日調査区の全景写真撮影後、東・西壁の土層堆積状況の断面図を作成した。12月1日に土層の注記、2日には埋め戻し作業を行って、現地調査を終了した。

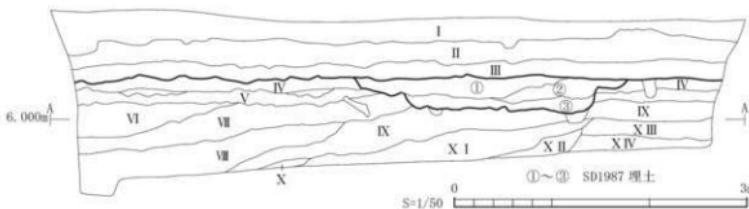
2 調査成果

（1）層序

- 調査区内の層序は、調査区全域に堆積している盛土（第Ⅰ層）を除去すると、以下の層序が確認できた。
- 第Ⅱ層 調査区全域に堆積している。固くしまった暗褐色土で、厚さは5～35cmである。
 - 第Ⅲ層 調査区全域に堆積している。しまりの強い暗褐色土で、厚さは10～20cmである。
 - 第Ⅳ層 調査区全域に堆積している。にぶい黄褐色土で、厚さは10～20cmである。
 - 遺構検出面となっている。
 - 第Ⅴ層 調査区全域に堆積している。にぶい黄褐色土で、厚さは5～15cmである。
 - 第Ⅵ層 調査区南側に堆積する。粘性・しまりの強いオリーブ褐色土で、厚さは5～35cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 層序(調査区西壁断面図)

第VII層 調査区南側に堆積する。酸化鉄を含むオリーブ褐色土で、厚さは12～25cmである。

第VI層 調査区南側に堆積する。粘性・しまりのある暗灰黄色土で、厚さは2～45cm以上である。

第IX層 調査区北側から南側にかけて堆積する。粘性の強い砂質土を主体とする暗灰黄色土で、厚さは8cm以上である。

第X層 調査区北側から南側にかけて堆積する。黄灰色粘土で、厚さは2～32cm以上である。

第XI層 調査区中央部から南側に堆積する。粘性・しまりの強い暗灰黄色土で、厚さは11～35cmである。

第XII層 調査区南側にかけて堆積する。しまりのある黄灰色粘土で、厚さは4～17cm以上である。

第XIII層 調査区北側に堆積する。砂を主体とした灰黄褐色土で、厚さは17～21cmである。

第XIV層 調査区北側に堆積する。しまりの強い灰黄褐色土で、厚さは6～25cm以上である。

第II層～第V層は調査区全域に分布しているが、第VI層～第XIV層は、調査区北側から南側に堆積している

(2) 発見遺構と遺物

溝2条と土壙6基発見した。遺構検出面は第IV層上面である。

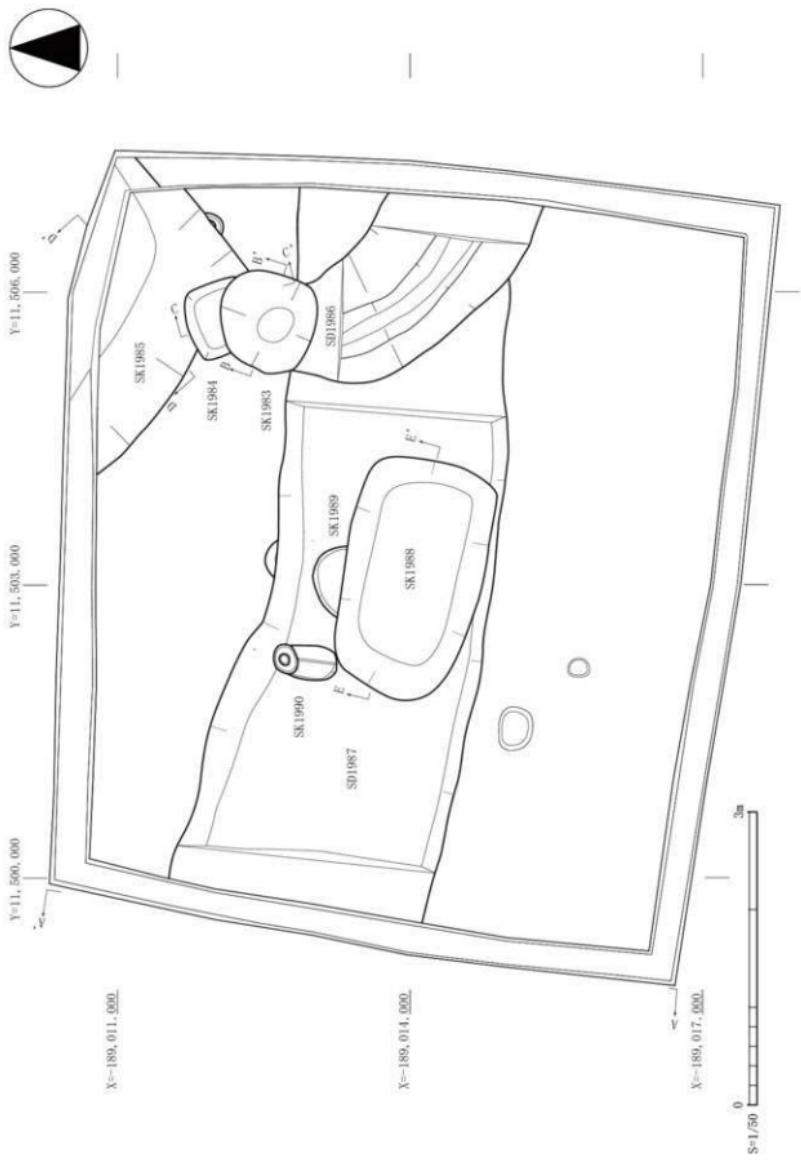
S D 1986溝跡(第3図)

調査区東半部で発見した。東側より鍵状に屈曲する北方向の溝跡である。S K 1983より古く、S D 1987より新しい。確認できた長さは約2.3mで、東は調査区外に延び、北は破壊されているため、不明である。溝の底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は上幅0.95m～1.34m、深さ約0.5mである。埋土は3層に分けられる。1層は砂を含んだ暗褐色土、2層は酸化鉄を含んだ褐色土、3層は酸化鉄を含んだ黄褐色土の順に堆積している。出土遺物は土師器甕(B類)である。

S D 1987溝跡(第3図)

調査区中央部で発見したのは発掘基準線に沿った東西方向の溝跡である。S K 1983、S D 1987より古い。確認できた長さは約8mで、東西は調査区外に延びている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は上幅約2.3m前後、深さ約0.25mである。埋土は3層に分けられる。1層はしまりのある黒褐色土、2層は黒褐色土をブロック状に含んだ暗褐色土、3層は粒子の細かい砂質土や酸化鉄を含んだ褐色土である。出土遺物は土師器杯・甕(B類)、須恵器杯・甕である。

第3図 遺構平面図



S K 1983土壤(第3・4図)

調査区の東半部で発見した。平面形は隅丸方形を呈している。S K 1983・1984、S D 1987より新しい。確認できた規模は一辺約1m、深さ0.3mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は粘性、しまりに欠ける暗オリーブ褐色土、2層は粘性、しまりのあるオリーブ褐色土である。出土遺物は須恵器甕である。



第4図 S K 1983土壤断面図

S K 1984土壤(第3・5図)

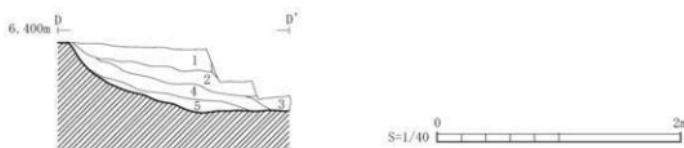
調査区東半部で発見した。S K 1983によって破壊されているが、平面形は方形を呈するものと見られる。S K 1983より古く、S K 1984、S D 1986より新しい。確認できた規模は一辺約0.7m、深さ0.22mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は粘性のあるオリーブ褐色土、2層は粒子の粗い砂層を含むオリーブ褐色土である。



第5図 S K 1984土壤断面図

S K 1985土壤(第3・6図)

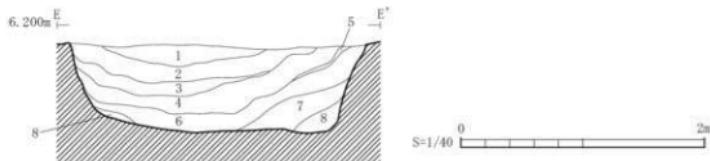
調査区の北東隅で発見した。大半が調査区外に及んでいるため全体の形態は不明である。S K 1983・1984より古い。確認できた規模は南辺2.6m以上、東辺1.8m以上、深さ約0.5mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は5層に分けられる。1層は酸化鉄や地山粒子、粒子の粗い砂を含んだ黄褐色土、2層は褐色土、3層は酸化鉄・粒子の細かい砂を含んだ灰黄褐色土である。4層は酸化鉄や粒子の細かい砂を含んだぶい黄褐色土で、5層は酸化鉄を含んだぶい黄褐色土である。出土遺物は土師器甕(B類)である。



第6図 S K 1985土壤断面図

S K 1988土壤(第3・7図)

調査区中央部付近で、S D 1987の埋土を掘り上げた後に発見した。S K 1989より新しい。平面形は方形を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。確認できた規模は東西約2.4m、南北約1.4m、深さ約0.7mである。埋土は8層に分けられる。1・2層は酸化鉄を多く含んだぶい黄褐色土、3層は酸化鉄を多く含んだ灰黄褐色粘土、4層は黒褐色粘土、5層は4層と6層に直接はさまれた炭化物をブロック状に含んだ黒色土である。6層は木片や酸化鉄、砂を含んだ灰黄色褐色土、7層は砂質に富んだ黒褐色土で8層は柔らかい灰褐色粘土である。出土遺物は須恵器甕である。



第7図 SK 1988土壤断面図

S K 1989土壤(第3図)

調査区中央部付近で、S D 1987の埋土を掘り上げた後に発見した。S K 1988より古い。平面形は南側を破壊されているが方形を呈するものと見られる。底面は平坦で、壁の北は垂直に立ち上がる。確認できた規模は東西0.65m以上、南北0.2m以上、深さ5cmである。埋土は2層に分けられる。1層は暗オリーブ褐色土、2層は砂を含んだオリーブ褐色土である。

S K 1990土壤(第3図)

調査区中央部付近で、S D 1987の埋土を掘り上げた後に発見した。平面形は北側を破壊されているが方形を呈するものと見られる。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認できた規模は南北0.4m以上、東西0.35m以上、深さ4cmである。埋土はしまりのある黄褐色粘土の単層である。

3まとめ

今回の調査で発見した遺構は溝跡2条、土壙6基である。これらの遺構の新旧関係を整理すると以下のようになる。



発見されたこれらの遺構の年代について考えると、出土した土器は土師器、須恵器が主体で量もわずかである。土師器杯はロクロ調整で内面はヘラミガキ黑色処理されている。甕はすべてB類である。底部の切り離しがわかるものは、第II層からB V類が1点出土しているのみである。出土遺物から見て、古代の範疇に収まるものではあるが、決め手に欠けるため、ここでは広く古代～中世と考えておきたい。



調査区 全景
(東より)



北東コーナー 遺構群
(東より)



S K 1988 完掘状況
(南より)

VII 新田遺跡第68次調査

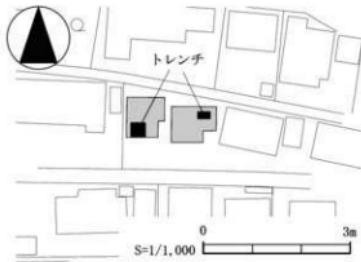
1 調査に至る経緯と経過

本調査は、建壳住宅2棟の建築に伴う発掘調査である。平成22年11月、地権者より当該区における建壳住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約60cm、長さ7.25mの深基礎を打ち込むことと、最深60cmの掘削を伴う給排水管付設及び最深90cm掘削を施す外構工事等が示されていた。深基礎を打ち込むことによる埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、直ちに遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したため、本調査に至ったものである。平成23年1月27日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、2月2日に現地調査を行った。対象区の西側より重機による表土除去を開始したが、約45cmの現表土（盛土）下は、締まりの弱い暗褐色砂質土、黒褐色粘土層、灰オリーブ色粘質土、オリーブ褐色粗砂、にぶい黄色砂の堆積が順次認められるのみであり、遺構・遺物は発見されなかった。現

表土下23mに至っても粗砂が堆積するのみであったことや、周辺地区で認められる安定した遺構検出面が確認されないことから、当該区は河川またはその氾濫原であったと判断し、調査的一切を終了した。

2 調査成果

上層は粘土または粘質層、下層は砂層が厚く堆積しており、遺構・遺物は発見されなかった。



第2図 トレンチ配置図



第1図 調査区位置図

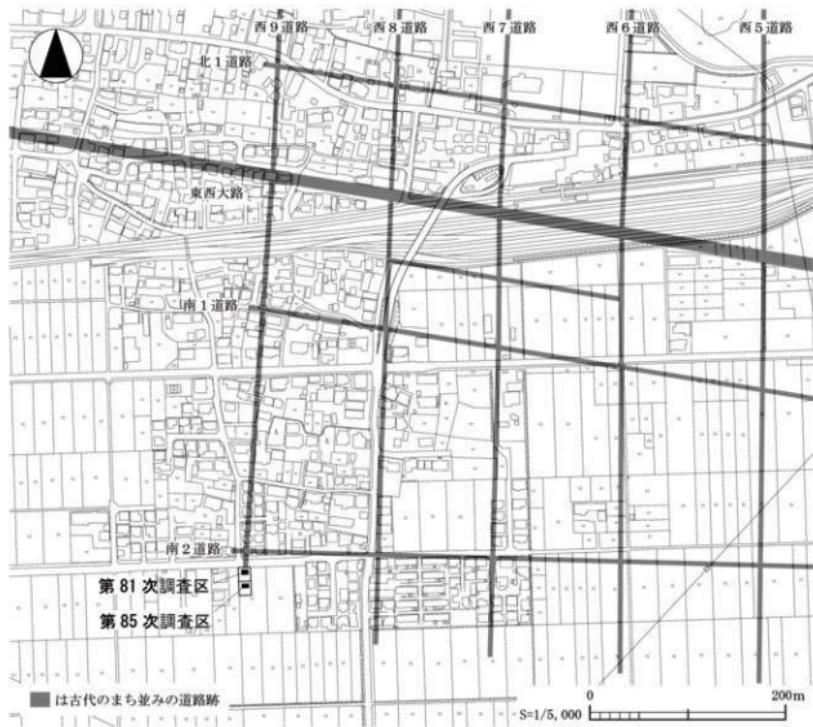


掘削状況写真

VIII 山王遺跡第81・85次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字山王四区地内の同一地割内における2棟の個人住宅建設に伴うものである。これらは、南北に隣接しており、北側を第81次調査、南側を第85次調査とした。前者が平成21年12月1日に、後者が平成22年6月21日に、それぞれの地権者より住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、前者が基礎工事の際に直径6cm、長さ6.5mの柱状改良杭を32本打ち込み、一方後者は直径50cm、長さ5.0mの柱状改良杭を24本打ち込むことから、いずれも地下の遺構への影響が懸念された。このため、盛土や工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行った。しかし、両者とも対象地の現況や地盤の強度等から考慮して、現計画での実施が最も望ましいとの理由により、記録保存のための本発掘調査を実施することに至った。



第1図 調査区位置図

〔第81次調査〕

平成22年3月30日に、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、4月9日から現地調査を開始した。はじめに、重機により現代の盛土及び水田耕作土の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。続いて、遺構検出作業に着手し、調査区の東側と西側で南北方向の溝跡（東側：S D 1503溝跡、西側：S D 1502溝跡）を検出した。これについては、調査区南壁沿いで排水溝を兼ねた深堀りを行ったところ、西側で4時期、東側で整地層を挟んで2時期の変遷を確認した。このことから、多賀城南面における方格地割を形成する道路網のうち、西9南北道路に相当する可能性が考えられた（4月14日）。4月15日からは、これらの溝跡の埋土掘り下げを開始し、併せて、実測図作成のための測量を行った。その後、路面の構築土と推定される土層や、道路造成に伴うとみられる波板状の圧痕などを確認したことから、西9道路と考えて問題ないと判断に至った（5月1日）。最後に、調査区南壁において断面図作成及び各遺構の新旧関係を再確認し、5月14日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

〔第85次調査〕

平成22年8月17日に、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、8月18日から現地調査を開始した。はじめに、重機により現代の盛土及び水田耕作土の除去を行い、掘削した土砂は東側隣接地へ搬出した。続いて実施した遺構検出作業の結果、調査区西側で規模の大きな南北方向の溝跡（S D 1505溝跡）を検出した。第81次調査と同様、調査区南壁沿いで排水溝を兼ねた深堀りを行ったところ、規模や形態、埋土の状況等から、当該地周辺で発見されている中世の区画溝と極めて類似するため、同様の遺構と考えられた。このため、第81次調査区から延びてくると予想された西9道路の西側溝は、この溝跡によって壊されていると判断された（8月21日）。一方、調査区東側においては、特徴的な黒色粘質土である堆積土IV2層が分布することを確認した。これを除去したところ、規模の大きな土壤（S K 1511土壤）と、これに切られる南北方向の溝跡（S D 1503 b溝跡）を検出した。なお、後者については、西9道路の東側溝と考えられた（8月31日）。また、8月21日からは、S D 1505溝跡とこれに切られる東西方向の小溝群（S X 1512小溝群）の埋土掘り下げを開始した。引き続き、S K 1511土壤とS D 1503 b溝跡の埋土掘り下げ、実測図作成等を順次行った（9月17日）。最後に、調査区南壁において断面図作成及び各遺構の新旧関係を再確認し、9月30日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

2 調査成果

（1）層序

今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである。

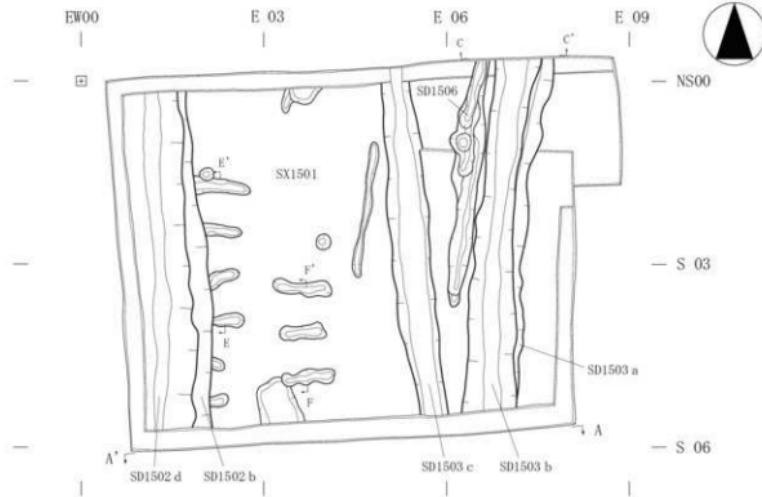
I 層：灰黄色砂で、厚さは60～80cmである。現代の盛土。

II 層：灰色土で、厚さは15～20cmである。現代の水田耕作土。

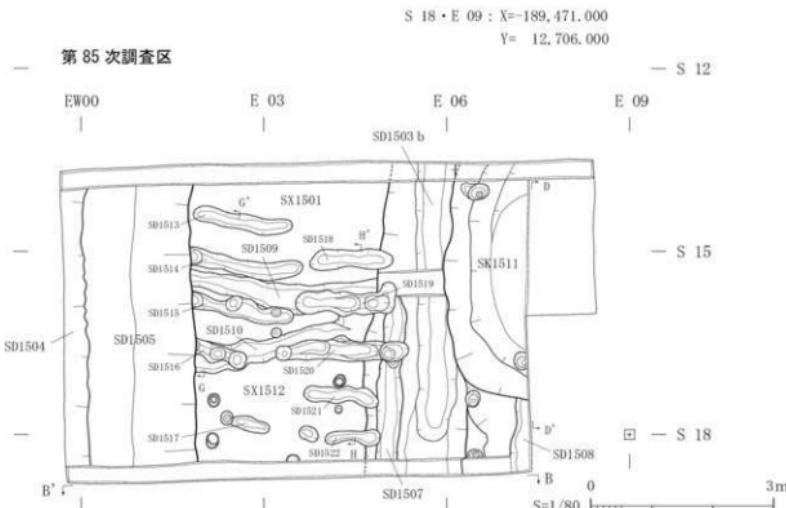
III 層：黒褐色土で、厚さは5～10cmである。第81次調査区の北東部を中心に分布する。にぶい黄色土を若干混入している。

IV1層：黒褐色土で、厚さは5～8cmである。第85次調査区の東壁中央付近に限定期に分布する。灰黄褐色砂質土を混入している。

IV2層：黒色粘質土で、厚さは5～10cmである。第85次調査区の東側に分布する。黄灰色の粘質土及び砂質土を混入している。上面は、S X 1512小溝群の検出面である。

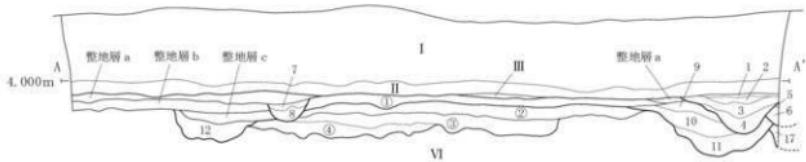


NS00・EW00 : X=-189,453.000
Y= 12,697.000

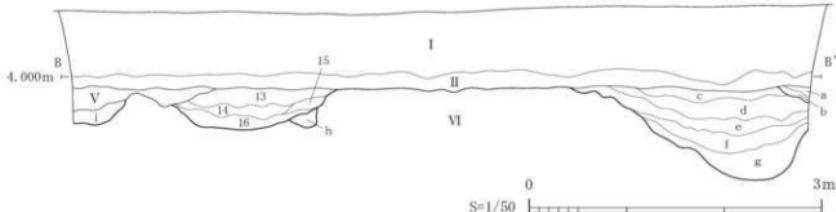


第2図 第81・85次調査区平面図

第81次調査区



第85次調査区



土層觀察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD1502d 墓土			SD1502a 墓土		
1	灰黃褐色土		17	黒褐色土	にぶい黄色土を斑状及びブロック状に多く含む。
2	黒褐色土	にぶい黄色土を斑状に含む。			
3	黒色粘質土	暗灰黄色土を斑状及びブロック状に含む。	①	暗灰黄色 砂質土	C・D期に対応する路面構築土。
4	黒褐色 粘質土	暗灰黄色土と黄灰色土を斑状及びブロック状に多く含む。また、炭化物を若干含む。	②	暗灰黄色 砂質土	にぶい黄色土を斑状に含む。 A・B期に対応する路面構築土。
SD1502c 墓土			道路構築土か		
5	暗灰黄色土	灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む。	③	黄灰色土	にぶい黄色土を斑状及びブロック状に含む。構造の 落ちる墓土。板状の任痕と同様の性格のものか。
6	暗灰黄色土	にぶい黄色土を斑状に若干含む。	④	黄灰色土	にぶい黄色土を斑状及びブロック状に多く含む。
SD1503c 墓土			SD1504 墓土		
7	暗灰黄色土	灰白色火山灰を多量に含む。	a	黒褐色 粘質土	
8	暗灰黄色土	灰白色火山灰を斑状に若干含む。	b	黒褐色 粘質土	黄灰色砂を多量に混入。
SD1502b 墓土			SD1505 墓土		
9	暗灰黄色土		c	暗灰黄色土	黄灰色砂を若干混入。
10	暗灰黄色土	にぶい黄色土を斑状に若干含む。	d	暗灰黄色土	黄褐色土と黒色土を斑状及びブロック状に多く含む。
11	黄灰色土	にぶい黄色土と黒褐色土を斑状及びブロック状に含む。	e	黄灰色粘土	植物遺存体を若干含む。
SD1503b 墓土			f	黒褐色粘土	植物遺存体を含む。
12	黒褐色土	にぶい黄色土を斑状及びブロック状に含む。	g	黒色粘土	黄灰色を若干混入。植物遺存体を含む。
13	暗灰黄色土	酸化鉄斑を含む。	SD1507 墓土		
14	黄灰色土	粘性ややあり。にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む。	h	黒褐色 粘質土	にぶい黄色砂質土と黄灰色土を斑状及びブロック状に含む。
15	黄灰色 砂質土	にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む。	SD1508 墓土		
16	黄灰色 粘質土	にぶい黄色砂質土を斑状及びブロック状に多く含む。	i	暗灰黄色 砂質土	黄灰色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。

第3図 第81・85次調査区南壁断面図

V 層：黄灰色土で、厚さは10～20cmである。IV 2層とはほぼ同じ位置に分布するが、その範囲はやや広い。やや砂質気味の土層である。

VI 層：にぶい黄色粘質土で、両調査区の基盤となる土層である。同色の砂質土を混入している。上面は、古代の遺構検出面である。

整地層 a：灰黄色土で、厚さは5～10cmである。第81次調査区の南半部で認められる。灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。調査区西側では、上面が S D 1502 d 溝跡の検出面であり、東側では、S D 1503 c 溝跡を覆っている。

整地層 b：黄灰色土で、厚さは6～10cmである。第81次調査区の東側で認められる。上面は S D 1503 c 溝跡の検出面である。

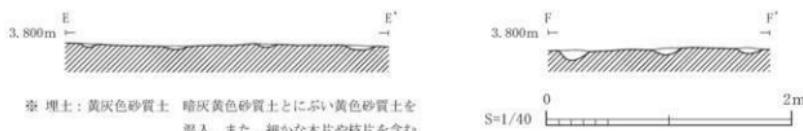
整地層 c：黄灰色土で、厚さは5～15cmである。第81次調査区の東側で認められる。にぶい黄色土を斑状に若干含んでいる。S D 1503 b 溝跡を覆う土層である。

(2) 発見遺構と遺物

S X 1501 西9南北道路跡 (第2・3・5・6図)

第81次調査区と第85次調査区にまたがる南北道路跡である。重複関係から S D 1505 溝跡、S X 1512 小溝群より古く、S D 1506・1507・1509・1510 溝跡より新しい。南北大路から約1,130m西に位置しており、城外の方格地割のうち、西9南北道路に相当する。東西両側に素掘りの側溝（西側溝：S D 1502、東側溝：S D 1503）を伴っており、これらの新旧関係と、介在する整地層（整地層 a～c）から、4時期（A～D期）の変遷があることを確認した。長さは、最も残存状況が良好なB期の東側溝でみると、第81次調査区から第85次調査区にかけて19.2mを測る。また、第81次調査区においては、2時期の路面が認められた。下層の路面は、標高3.75～3.80mを測り、A期とB期に対応すると推定される。VI層の上面に、にぶい黄色土を斑状に含む暗灰黄色砂質土によって、10～14cmの厚さでかさ上げされている。さらに、VI層の上面では、道路構築に伴うと推定される波板状の圧痕（第2・4図）が検出された。一方、上層の路面は、標高3.80～3.88mを測り、C期とD期に対応する。下層の路面上に、暗灰黄色砂質土によって、6～10cmの厚さでかさ上げされている。なお、第85次調査区においては、VI層が側溝の検出面になっており、路面構築土や整地層は確認できなかった。

A期：西側溝（S D 1502 a）と東側溝（S D 1503 a）を確認したが、いずれも第81次調査区での検出である。西側溝は、後続する各時期に上部を壊されているうえ、中心部が調査区外にかかるため、底面付近の一部しか検出できなかった。また、第85次調査区では、S D 1505 溝跡によってすべて壊されていると考えられる。一方、東側溝は、後続するB期とはほぼ同じ位置で重複するため、第81次調査区で東壁付近を検出した

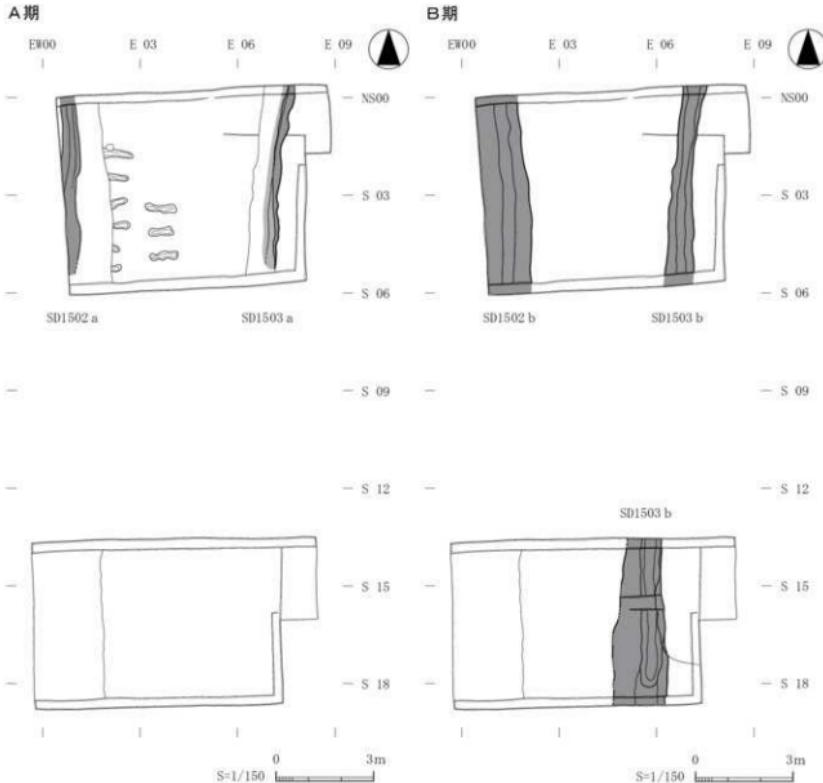


第4図 S X 1501道路跡(波板状の圧痕)断面図

のみである。さらに、第81次調査区南壁近くから第85次調査区にかけては、すべてB期によって壊されていると考えられる。方向は、東西両側溝とも湾曲して延びるため場所によって異なり、SD 1502 aで北半部が北で約6度西に、南半部が北で約2度東に偏している。SD 1503 aでは、北半部が北で約9度東に、南半部が北で約3度東に偏している。規模は、第81次調査区の西側溝でみると、下幅15～21cmで、深さは路面から約50cmである。底面は丸みをもち、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は東西両側溝とも、にぶい黄色土や黄灰色土を斑状及びブロック状に多く含む黒褐色土の単層である。遺物は、底部がヘラ切りで、再調整されない須恵器杯の破片が、西側溝から1点出土しているのみである。

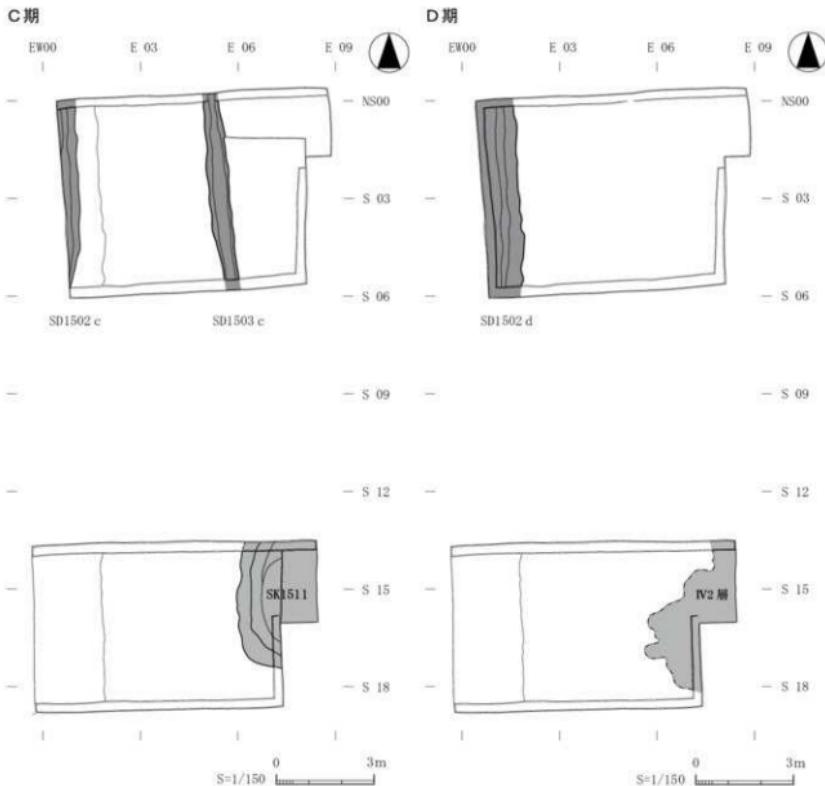
B期: 西側溝(SD 1502 b)と東側溝(SD 1503 b)を確認した。ただし、第85次調査区では、西側溝はSD 1505溝跡によってすべて壊され、東側溝はSK 1511土壤によって東壁の一部が壊されている。なお、第81次調査区では、西側溝が上層の路面土に、東側溝が整地層cにそれぞれ覆われることを確認した。路幅は、第81次調査区でみると、側溝心々間で5.28m～5.92mである。方向は、西側溝が、湾曲して延びる第81次調査区でみると、北半部が北で約7度西に、南半部が北で約1度東に偏している。東側溝は、第81次調査区では北で約6度東に、第85次調査区では北で約4度東に偏している。規模は、西側溝は上幅140cm以上、下幅34～44cmで、深さは第81次調査区南壁でみると50cmである。東側溝は、第81次調査区では上幅50～88cm、下幅18～35cmで、深さは調査区南壁でみると34cmである。一方、幅の広がる第85次調査区では上幅115～162cm、下幅26～34cmで、深さは調査区南壁でみると43cmである。底面はやや凹凸があり、壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。なお、第85次調査区では、東側溝の西壁において、底面近くで段を有する。また、東側溝をみると、第81次調査区北端と南端及び第85次調査区南端における底面の標高は、それぞれ3.36m、3.38m、3.46mで、南側が若干高くなっている。埋土は、西側溝が3層に分けられる。暗灰黄色土～黄灰色土を主体としており、にぶい黄色土や黒褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。東側溝は、第81次調査区がにぶい黄色土を斑状及びブロック状に含む黒褐色土の単層であるのに対し、第85次調査区では4層に分けられる。しかし、いずれも黄灰色土を主体とする近似した土層である。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・瓶・壺が出土しているが、大部分が破片である。なお、杯は底部が回転ヘラケズリ調整されているもの(第9図2)と、回転糸切りで再調整されないものが、各1点出土している。

C期: 西側溝(SD 1502 c)と東側溝(SD 1503 c)を確認したが、いずれも第81次調査区での検出である。西側溝は、西半分が調査区外にかかるうえ、東半分も後続するD期に大部分を壊されているため、底面付近の一部しか残存していない。東側溝は、先行するB期に対し、0.9～19m西側にずれており、方向もやや異なる。また、調査区南壁の断面観察において、西側は上層の路面の上面から、東側は整地層bの上面から、それぞれ掘り込まれており、さらに整地層aに覆われることを確認した。路幅は、第81次調査区北端でみると、側溝心々間で4.45mである。方向は、東側溝でみると、北で約7度西に偏している。規模は、上幅45～70cm、下幅18～43cmで、深さは調査区南壁でみると24cmである。底面は丸みをもち、壁は湾曲しながら比較的急に立ち上がる。埋土は、東西両側溝とも2層に分けられ、すべて暗灰黄色土である。西側溝の上層は、灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含み、下層はにぶい黄色土を斑状に含んでいる。東側溝の上層は、灰白色火山灰を多量に含む土層であり、下層は灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。なお、第85次調査区においては、東側溝の延長上にSK 1511土壤が位置するが、この埋土の中頃に灰白色火山灰が厚く堆積する土層が認められることから、両者は同じ時期に機能していたと考えられる。遺物は、土師器杯・壺の破片が各1点出土しているのみである。



第5図 S X 1501南北道路跡変遷図（A期・B期）

D期: 第81次調査区で西側溝（SD 1502 d）を確認したが、西端部がわずかに調査区外にかかると推定される。また、調査区南壁の断面観察において、上層の路面の上面及び整地層aの上面から掘り込まれていることを確認した。一方、調査区内では東側溝は検出されなかった。これに関連して、D期に対応する上層の路面の上面と、この東側に認められる整地層aの上面が、一続きの平坦面を形成していることを確認した。しかし、両者を一連の路面と捉えることできるか否かは、判然としなかった。西側溝の方向は、北で約2度西に偏している。規模は、上幅140cm以上、下幅18～30cmで、深さは調査区南壁でみると40cmである。底面は丸みをもち、壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。埋土は、4層に分けられる。黒褐色と黒色の粘質土を主体とし、特に3層は、黄灰色の粘質土を斑状及びブロック状に含む黒色粘質土で、土色、土質とも特徴的な土層である。なお、第85次調査区の東側においては、堆積土のIV2層が、C期と同時期のSK 1511土壌のプランに重なるように分布するが、このIV2層と西側溝の埋土3層は、同じ土層と考え



第6図 S X 1501南北道路跡変遷図 (C期・D期)

られる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、丸瓦の破片が出土している。

S D 1504溝跡 (第2・3図)

第85次調査区の西端で検出した南北方向の溝跡である。半分以上が調査区外にかかると推定される。S D 1505溝跡と重複し、これより新しい。確認できた長さは約5.1mである。方向は、北で約1度西に偏している。規模は、上幅45cm以上、深さは17cm以上である。底面の状況は不明であり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、いずれも黒褐色粘質土であり、下層は黄灰色砂を多量に混入する。遺物は出土していない。

S D 1505溝跡 (第2・3図)

第85次調査区西端のVI層上面で検出した南北方向の溝跡である。西壁の約1/3が調査区外にかかると推定される。重複関係からS D 1504溝跡より古く、S D 1509・1510溝跡、S X 1512小溝群より新しい。確認

できた長さは約5.1mである。方向は、北で約2度西に偏している。規模は、上幅22m以上、下幅0.65～1.05mで、深さは調査区南壁でみると0.92mである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は5層に分けられる。土色は暗灰黄色～黒色で、下層ほど色調が濃くなり、さらに粘性も強くなる。また、3～5層には植物遺存体が含まれる。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯（第9図1）・壺が出土している。

S D 1506溝跡（第2・7図）

第81次調査区東半部で検出した南北方向の溝跡である。調査区北壁の断面観察から、S D 1503 b溝跡と重複し、これより古い。確認できた長さは約4.1mである。方向は、北で約6度東に偏している。規模は、上幅22～47cm、下幅5～11cmで、深さは検出面から15～22cmである。底面は、溝状及びピット状に落ち込む箇所が認められ、一様ではない。壁は比較的急に立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、いずれも黄灰色砂質土である。下層ほどにぶい黄色砂質土を多く含む。遺物は、土師器壺、須恵器杯・壺の破片が出土している。

S D 1507溝跡（第2・3図）

第85次調査区東半部で検出した南北方向の溝跡である。S D 1503 b溝跡と重複し、これより古い。確認できた長さは約2.9mである。方向は、北で約5度東に偏しており、S D 1506溝跡のほぼ延長線上に位置している。規模は、上幅30～41cm、下幅15～20cmで、深さは検出面から8～18cmである。底面は丸みをもち、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は、にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む黒褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

S D 1508溝跡（第2・3・7図）

第85次調査区東端で検出した南北方向の溝跡である。S K 1511土壙と重複し、これより古い。確認できた長さは約1.2mである。方向は、北で約3度東に偏している。東側が調査区外にかかっているため、幅は不明である。深さは、調査区南壁でみると約25cmを測る。底面はやや平坦で、壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。埋土は、2層に分けられる。上層は、黄灰色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に含む暗灰黄色砂質土である。一方、下層は黄灰色土を斑状及びブロック状に若干含む暗灰黄色砂である。遺物は出土していない。

S D 1509溝跡（第2図）

第85次調査区中央付近のVI層上面で検出した東西方向の溝跡である。S D 1503 b・S D 1505溝跡、S X 1512小溝群と重複し、これらより古い。確認できた長さは約3.1mである。方向は、蛇行気味に延びるため一様ではなく、東で約4度北に偏する箇所から、約8度南に偏する箇所までと幅がある。規模は、上幅26～50cm、下幅8～32cmで、深さは検出面から約5cmである。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色土とにぶい黄色砂質土を斑状及び小ブロック状に多く含む黒褐色土の単層である。遺物は、土師器壺の破片が1点出土している。

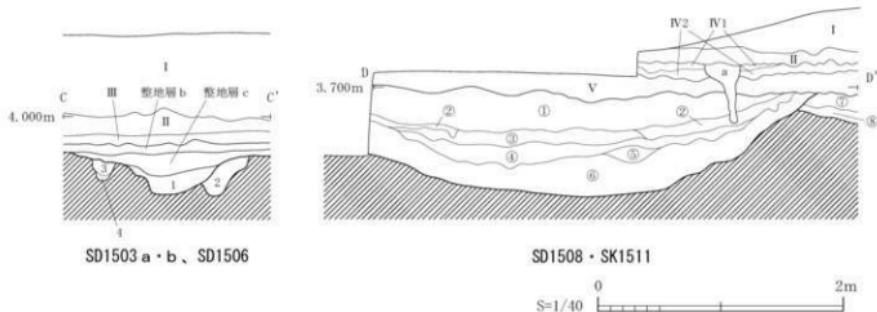
S D 1510溝跡（第2図）

第85次調査区中央付近のVI層上面で検出した東西方向の溝跡である。S D 1503 b・S D 1505溝跡、S X 1512小溝群と重複し、これらより古い。S D 1509溝跡の南側に位置し、同様の性格をもつものと推定される。確認できた長さは約2.6mである。方向は、蛇行気味に延びるため一様ではなく、東で約12度北に偏する箇所から、約2度南に偏する箇所までと幅がある。規模は、上幅30～50cm、下幅14～24cmで、深さは検出面から約5cmである。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色土とにぶい黄

色砂質土を斑状及び小ブロック状に多く含む黒褐色土の単層である。遺物は、土師器杯・甕の破片が出土している。

S K 1511土壤(第2・7図)

第85次調査区東側で検出した規模の大きな土壤で、堆積土のV層に覆われる。SD 1503 b溝跡と重複し、これより新しい。東側が調査区外にかかるため形態や規模等の詳細は不明であるが、調査区内でみると南北に長い楕円形状を呈する。規模は、東西1.4m以上、南北3.8m以上、深さは調査区東壁でみると約0.8mである。底面は丸みをもち、壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。埋土は6層に分けられる。1層は黄灰色粘質土で、2層は灰白色火山灰を斑状及びブロック状に多く含む黄灰色土である。3層は厚さ10cm前後の灰白色火山灰層である。4~6層は黒褐色粘質土で、下層ほど植物遺存体を多く含んでいる。遺物は、土師器杯(第9図4)・甕(第9図5)、須恵器杯・甕、須恵系土器杯(第9図3)が出土している。



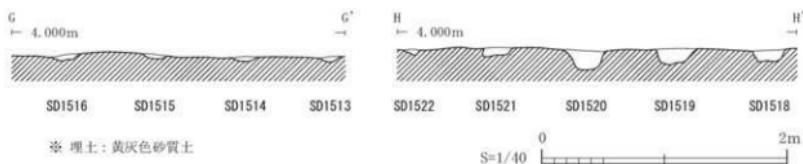
土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD1503b 埋土			③	灰白色土	灰白色火山灰層。
I 黒褐色土	にぶい黄色土と黄灰色土を斑状及びブロック状に含む。		④	黒褐色 粘質土	植物遺存体を若干含む。
SD1503a 埋土			⑤	黒褐色 粘質土	黄褐色土と黑色粘質土を混入。
2 黒褐色土	にぶい黄色土と黄灰色土を斑状及びブロック状に多く含む。		⑥	黒褐色 粘質土	同色の紗質土を混入。植物遺存体を含む。
SD1506 埋土			SD1508 埋土		
3 黄灰色 砂質土	にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む。		⑦	暗灰褐色 紗質土	黄灰色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。
4 黄灰色 砂質土	にぶい黄色砂質土を斑状及び小ブロック状に多く含む。		⑧	暗灰褐色紗	黄灰色土を斑状及びブロック状に若干含む。
SK1511 埋土			ピット埋土		
① 黄褐色 粘質土			a 黒褐色土		
② 黄灰色土	灰白色火山灰を斑状及びブロック状に多く含む。				

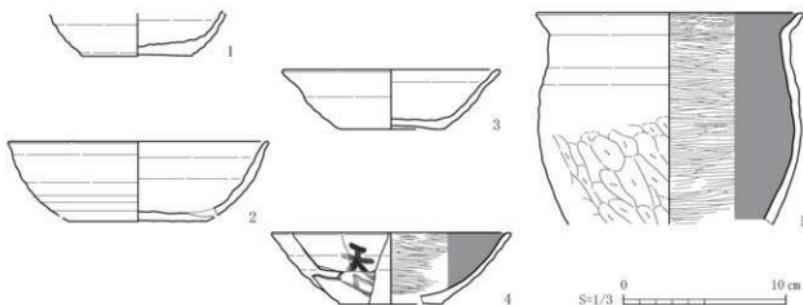
第7図 SD 1503 a-b, SD 1506, SD 1508, SK 1511断面図

S X 1512小溝群(第2・8図)

第85次調査区中央付近のVI層上面で検出した東西方向に並行して延びる小溝跡のまとめである。調査区内では、10条(S D 1513～1522溝跡)の小溝跡を確認した。これらは、配置状況と方向から5条ずつ、2つのグループ(a群・b群)に分けられる。また、両群の間には直接の重複関係はないが、かなり近接する箇所が認められる。西側に位置するa群(S D 1513～1517溝跡)の各溝跡については、規模は上幅18～29cm、下幅7～15cm、検出面からの深さ3～6cmの数値内に収まる。方向は、東でみると8～15度の範囲で南へ偏する。間隔は、南端で64cmを測るが、そのほかは45～50cmである。一方、東側に位置するb群(S D 1518～1522溝跡)の各溝跡については、規模は上幅19～36cm、下幅8～18cm、検出面からの深さ5～15cmの数値内に収まる。方向は、東でみると北と南へそれぞれ1度偏する範囲に収まる。間隔は、44～48cmである。また、全体でみると、底面には凹凸があり、壁は比較的急に立ち上がるものが多くみられる。埋土は、黄灰色砂質土で共通している。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・瓶・壺の破片が出土している。



第8図 S X 1512小溝群断面図

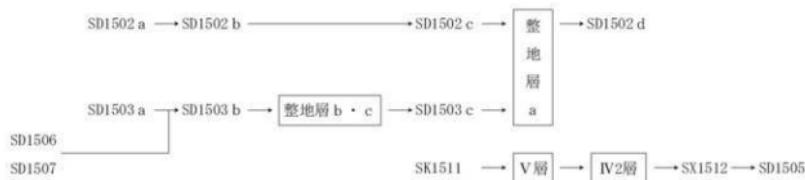


番号	種類	遺構	層位	特徴		L1径 残存率	底径 残存率	器高	備考
				外 面	内 面				
1	須恵器・杯	SD1505	1#	ロクロナデ 底部・内軸あ切り	ロクロナデ	—	6.8 6/24	—	
2	須恵器・杯	SD1503b	1#	ロクロナデ 底部・内軸あけザギリ	ロクロナデ	16.0 4/24	8.4 2/24	4.9	
3	須恵器上蓋 ・杯	SK1511	1#	ロクロナデ 底部・内軸あ切り	ロクロナデ	13.4 4/24	6.6 24/24	3.7	
4	土師器・杯	SK1511	1#	ロクロナデ 底部・内軸あ切り	ヘラミガキ・黑色施釉	14.7 3/24	6.4 4/24	4.4	体部に墨書き「天上」か
5	土師器・壺	SK1511	3#	ロクロナデ 底部下半・内軸あけザギリ	ヘラミガキ・黑色施釉	16.4 2/24	—	—	

第9図 S D 1505、S D 1503 b、S K 1511出土遺物

3 まとめ

今回の調査で発見した遺構は、道路跡1条、溝跡7条、土壤1基、小溝群などである。主要な遺構について、重複関係や基本層序などとの関係から整理すると、下表のようになる。



はじめに、S X 1501 西9南北道路跡についてみると、4時期の変遷のうち c 期の側溝埋土中に灰白色火山灰が多量に含まれることから、c 期については10世紀前葉を中心とした年代が与えられる。これより古い a 期及び b 期については、出土遺物が僅少であり、全体の形態を復元できるものが少ないため、詳細な年代を導き出すことはできない。しかし、明確な非クロロ調整の土師器が出土していないことや、杯類ではクロロからの切り離し後再調整されないものがほとんどであることから、具体的な上限年代は不明ながら、大きく9世紀代での変遷と捉えられる。一方、c 期に続く d 期については、出土した須恵系土器に小型の器種がみられないことなどから、10世紀前葉を大きく下るものではないと考えられる。なお、今回の調査における西9南北道路跡については、c 期の東側溝が SK 1511 土壌を南端部にして止まるような状況を示すことや、d 期の東側溝が検出されず、路面の範囲も明確でないなど、道路の末端部における状況を想起させるような様相をみせる。しかしながら、調査区が狭いことから各遺構とも部分的な検出であるため、ここでは可能性を示唆するだけにとどまる。

次に、S X 1501 道路跡より古い S D 1506 溝跡と S D 1507 溝跡については、両者がほぼ同一線上に並び、S X 1501 道路跡の b 期東側溝に近接または重複する位置関係にあることや、方向を同じにすることなどから、性格は不明ながら道路跡との何らかの関連が指摘できる。年代は、非クロロ調整の土師器が出土していないことから、8世紀後葉をさかのばることはないと推定される。

また、規模の大きな南北溝である S D 1505 溝跡については、規模や形態などから、山王遺跡や新田遺跡で発見されている中世の屋敷の区画溝と同様のものと考えられる。平成21年度に本調査区が位置する敷地の周縁部をトレント調査した山王遺跡第73次調査においても、屋敷の区画溝と考えられる規模の大きな溝跡が6条検出されている。その際の調査及び今回の調査では、中世の遺物が出土していないため、中世の範疇での具体的な時期の位置付けまでには至らない。ただ、周辺部の調査においては、屋敷を囲む溝跡のうち規模の大きなものは、15・16世紀に集中する傾向がみられる。

S X 1512 小溝群については、その年代は上限が10世紀前葉以降、下限は中世である。周辺で発見されている同様の遺構から、耕作に関連するものと考えられる。



写真図版1(第81次調査)



S X 1501 B期
掘り下げ状況(北より)



S X 1501、S D 1506
掘り下げ状況(北より)



S X 1501西側溝
土層堆積状況(北より)

写真図版2(第81次調査)



遺構検出状況
(東より)



遺構検出状況
(西より)



S D 1505溝跡
掘り下げ状況(南より)

写真図版3(第85次調査)



S X 1512 小溝群
掘り下げ状況(東より)



S K 1511 土壌
掘り下げ状況(北より)



S K 1511 土壌
土層堆積状況(西より)

写真図版4(第85次調査)



S X 1501 B期 東側溝
掘り下げ状況(東より)



S X 1501 東側溝、S D 1507
掘り下げ状況(南より)



1 土師器 2 土師器 3 須恵系土器
杯(第9図4) 杯(第9図5) 杯(第9図3)

写真図版5(第85次調査)

IX 山王遺跡第82次調査

調査に至る経緯と経過と調査成果

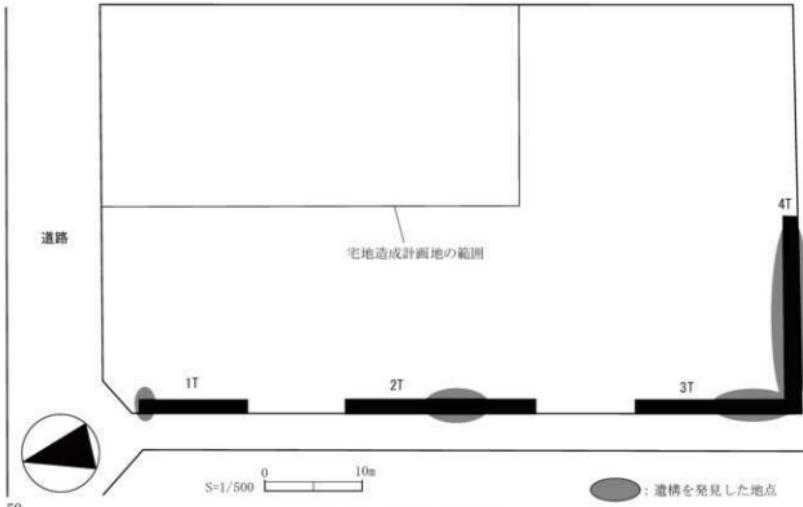
本調査は、宅地造成に伴う発掘調査である。平成22年4月9日に地権者より当該地区における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では専用通路の布設及び擁壁設置、給排水埋設工事の際に1.7～2.2mの掘削を行うものであり、埋蔵文化財への影響も懸念された。このため、事前に遺構検出面の深さや分布状況を知る目的で確認調査を実施し、この成果に基づき本発掘調査に係る協議を行うこととなった。5月18日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は5月28日に実施した。専用通路、擁壁設置予定地に沿って4ヶ所に調査区を設定した。重機により現代の水田耕作土の除去を行ったところ、いずれの調

査区も現地表面から15～60cmの深さで遺構検出面に到達した。1Tは遺構の密度は希薄で、北端付近で溝状の遺構1条を発見した。2Tでは中央付近で東西方向の溝1条、方形輪郭の遺構1基、柱穴2基、3Tでは南半部で東西方向の溝5条を発見した。4Tではほぼ全域で東西方向の小溝群(畦跡)と南北方向の溝3条を発見した。南北方向の溝は、灰白色火山灰が埋土に含まれているので平安時代と考えられた。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査地近景(北より)



2 T 溝跡等検出状況(西より)



1 T 全景(北より)



2 T 柱穴検出状況



3 T 溝跡検出状況



4 T 全景・小溝群検出状況(西より)

X 山王遺跡第84次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、建売分譲住宅建設に伴うものである。平成22年6月20日に地権者より当該地区における建売分譲住宅建設と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。計画では、開発の対象面積が約2,000m²と広範間に及ぶため埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、対象地内を対象に事前に遺構の分布状況や遺構検出面までの深さを知る目的で確認調査として実施することとなった。7月1日に地権者より調査に関わる依頼・承諾書の提出を受けて第83次調査と並行して第84次調査として実施したものである。

調査は7月28日より開始し、重機を使用して第I～IV層を全て除去した。31日から土層観察と排水を兼ねた側溝を掘る。これらの作業と並行して平面図作成のための基準点の設定も行う。調査の結果、土壤2基を検出した。

8月5日調査区の全景写真撮影後、遺構の平面・断面図を作成する。7日土層注記の後、現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

調査区内の層序は、7層に大別できる。

第I層 固くしまった黒褐色粘土で、厚さは0.32～0.4mである。

第II層 しまりのある黒褐色粘土で、厚さは0.22～0.38mである。

第III層 しまりのある黒色粘土で、厚さは0.14～0.3mである。

第IV層 灰黄褐色粘土で、調査区の東側から西側にかけて堆積している。厚さ2～10cm灰白色火山灰の粒子を含んでいる。

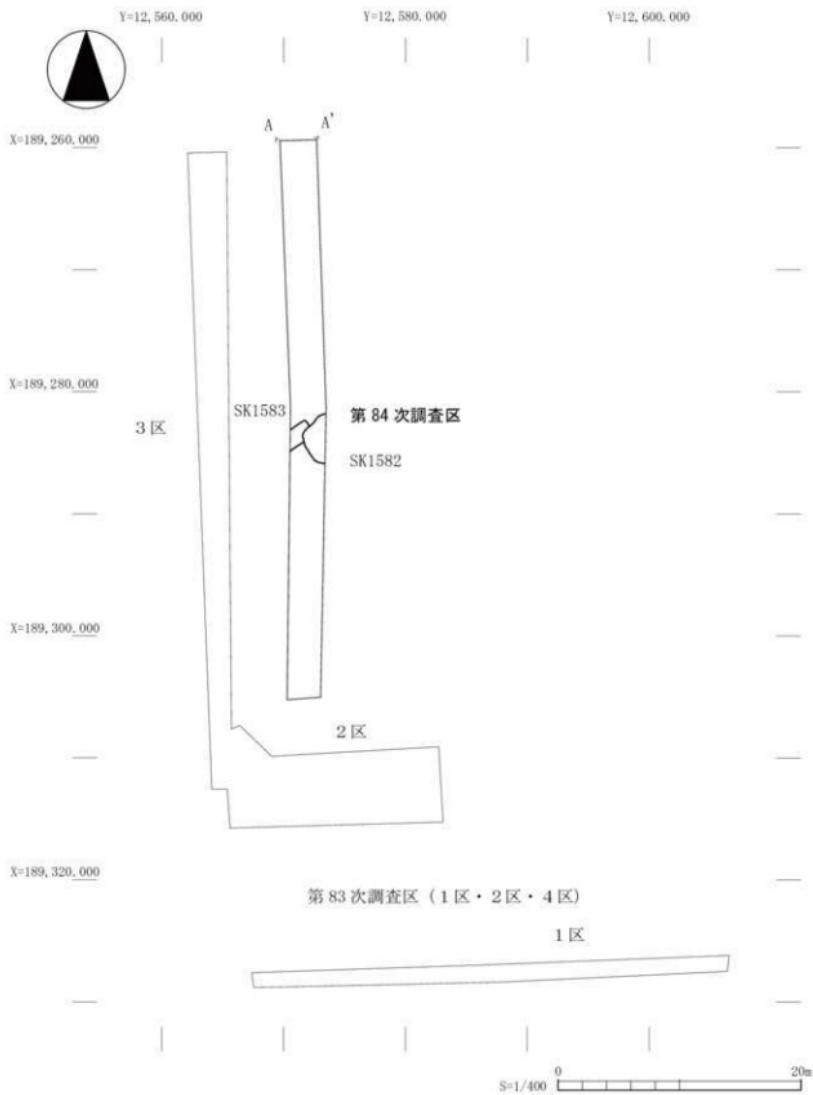
第V層 黄褐色粘土で、厚さは5～20cm。SK 1550・1551土壤の検出面となっている。

第VI層 暗灰黄褐色粘土で、厚さは3～15cmである。

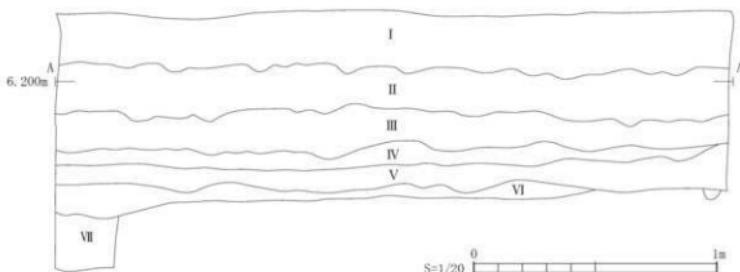
第VII層 黒褐色粘土で、厚さは0.3m以上である。古墳時代の水田層に対応される土層と見られる。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区・遺構配置図



第3図 層序(調査区北壁断面図)

(2) 発見遺構

調査区第V層上面で土壤2基を発見した。いずれの遺構も検出のみにとどめている。

S K 1582 土壙(第2図)

調査区中央部で発見した。S K 1583 土壙と重複し、これより新しい。平面形は西が調査区外に延びていくため全容は不明だが、大型の楕円形を呈するものと見られる。規模は、南北約4.1m、東西約1.7m以上である。検出面での埋土は、しまりの強い黒褐色粘土である。

S K 1583 土壙(第2図)

調査区中央部で発見した。S K 1582 土壙と重複し、これより古い。平面形は東の一部が調査区外に延びて行くため全容は不明だが、東西に長い方形を呈するものと見られる。規模は東西約1.9m以上、南北約1.4mである。検出面での埋土は、黄褐色粘土をブロック状に含んだ黒褐色粘土である。

3まとめ

- (1) 今回の調査では、土壤2基を発見した。
- (2) 遺構の年代は遺物が出土していないため不明であるが、これら発見遺構した検出面が、灰白色火山灰粒子を含む層の下層であるが、灰白色火山灰が二次堆積の可能性もあることから、それ以降と考えておきたい。



調査区全景(南より)



S K 1582・1583検出状況(南より)

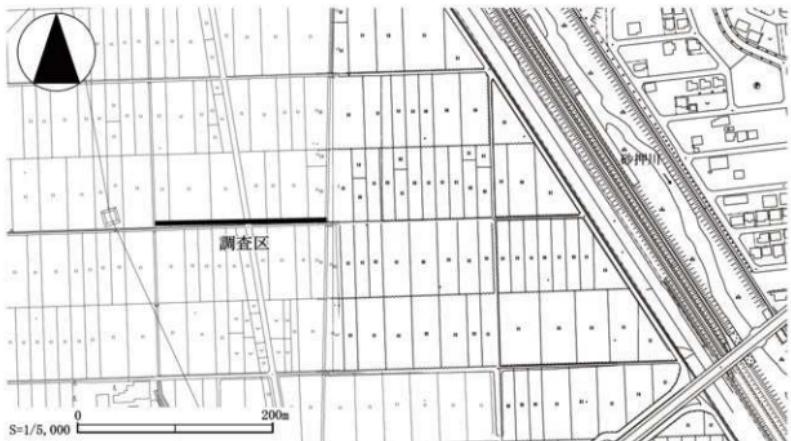
XI 山王遺跡第86次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、農業用排水路整備事業に伴う発掘調査である。平成22年10月、市川地区興農実行組合より当該区における農業用排水路整備計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、長さ180mの素堀の排水路をコンクリート製のフリューム管に改修することが記されていたが、狭隘な場所を除きほとんど掘削行為を伴わなものであった。しかし、当該区周辺では、既存の排水路底面で遺構が確認される場合が多いことから、工事着手と同時に遺構の分布調査を実施することで組合との合意に達した。11月5日、組合より発掘調査にかかる承諾書の提出を受け、現地調査を開始した。工事は対象区西側(1トレンチ)より開始され、既存水路底面に堆積している土砂の除去及び壁面の掘削が行われた。当初の予想どおり水路底面のにぶい黄色砂質土(IV層)が遺構検出面となっており、S I 1523竪穴住居跡やSD 1524・1525溝跡を確認した。工事と並行した調査であったことから、直ちに写真撮影と平面図の作成を行ふとともに、重機による掘削が進む東側(2トレンチ)へと調査範囲を広げていった。2トレンチ西半部でも1トレンチ同様、IV層が遺構検出面となっていたが、東半部では薄い黒色粘土層(II層)下に灰白色火山灰の自然堆積(III層)が認められ、その上面でSD 1526・1527を確認した。一方、工事開始時に、フリューム管を東側に20m延長したい旨の打診を受けた。このため、直ちに宮城県教育委員会と協議を行った結果、図面の差し替えのみで済んだことから、12日に延長部分の工事が再開された。当該箇所については、河川埋土と推測される灰色の堆積層を確認したが、遺構・遺物は発見されなかった。

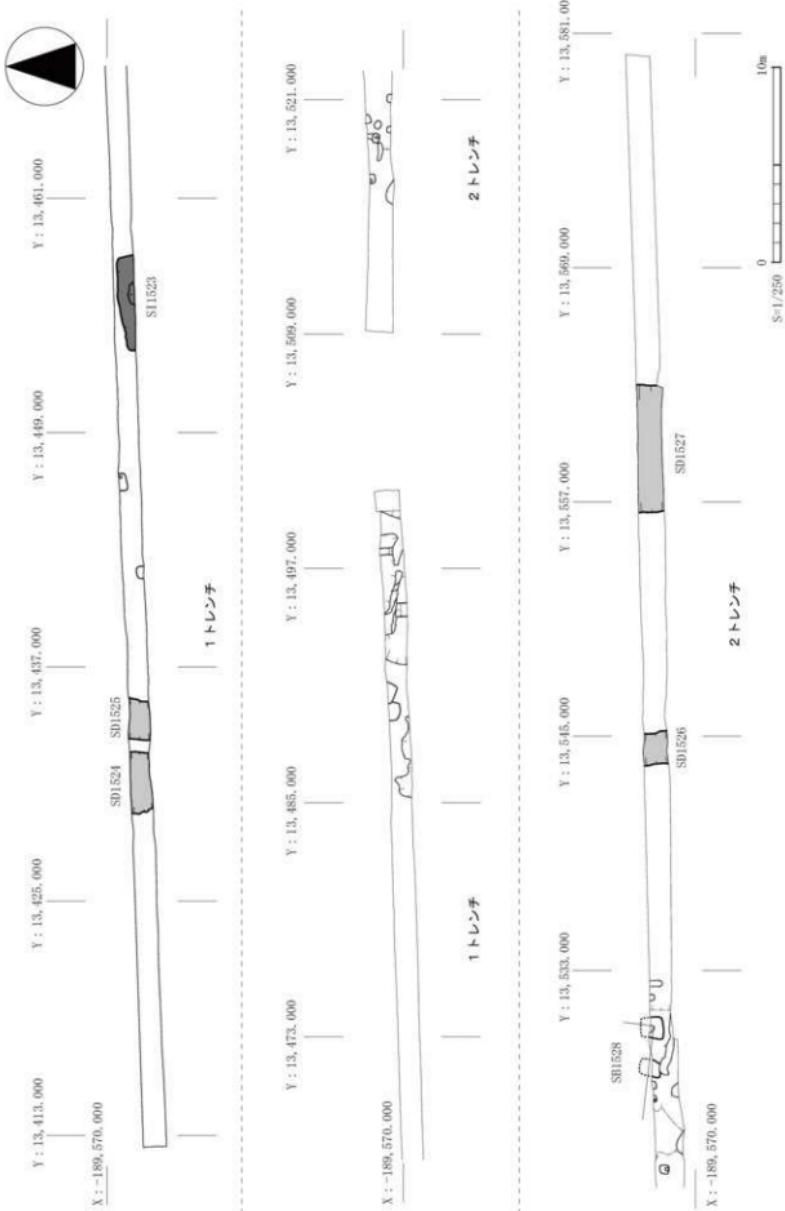
2 調査成果

本地区周辺におけるこれまでの調査成果を見れば、現代の表土または旧水田耕作土を除去すると直ちに古代の遺構面が現れ、さらにこの下層には古墳時代前期の水田跡が存在することが明らかである。



第1図 調査区位置図

第2図 道構配置図



今回の調査では、1トレンチから2トレンチ西側は水田耕作土（I層）直下の浅黄色粘質土（IV層）が遺構検出面となっている。2トレンチ東側では水田耕作土下に黒色粘土（II層）と灰白色火山灰の自然堆積（III層）が認められ、遺構検出面はIII層及びIV層上面である。

なお、前述したとおり、今回の調査は上面での遺構の分布状況を確認することが目的であったことから、IV層より下層の状況については明らかでない。

以下、今回確認した遺構の概要について記載する。

S B 1528掘立柱建物跡（第2図）

2トレンチ西半部で発見した掘立柱建物跡である。2基の柱穴から推測したものであり、検出した柱穴は南東隅柱穴と南側柱東より1間目柱穴であると考えられる。柱穴の規模は南東隅柱穴で測ると、一辺約1.1mの方形であり、中央部に柱抜取穴（または切取穴）が確認できる。掘方の埋土は、褐色砂質土ブロックが混入する黒褐色粘質土である。

S I 1523堅穴住居跡（第2図）

1トレンチ中央部で発見した堅穴住居跡である。残存状況は非常に悪く、床面が露出している。平面形は方形であり、規模は東西約4.8mである。方向は北辺で測ると東で約7度北に偏している。床面は地山ブロックが多く量に混入する黄灰色砂質土である。中央北寄りで、焼土・炭化物が多量に混入する炉跡を確認した。平面形は楕円形と推測され、規模は東西約1.1mである。

遺物は土器器壺（A類）が出土している。

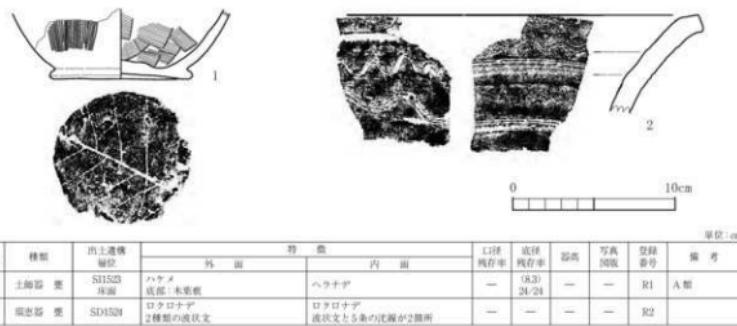
S D 1524・1525溝跡（第2図）

1トレンチ西半部で発見した、南北方向に並行に延びる溝跡である。西側をS D 1524、東側をS D 1525とした。規模は、S D 1524が上幅2.9～3.2m、S D 1525が上幅約2mである。埋土はいずれも地山ブロックが多量に混入する黄灰色砂質土である。

遺物はS D 1524から須恵器壺、丸瓦（II B類）が出土している。

S D 1526溝跡

2トレンチ中央部で発見した、南北方向の溝跡である。規模は上幅約1.7mであり、III層よりも新しい。埋土は黒褐色粘土である。



第3図 S I 1479、S D 1480出土遺物

S D 1527溝跡

2トレンチ東半部で発見した、南北方向の溝跡である。規模は上幅約6.5mであり、Ⅲ層よりも新しい。埋土は黒褐色粘土である。

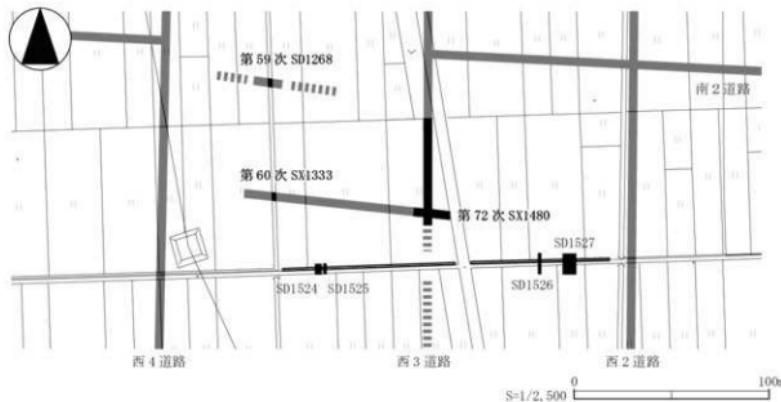
3まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡などを発見した。

このうち、1トレンチで発見したS I 1523竪穴住居跡床面から、非ロクロ調整の土師器壺が出土している。体部下半から底部の破片であり、体部外面は単位の狭いハケメ、内面には明瞭なヘラナデが認められる。底部は薄く、外面には木葉痕が確認できる。木葉痕のある土師器壺のうち底部が薄く成形されるものについてみると、宮城県内ではおよそ8世紀中葉頃に多く認められる傾向があることから、S I 1523出土の土師器壺についてもその頃に年代の一端を求めることができよう。

2トレンチS D 1526・1527は、灰白色火山灰が自然堆積するⅢ層上面より掘り込まれていることから、10世紀前葉以降の溝跡であることが明らかである。

ところで、本調査区は多賀城南面に9世紀以降施行された道路網のうち、西3南北道路の推定線上に位置していたが、今回の調査ではその痕跡を確認することができなかった。周辺地区的調査成果をみると、南2東西道路については推定線上では認められず、この80m南側でS X 1333・1524東西道路が検出されている。本地区周辺では従来想定されたものとは異なった道路の在り方が確認されていることから、地割縁辺部における施行基準の再検討が求められよう。



第4図 第86次調査区と周辺の遺構配置図(古代)

XII 市川橋遺跡第80次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成22年4月27日に地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。建築工事では、住宅の基礎工法に直径60cm、長さ8.0mの杭を30本打ち込む杭工法を施していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が困難ないか協議を行ったが、建物を支える十分な強度が得られないことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、5月13日に地権者より発掘調査に関わる依頼・承諾書の提出を受け、第80次調査としての実施したものである。

調査は6月10日より開始し、重機を使用して第I1層～I2層(盛土～現代の水田土)

を全て除去した。掘削土は、調査区際に積み上げた。ただちに作業員を動員して、土層観察と排水を兼ねた側溝を掘る。これらの作業と並行して遺構検出作業を行う。調査区内には、遺構・遺物は発見できなかつた。調査は図面作成、全景写真撮影等を行い、埋め戻し作業を行って、同日現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

調査区内の層序は、以下の2層に大別できる。

第I1層 区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは最大約1.8mである。

第I2層 現代の水田耕作土で、厚さは最大約20cmである。

第II層 調査区の全域に堆積する灰黄褐色粘土である。

(2) 発見遺構

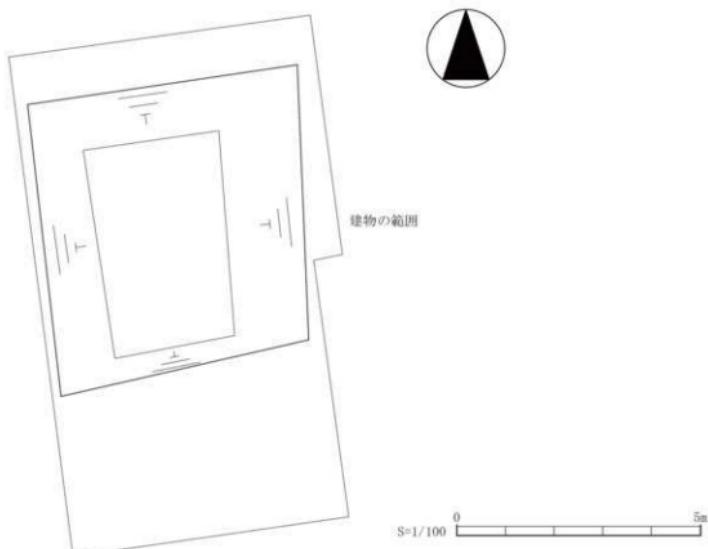
今回の調査では、遺構・遺物は発見できなかつた。



第1図 調査区位置図

3 まとめ

- (1) 今回の調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
- (2) これまでの調査の成果より、当該区周辺は複雑に湿地が入り組んでおり、居住区域としては利用されていないことを再確認することができた。



第2図 調査区平面図

XIII 市川橋遺跡第81次調査

1 調査に至る経緯と経過

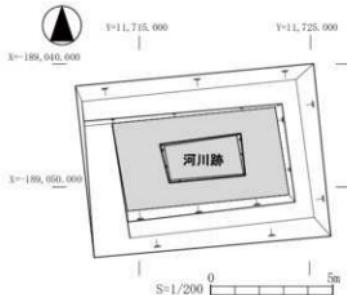
本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成22年6月24日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径20cm、長さ7.5mの杭を33本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、8月31日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は9月10日から開始し、はじめに重機を使

用して土地区画整理事業に伴う盛土(I1層)・現代の水田層(I2層)の除去を行った。土砂は調査面積と作業時の安全確保のためすべて城外搬出とした。11日より作業員を動員して遺構検出作業を行ったが、調査区全面に均質な土層が平面的に確認された。さらに深堀区を中心設定し、約1.5m掘り下げたが褐灰色粘土・砂が水平に堆積していた。17日までには、平面・断面図作成・写真撮影が終了した。29日、器材の撤収を行う。10月1日には埋め戻しを行って一切の調査を完了した。

2 調査成果

今回の調査では、幅7m以上、深さ1.5m以上の大規模な河川跡を発見した。周辺の調査成果からすると、方向は南北方向で、年代は中世～近世と推定される。



第2図 調査区全体図



第1図 調査区位置図



河川跡検出状況 (南東より)

XIV 高崎遺跡第83次調査

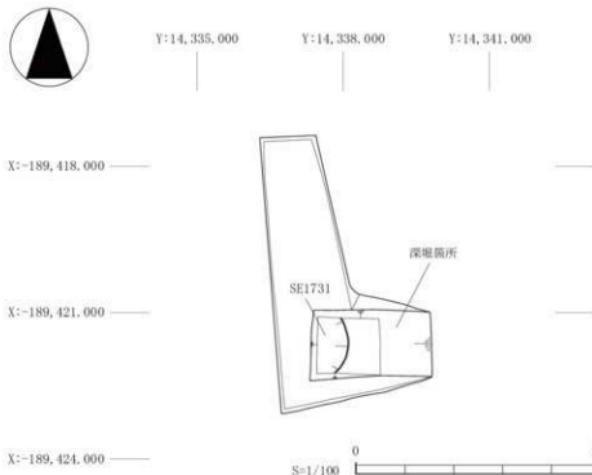
1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成22年3月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約20cm、長さ3mのコンクリート杭24本を打ち込むことと、最深80cmの掘削を伴う給排水管設置及び土留め擁壁設置工事等が示されていた。当該区周辺では現表土下30cm前後で遺構が確認される場合が多いことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため遺跡保存の協議を行ったものの、工法の変更是不可能であるとの結論に達したため、本調査に至つたものである。平成22年3月24日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、4月21日に現地調査を行った。

なお、住宅部分についてはすでに第82次調査として実施済みであり、本件については給排水管及び擁壁設置に伴い調査を行つたものである。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構配置図

はじめに、給排水管及び土留め擁壁設置箇所について、重機による表土除去を行った。工事の及ぶ深さまで掘削したが、遺構・遺物は発見されなかった。その後、本地区における遺構面の状況を確認するため、施工業者の了承及び立会のもと南端部を一部深掘りしたところ、現表土下1.7mでS E 1731を確認した。写真撮影及び光波測距儀による平面図の作成を行い、現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 発見した遺構と遺物

S E 1731井戸跡(第2図)

調査区南西端部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であると推測されるが、一部分の確認にとどめたため、規模については明らかでない。埋土は、暗灰黄色粘質土であり、浅黄色粘質土(地山)プロックが多量に混入している。

遺物は、須恵器甕の小片が出土している。



井戸跡検出状況

XV 高崎遺跡第84次調査

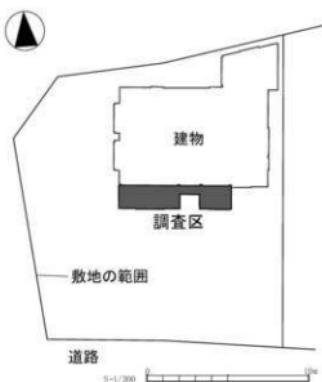
調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、店舗増築に伴う発掘調査である。平成22年4月14日に地権者より当該地区における店舗増築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に現表土から約30cmの掘削を行うことが示されており、埋蔵文化財への影響も考えられた。基礎工法の変更は不可能であることから、事前に遺構検出面の深さを知る目的で試掘調査を実施し、遺構が確認された時点で本発掘調査に係る協議を行うこととなった。4月28日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けた発掘調査の実施に至ったものである。

調査は5月7日に実施した。店舗増築予定地に調査区を設定し、重機により表土の除去を行った。その結果、深さ30cmのところで地山面(基盤層)に到達したが、遺構・遺物とも発見されなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景(東より)

XVI 高崎遺跡第85次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、賃貸住宅建設に伴うものである。平成22年8月5日に地権者より高崎2丁目185-1及び174地内における賃貸住宅の新築工事と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。前者では、住宅基礎工事の際に現地盤に最大1mの盛土を施した後、径200mm、長さ4mの杭を21本と24本それぞれ打ち込むものであった。そのため、工法変更により遺構保存が計られないと協議を行い、遺構が発見された場合は、工法を変更し遺構面を保護層で覆うことに計画が修正されることになった。後者の計画についても住宅基礎工事の際に最深42cmの掘削を行うものであった。これまで高崎遺跡の調査成果では現地盤より30cm下で遺構検出面が確認される場合が多いことから遺跡への影響が懸念されたこと

で、協議を行い、掘削のため建物を支える十分な強度が得られなくことがないよう、後者については最深の掘削を伴う深さまでとした。8月26日に地権者より調査に関わる依頼・承諾書の提出を受け、第85次調査として実施したものである。

調査は9月10日より、高崎2丁目174地内より開始した。便宜上、174地内を1区、185-1地内を南から2区・3区とした。1区については重機を使用して、基礎工事面の深さまで掘り下げたが、遺構は確認できなかった。平面図作成等を作成し同日終了した。2区・3区は15日調査を再開し、溝跡を検出し、写真撮影・平面図作成を行い同日終了した。3つの調査区については16日埋め戻しを行い、全ての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

1区

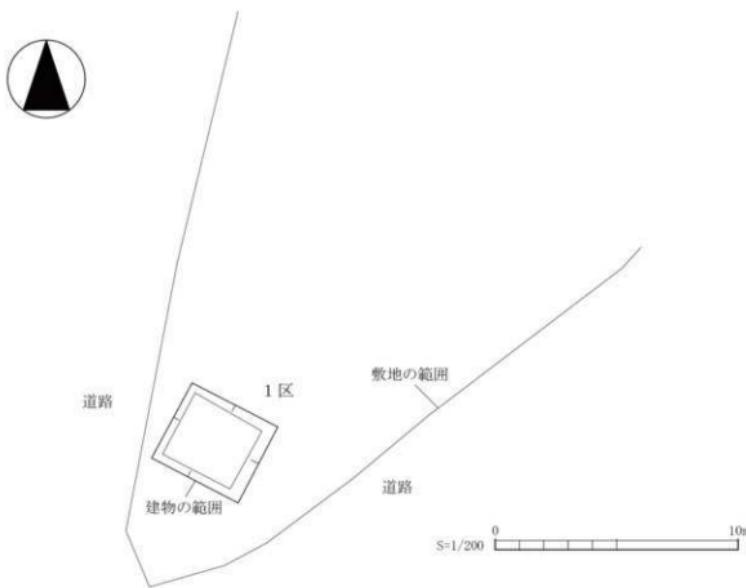
現代の盛土が堆積している状況を確認した。

2区・3区

北西から南東に傾斜する地形であり、盛土下に暗褐色土が堆積していた。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図

(2) 発見遺構

各調査区の概要は以下のとおりである。

1区

基礎工事で掘削が及ぶ深さまで重機で掘り下げたが遺構は確認できなかった。

2区

南西から北東に延びる3条の溝跡を確認した。検出のみにとどめている。

S D 1732 溝跡

調査区の東半部で発見した。確認できた規模は長さ約2.4m以上、幅約1.6m以上である。埋土は酸化鉄や褐色土をブロック状に含んだ暗褐色土である。

S D 1733 溝跡

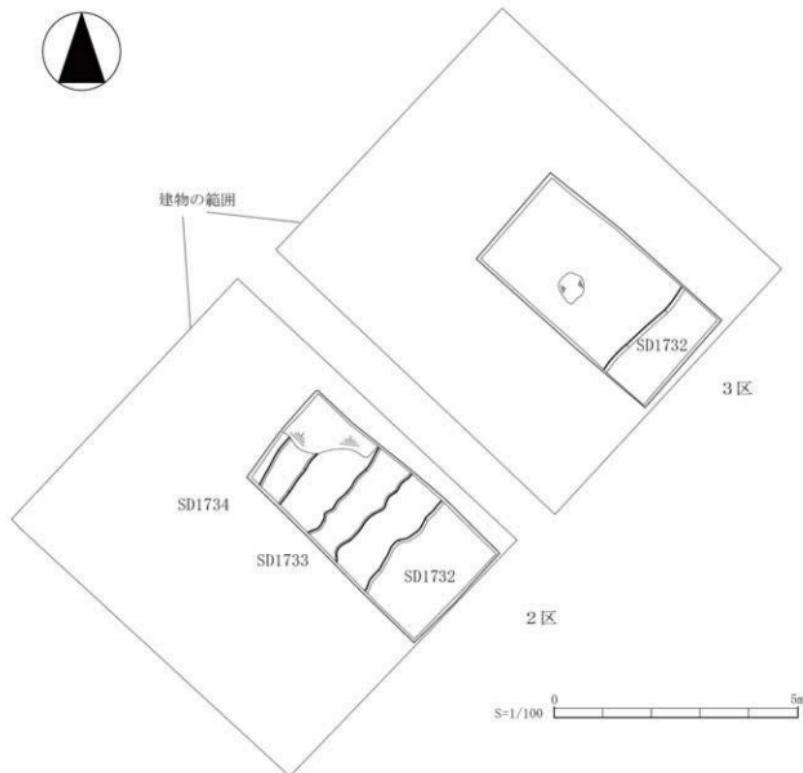
調査区の中央部で発見した。確認できた規模は長さ約2.4m以上、幅0.6~0.8mである。埋土はにぶい黄褐色粘土である。

S D 1734 溝跡

調査区の西半部で発見した。溝の北は削平のため、失われている。確認できた規模は長さ約1.1m、幅0.6~0.6mである。埋土はにぶい黄褐色土である。

3区

2区で発見したS D 1732 溝跡の延長部を発見している。S D 1733・1734 溝跡の延長部は確認できなかつた。検出した規模は長さ2.3m以上、幅約1.1m以上である。



第3図 調査区平面図

3まとめ

- (1) 今回の調査では、3ヶ所に調査区を設定し、2ヶ所から溝跡3条を発見した。
- (2) 発見された溝跡の年代については、出土遺物がないため不明である。



2区 SD 1732・1733・1734検出状況(北より)



3区 SD 1732検出状況(東より)

XVII 高崎古墳群第10・11次調査

I 調査に至る経緯

第10・11次調査は、いずれも個人住宅建設に伴うものである。平成21年12月9日に高崎二丁目505-3地内、平成22年3月19日に同二丁目505-1における個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書がそれぞれ提出された。前者からは、住宅の基礎工事の際に直径約19cm、長さ2.5～4.5mの杭を27本打ち込む計画、後者からは同じく最深45cmの掘削を伴う計画が示されていた。当該地周辺では南側隣接地において実施した第7次調査の成果より、現地表面より50～60cm下が遺構検出面であることを確認しており、いずれの基礎工法も遺跡に与える影響が懸念された。このため遺構保存の協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、それぞれ発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、第10次・11次調査として実施したものである。

なお、この2件については、南北に隣接していることから、作業効率を考え、同時並行で調査を行うこととした。調査次数については、高崎二丁目505-3及び507地内を第10次調査、505-1地内を第11次調査とした。

II 調査経過

第10次調査

5月1日より重機による表土(第I層)の掘削を開始した。掘削土は、作業員の安全面及び調査面積確保のため場外へ搬出したが、予想以上に第I層が厚く堆積しており、この作業に多くの時間を要した。第I層除去の結果、第10次調査区内は、11日より遺構検出作業を行うとともに、土層観察と排水を兼ねた側溝を調査区内に巡らせた。これにより、当該区の地形が東から西へ傾斜していることや、西半部は後世の削平を受けていること、第III、IV、V層がそれぞれ遺構検出面となっていることが判明した。18日、基準点測量を行い、終了後第II層面の掘り下げを開始した。19日より第III層上面での遺構検出作業を開始し、S D 43・44をはじめとする小溝跡を発見した。ただちにこれらの重複関係を確認し、埋土の掘り下げや写真撮影、及び平面・断面図作成を随時行った。小溝跡の調査が終了した28日より第III層の掘り下げを開始し、IV層上面でS I 42堅穴住居跡を発見した。6月15日から第V層上面の遺構検出を行い、S I 38、39堅穴住居跡を発見した。カマドや主柱穴の確認作業に多くの時間を費やしたもの、24日にはこれら住居跡の平



第1図 調査区位置図

面・断面図作成を行うとともに、調査区北及び東壁の土層断面図も作成する。26日、第V層の調査がおおむね終了したことから、全景写真を撮影した。29日、平面・断面図の修正及び土層注記などの補足調査を行い、現地調査の一切を終了した。

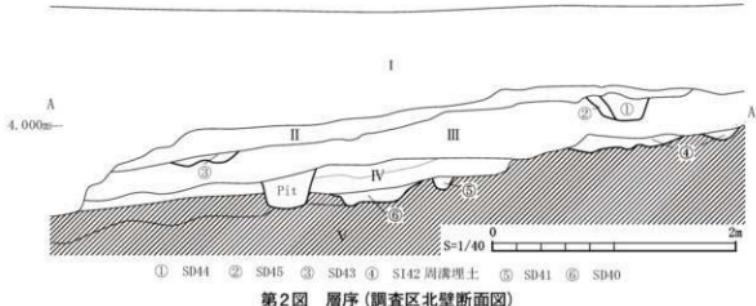
第11次調査

第11次調査については、5月8日より、重機による表土除去を開始した。第10次調査同様、掘削土はすべて場外に搬出し、その後に遺構検出作業及び検出状況の写真撮影を行う。工事着手時期の都合上、第10次調査を優先することとしたため、本調査についてはここで一時中断することとなった。第10次調査の終了を受け、7月1日より改めて遺構検出作業を行い、S R 32窯跡と、これよりも新しいS D 33・34溝跡を確認した。2日S D 33・34の埋土掘り下げを開始した。このうちS D 33では埋土上部に灰白色火山灰が自然堆積していることや、S R 32の焚口部を大きく破壊していることが明らかとなった。一方S R 32については窯跡の全容把握のため、7日に調査区東側を拡張したが、窯の先端部はすでに削平のため失われていることを確認した。なお、S R 32は周辺や確認面から出土した遺物により県内でも発見例の少ない7世紀前半頃の須恵器窯であると考えられた。このため、家屋の基礎工事で破壊される範囲を除き、遺構を現状保存することで地権者の了解を得、必要最小限の調査にとどめることとした。7月6日より窯体内埋土の掘り下げを開始し、焼成面が2時期あることを確認した。焚口部では燃成部より窯体が右に広がり、炭化物が厚く堆積していることを確認した。13日より順次、平面・断面図作成、細部の写真撮影等を行い、21日には調査区の全景写真撮影を行った。24日には平面・断面図の補正後、土層の注記を行い、窯本体の中で破壊されない部分を養生するため遺構内部に山砂を充てんした。26日発掘器材の撤収と並行して調査区の埋め戻し作業を行い、現地調査の一切を終了した。

III -1 第10次調査の成果

1 層序

- 第Ⅰ層 調査区全域を覆っている現代の盛土である。東から西にかけて傾斜する地形に沿って堆積し、西側がより厚くなっている。厚さは0.65～1.4mである。
- 第Ⅱ層 調査区中央部に堆積している暗褐色土であり、厚さは6～20cmである。古代の遺物を多く含んでいる。
- 第Ⅲ層 調査区全域に堆積しているにぶい黄褐色土または黒褐色土であり、厚さは15～45cmである。古代の遺物を多く含み、S D 43・44溝跡の検出面になっている。
- 第Ⅳ層 調査区のほぼ全域に堆積している酸化鉄を含んだにぶい黄褐色土または黒褐色土であり、厚さは6～24cmである。S I 42堅穴住居跡の検出面となっている。
- 第Ⅴ層 酸化鉄を含んだ灰黃褐色土または黃褐色土であり。厚さは8～24cmである。S I 38・39堅穴住居跡やS D 40・41溝跡の検出面となっており、本調査区の最終遺構検出面である。



2 発見した遺構と遺物

(1) 第V層上面発見遺構

S I 38 竪穴住居跡 (第3・4図)

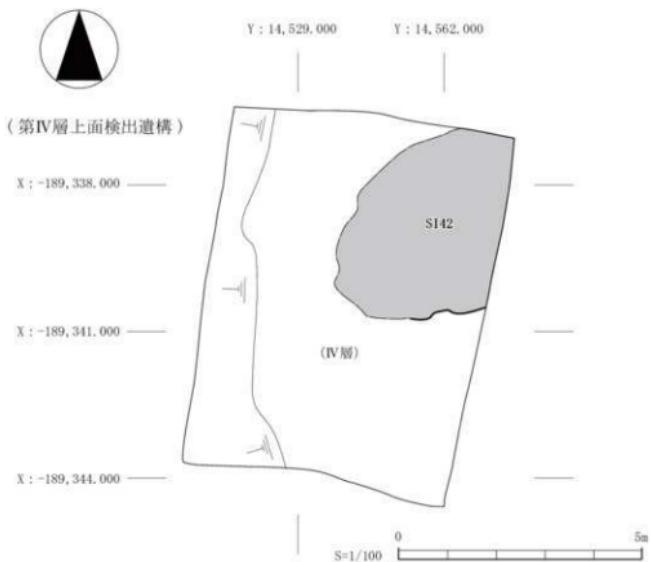
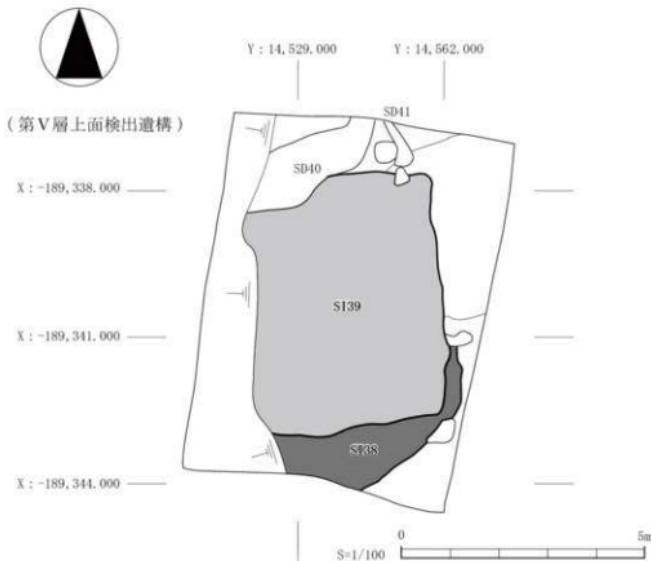
調査区南半部で発見した竪穴住居跡である。S I 39竪穴住居跡と重複しそれよりも古い。検出したのは、住居の南東付近であるが、S I 39に大部分が破壊されており、残存状況は悪い。平面形はおよそ方形と推測され、方向は南辺で測ると北で約40度東に偏している。規模は東西約4m、南北約1.1m以上であり、壁高は27cm残存している。床面はV層上面であり、上面で周溝と柱穴2基を確認した。周溝は上幅24~36cmで、深さ6~13cmである。埋土はにぶい砂を多く含んだにぶい黄褐色砂質土である。柱穴掘り方はいずれも方形を呈し、規模は長辺40~42cm、短辺24~36cmで、柱痕跡は径20cm前後の円形である。埋土はいずれもにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

S I 39 竪穴住居跡 (第4図)

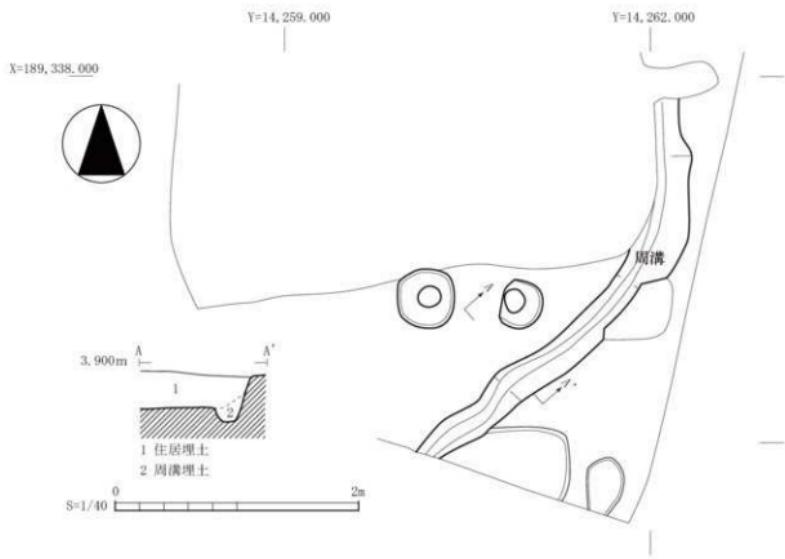
調査区の中央で確認した竪穴住居跡である。西半部は、削平のため失われている。S I 38竪穴住居跡、S D 40溝跡と重複し、前者より新しく後者より古い。方向は東辺で測ると約8度西に偏している。周溝は西辺を除きすべて検出した。規模は上幅15~65cm、深さ5~8cmである。規模は南北約5.1m、東西4.3m以上であり、残存する壁高は30cmである。床面は東辺付近が第V層、それ以外は第V層に近似する黄褐色土の貼床である。西側に向かって低くなる地形を平坦にするために住居西側に厚く施されている。住居内の施設には、主柱穴、カマド、周溝がある。主柱穴は4基確認しており、掘り方の平面形は方形または梢円形を呈している。全ての柱穴で柱痕跡を確認しており、規模は一辺45~61cm、埋土は地山ブロックや酸化鉄を含んだ褐色土である。柱痕跡は径14~30cmの円形である。なお、住居東側の主柱穴の掘り方埋土が貼床埋土に覆われていたことから、本住居については、主柱穴を掘った後に床面を形成したものと考えられる。

カマドは北壁に付設されている。側壁は残存していないが、確認できた燃焼部の規模は奥行約1.3m・幅約0.8mである。周溝は削平された西辺を除く各辺で検出した。埋土は地山ブロックと砂を含んだ固くしまった暗褐色土である。住居内の埋土は2層確認できた。いずれも暗褐色土を主体とするもので、1層には地山ブロックやにぶい黄褐色土を含んでいる。

遺物は周溝から土師器杯・壺(第6図 1)、須恵器杯(第6図 2~8)・壺・瓶・蓋、平瓦(B II類)、鉄滓が出土している。



第3図 第V・IV層上面検出遺構全体図



第4図 S I 38竪穴住居跡平面・断面図

S D 40溝跡（第7図）

調査区北西隅で発見した東西方向の溝である。壁際で北に屈曲しさらに調査区外に延びていく。S I 39竪穴住居跡よりも新しい。確認できた長さは約3.1mで、上幅0.3～1.25m、深さは6～22cmである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物や灰を含んだ黄褐色土である。遺物は土師器甕(B類)、須恵器甕が出土している。

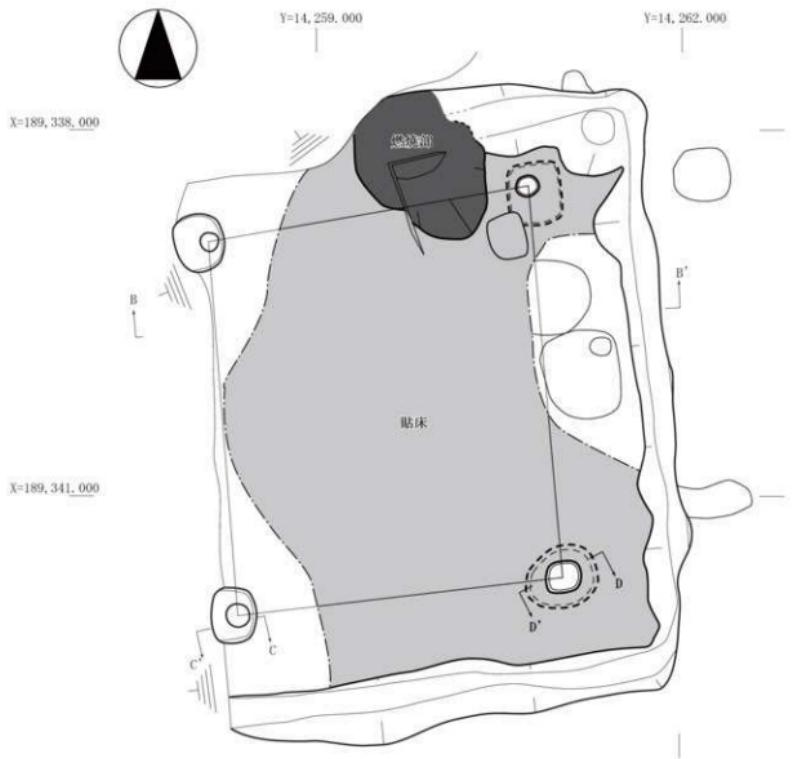
S D 41溝跡（第7図）

調査区北西隅で発見した南北方向の溝である。確認できた長さは1mであり、調査区北側にさらに延びていく。規模は上幅7～26cm、深さは6～15cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土の単層である。

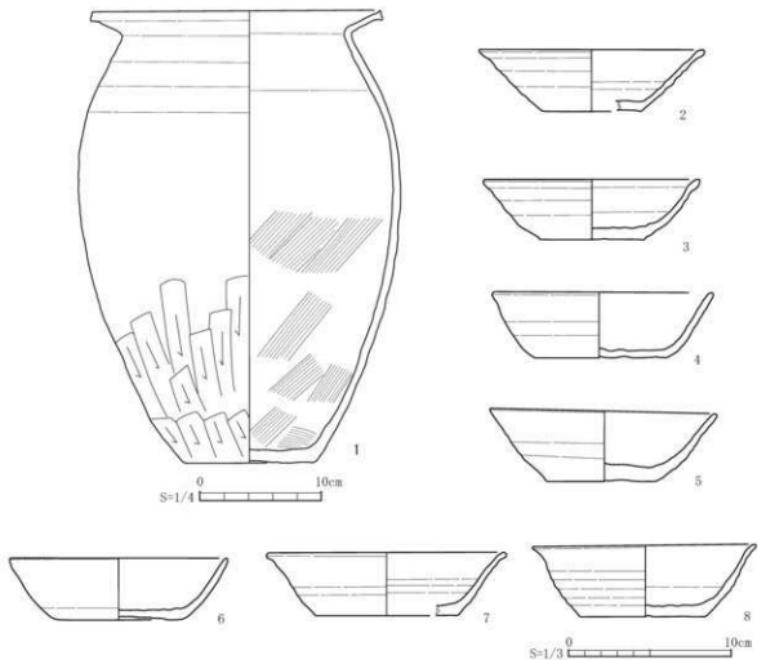
(2) 第IV層発見遺構

S I 42竪穴住居跡（第3・8図）

調査区東北隅で発見した竪穴住居跡である。検出したのは東半部とみられるが、西半部は後世の削平により失われ、上面も第III層堆積の際に大きく破壊されているため残存状況は悪い。平面形は方形と推測されるが、詳細は明らかではない。確認できた規模は南北約3.8m、東西約3.4m以上であり残存する壁高は約10cmである。住居の埋土は第III層である。床面は貼床であり、褐灰色粘土ブロックや炭粒等を含む非常にしまりのある明褐色土である。住居内施設にはカマドと周溝がある。

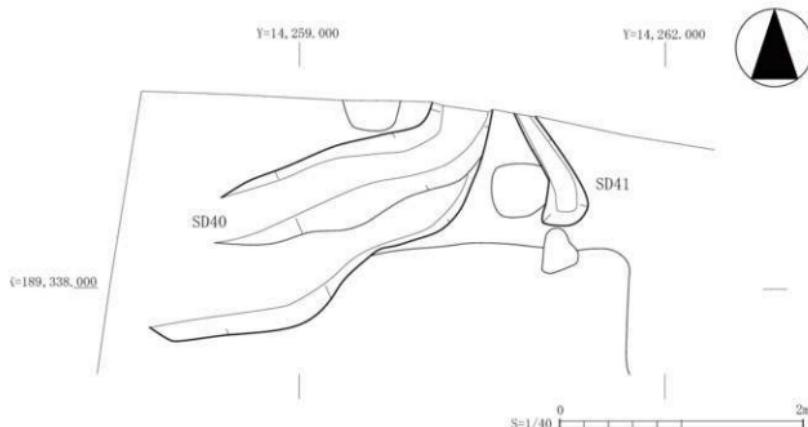


第5図 S 1 39竪穴住居跡平面・断面図



番号	種類	層位	特徴		口径 横径 直徑 底径 底高	底深 底径 底高	厚高 内高 外高	費目 内高 外高	備考	単位:cm
			外 面	内 面						
1	土器・甕	1層	口縁部:ロクロナデ 体部:ハラタズリ 底部:不明	ロクロナデ ナデ	(22.6) 3.24	(9.6) 24/24	33	3-3	R1	体部に炭化物付着
2	罐・壺・杯	1層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(13.8) 12/24	(6.1) 11/24	38	3-5	R6	V類
3	罐・壺・杯	1層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:手打ちハラタズリ	ロクロナデ	(13.2) 7/24	(6.4) 14/24	37	3-6	R7	II類
4	罐・壺・杯	1層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(12.8) 4/24	(8.0) 6/24	49		S8	ヒダスキ底有り III類
5	罐・壺・杯	2層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(13.3) 20/24	81 24/24	41	3-7	R9	III類
6	罐・壺・杯	2層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(13.75) 8/24	67 24/24	44	3-8	R10	V類
7	罐・壺・杯	2層	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(13.2) 9/24	(7.6) 9/24	38		R12	III類
8	罐・壺・杯	床面 直上	口縁部・体部:ロクロナデ 底部:回転あわせ	ロクロナデ	(14.0) 22/24	74 24/24	42	3-9	R11	III類

第6図 S-139竪穴住居跡出土遺物



第7図 SD 40・41溝跡平面図

カマドは南辺に付設されており、燃焼部の両端には石が据えられていた。規模は奥行約0.9m、幅約1.2mである。周溝は西辺及びカマド西側の南辺を除く各辺で確認した。規模は、上幅20～35cm、深さ6～13cmである。埋土は固くしまったにぶい褐色土である。

遺物は周溝から土師器杯(第9図 1)・壺(B類)、須恵器杯(第9図 2)、壺が出土している。

(3) 第III層上面発見遺構

S D 43溝跡(第11図)

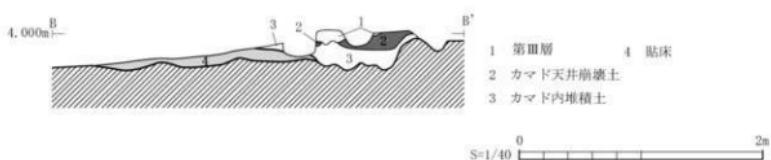
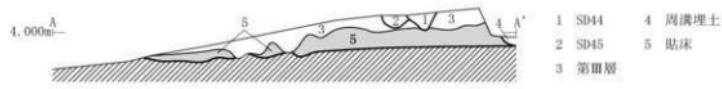
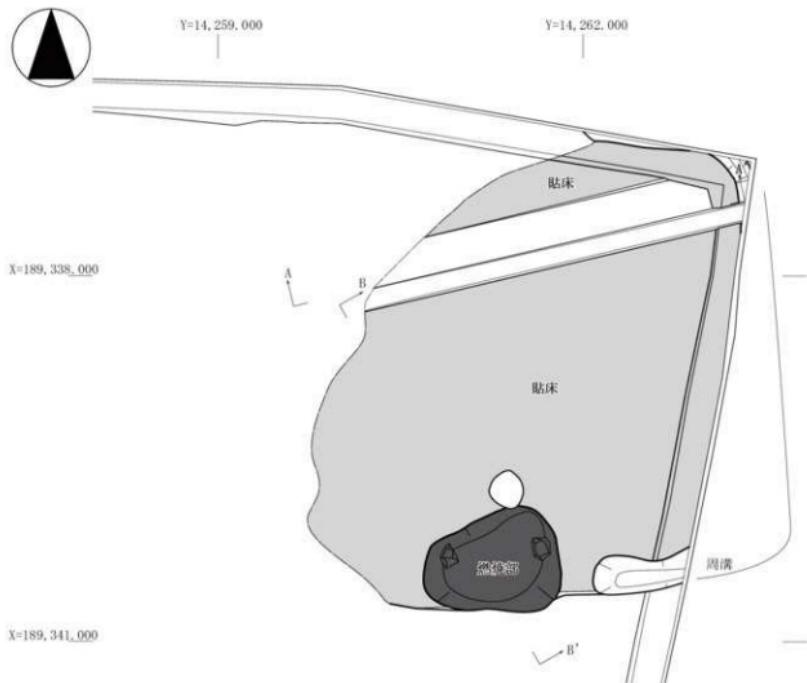
調査区北端部で発見した南北方向の溝跡であり、北側は調査区外に延びていく。確認できた長さは2mであり、上幅40～50cm、深さは6cmである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は土師器壺(B類)、須恵器杯・壺が出土している。

S D 44溝跡(第11図)

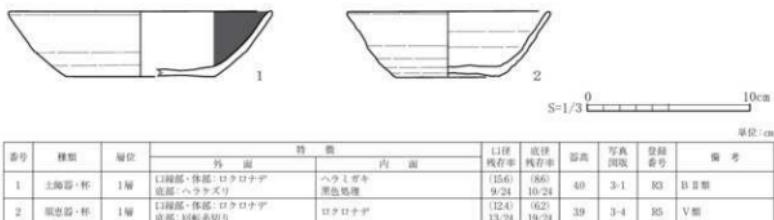
調査区北側で発見した溝跡である。逆「L」字形に屈曲しており、北側は調査区外に延びている。SD 45溝跡と重複し、これより新しい。確認できた長さは南北方向が約22m、東西方向が約22mであり、規模は上幅25cm前後、深さは13cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は炭化物粒を多く含んだ暗褐色土である。遺物は土師器杯・壺(B類)、須恵器杯・壺が出土している。

S D 45溝跡(第11図)

調査区北半部で発見した溝跡である。緩やかに湾曲しており、溝の北側は調査区外に延びている。SD 44-46と重複し、前者より古く、後者より新しい。確認できた長さは約6mである。規模は上幅20～30cm、深さは16cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第8図 S 1 42竪穴住居跡 平面・断面図



第9図 S I 42 竪穴住跡出土遺物

埋土は2層に分けられる。1層は炭化物粒を多く含んだ灰黄褐色、2層は粒子の粗い砂を主体とするにぶい黄褐色である。遺物は土師器杯・壺(B類)、須恵器杯(第10図 1)・壺・蓋が出土している。



第10図 S D 45 溝跡出土遺物

S D 46 溝跡(第10図)

調査区東半部で発見した南北方向の溝跡であり、S D 45溝跡と重複し、それより古い。確認できた長さは約1.6mであり、上幅20~25cm、深さ12cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を多く含んだ暗褐色土である。遺物は土師器壺(B類)、須恵器杯・壺、須恵系土器が出土している。

S D 47 溝跡(第11図)

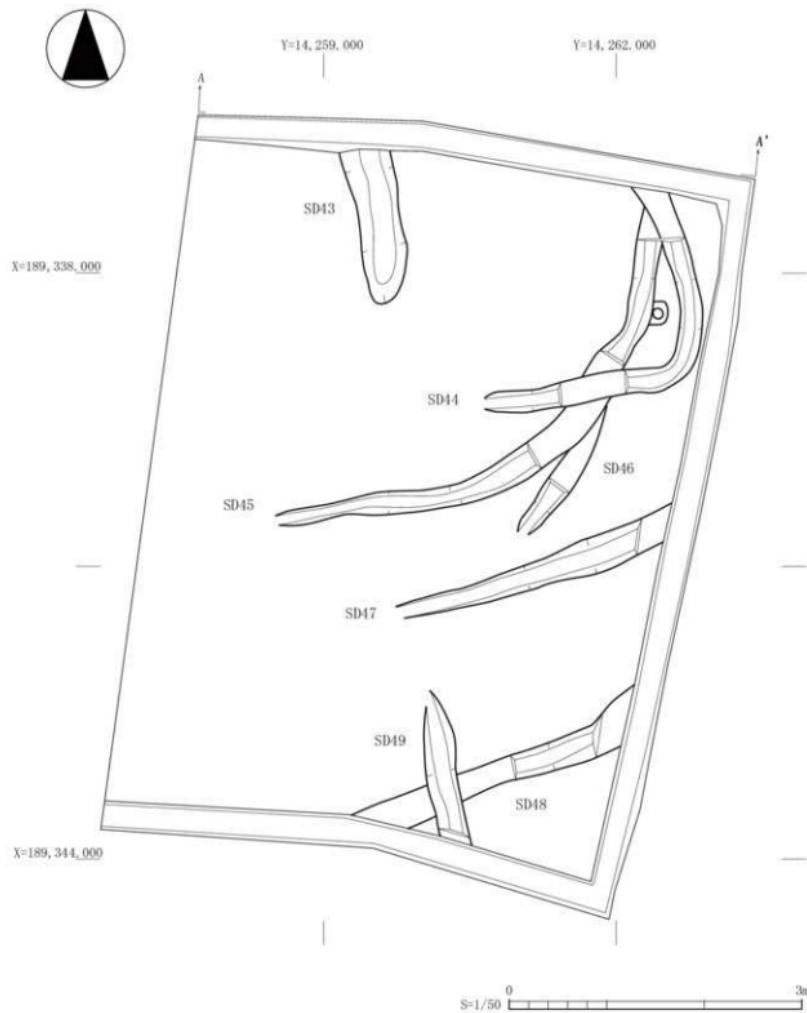
調査区中央部で発見した東西方向の溝跡であり、東は調査区外に延びていく。確認できた長さは4mであり、上幅35cm前後、深さは10cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層である。

S D 48 溝跡(第11図)

調査区南端部で発見した東西方向の溝跡であり、溝の両端は調査区外に延びている。S D 49溝跡より古い。確認できた長さは約3.8mであり、上幅25~33cm、深さは11cmである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は砂を多く含むにぶい黄褐色土である。遺物は土師器壺(B類)、須恵器杯・蓋が出土している。

S D 49 溝跡(第11図)

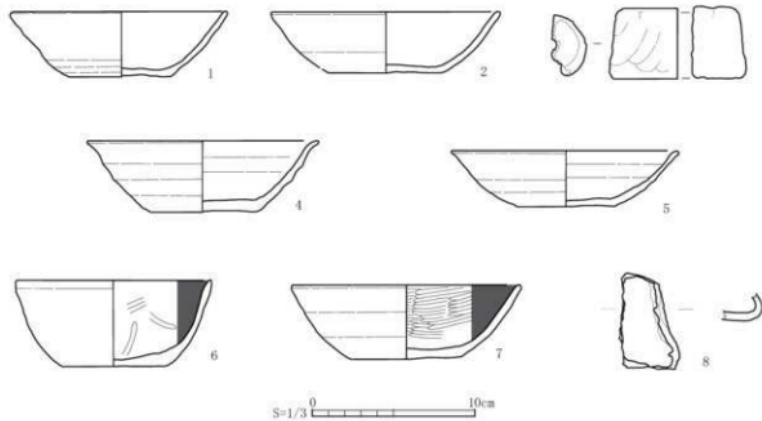
調査区南端部で発見した南北方向の溝であり、南側は調査区外に延びている。S D 48溝跡より新しい。確認できた長さは約1.7mであり、上幅25~33cm、深さは11cmである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は砂を多く含んだにぶい黄褐色土である。遺物は土師器壺(B類)、須恵器杯・蓋が出土している。



第11図 第Ⅲ層検出遺構平面図

(4) 堆積層出土遺物

第II層から土師器杯・高台付杯・甕(B類)、須恵器杯(第12図 1~2)・高台付杯・瓶・長頸瓶・蓋・平瓦、砥石、第III層からは土師器杯・甕(B類)、須恵器杯(第12図 4~5)・甕・蓋などが出土している。また、排水用の側溝から土師器杯(第12図 6~7)、紡錘車(第12図 3)、土師器耳皿(第12図 8)が出土している。



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	厚真 厚板	登録 番号	備考
		外面	内面						
1	須恵器・杯	口縁部・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	ロクロナデ	(13.4) 5/24	6.2 24/24	3.95	3-10	R13	第II層 V型
2	須恵器・杯	口縁部・体部: ロクロナデ 底部: ハラカヘリ	ロクロナデ	(13.9) 1/24	7.0 24/24	3.75	3-11	R14	第II層 V型
3	土師器罐車	直径: (5.6)、厚さ: 4.32、外面に指痕数有り				3-15	R17		層位不明
4	須恵器・杯	口縁部・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	ロクロナデ	(14.1) 11/24	(6.3) 12/24	4.3	3-12	R15	第II層 V型
5	須恵器・杯	口縁部・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	ロクロナデ	(13.9) 17/24	6.0 24/24	3.45	3-13	R16	第II層 V型
6	土師器・杯	体部: ロクロナデ 底部: 不明、ヘラケズリ跡有り	ヘラケズリ 黒色處理	(12.0) 4/24	(6.0) 7/24	5.3		R20	層位不明 B II型
7	土師器・杯	口縁部・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	ヘラケズリ 黒色處理	(14.0) 11/24	(6.6) 20/24	4.55	3-2	R19	層位不明 B V型
8	土師器耳皿	黑色處理	黑色處理	—	—	—	3-14	R18	層位不明

第12図 堆積層出土遺物

3 まとめ

今回の調査では、第V・IV・III層上面でそれぞれ遺構を確認しており、第V層上面検出遺構（A群：S I 38・39、S D 40・41）→第IV層上面検出遺構（B群：S I 42）→第III層上面検出遺構（C群：S D 43～49）の新旧関係が明らかである。また、最も新しいC群は、古代の遺物が出土する第II層によって覆われている。ここでは、比較的出土遺物の多いS I 39及び第II層の年代を求めた後、各群で発見した遺構の年代について検討を加える。

S I 39では床面直上から土師器甕、周溝から土師器杯・甕、須恵器甕、カマド内堆積土から土師器甕、須恵器瓶・甕、住居内堆積土から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、平瓦が出土している。周溝及びカマド内堆積土出土のものは少量であることから、ここでは住居内出土土器と一括して扱う。土師器杯にはA・B類があり、B類が大部分を占めている。いずれも小片であり、詳細は明らかでない。土師器甕にはA・B類があり、杯同様A類が大部分を占めている。このうち、B類には体部にタタキの痕跡が認められるものもある。須恵器杯にはI類5点、II類1点、III類11点、V類2点があり、底部の切り離しがヘラ切りまたは切り離し後再調整を施すものが主体的に認められる。須恵器瓶・甕はいずれも小片である。平瓦はII・B類が出土している。

第II層からは土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・杯蓋・瓶・甕、平瓦、砥石がある。土師器杯はすべてB類である。B II類が14点、B III類が1点、B V類が18点あり、底部の切り離し後再調整を施すものに比べ、回転糸切り無調整のものが若干多く認められる。土師器甕も杯同様すべてB類である。須恵器杯はIII類が21点、V類が19点であり、底部に再調整を施すものは認められない。須恵器瓶・甕はいずれも小片である。

これら出土した遺物をみると、土師器ではいずれもB類が含まれていることや、須恵系土器が認められないことから、およそ8世紀後葉～9世紀代の年代が考えられる。

西側に隣接する市川橋遺跡及び多賀城跡の調査成果によれば、8世紀後葉から9世紀代とされる土器群には延暦9～24年頃としたS X 1351 C河川出土土器^{註1)}、延暦24年を上限とする9世紀中葉頃としたS X 1351 D出土土器^{註2)}、9世紀中葉頃とされている多賀城跡S K 2167土壤出土土器^{註3)}、9世紀後半でも新しい段階としたS X 3400出土土器^{註4)}などがある。これら出土土器を概観すると、①8世紀後葉～9世紀初頭では土師器A・B類が供伴していることや須恵器V類の出土数が僅かであること、②9世紀前半代では須恵器III類が多数を占めるが、中頃になるとIII類とV類の割合が等しくなること、③9世紀後半になると土師器杯ではB V類が主体的に認められるようになるといった状況が確認されている。

これらと比較すると、S I 39出土遺物は土師器ではA・B類が供伴していることや、須恵器杯ではV類に比べI・II・III類の出土数が多いことから、8世紀後葉～9世紀初頭の年代が考えられる。II層出土土器は、土師器杯ではB V類の占める割合が多くなっていることや、須恵器杯ではIII・V類の割合がおよそ同程度となっている。このことから、9世紀中頃～後半頃の年代が推測される。

次に、各群で発見した遺構の年代について検討する。

註 1：多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003

註 2：註1と同じ

註 3：宮城県多賀城跡調査研究所「第62・63次調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報1992」1993

註 4：多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2—平成20年度発掘調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第95集 2009

A群は、後述するB群との関係より、下限を9世紀前半以前とすることができる。このうち、S I 38は8世紀後葉～9世紀初頭頃としたS I 39よりも古いことから、それ以前の年代が与えられる。S D 40はS I 39よりも新しいことから、9世紀初頭以降と考えられる。

B群のS I 42出土遺物をみると、土師器杯ではB II類が1点、須恵器杯ではIII類が3点、V類が1点ある。一方、上面を覆う第Ⅲ層からは、土師器杯B III類が1点、BV類が1点、須恵器杯III類が8点、V類が6点出土している。須恵器杯でIII・V類の割合がおよそ同じであることから、第Ⅲ層の堆積した年代は9世紀中頃と捉えることができる。のことから、S I 42については、およそ9世紀前半頃と考えておきたい。

C群の溝跡群については、第Ⅲ層及び第Ⅱ層の年代観より9世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

なお、本調査区では8世紀後葉～9世紀前半にかけて、居住域として利用されていることが明らかとなつた。一方、北側隣接地で実施した第7次調査では、9世紀後半頃の竪穴住居跡が3軒発見されている。のことから、本地区周辺は8世紀後葉～9世紀後半の長期間にわたり居住域として利用されていたものと考えられる。



第Ⅲ面上面 遺構検出状況
(南より)



S I 42 竪穴住居跡
(南より)



S D 40・41 溝跡
(西より)

写真図版1



S I 39 竪穴住居跡
遺物出土状況 (南より)

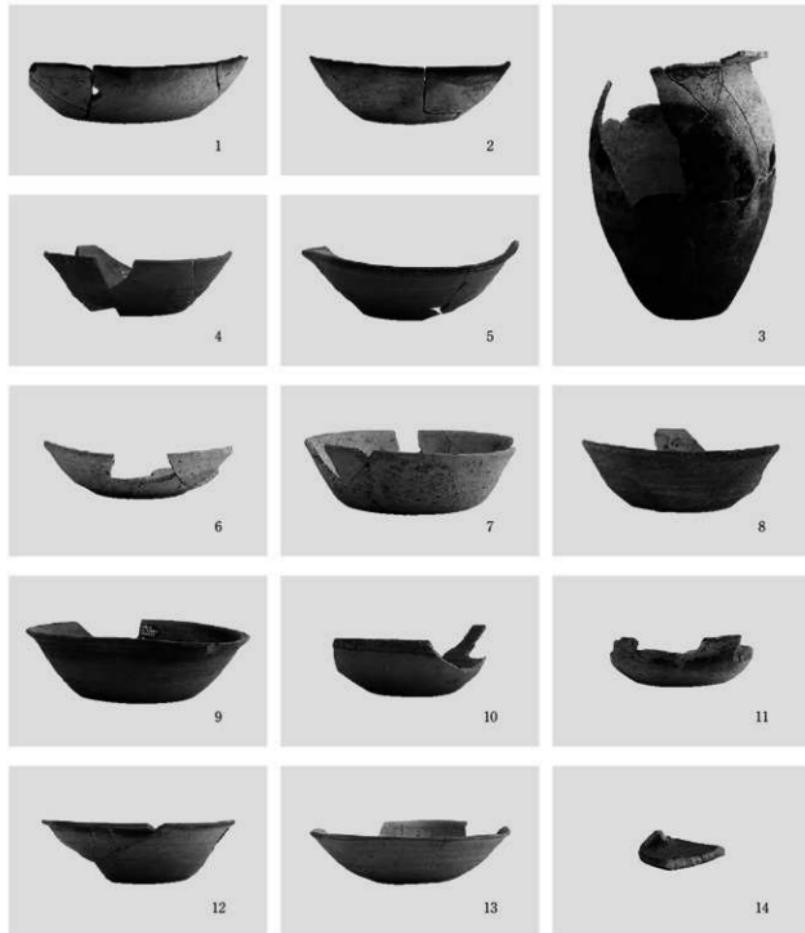


S I 39 竪穴住居跡
(北西より)



S I 38・39 竪穴住居跡
(西より)

写真図版2



- 1 : R 3 土師器杯 (第9図1)
 2 : R 19 土師器杯 (第12図7)
 3 : R 1 土師器甌 (第6図1)
 4 : R 5 須惠器杯 (第9図2)
 5 : R 6 須惠器杯 (第6図2)
 6 : R 7 須惠器杯 (第6図3)
 7 : R 9 須惠器杯 (第6図5)
 8 : R 10 須惠器杯 (第6図6)
 9 : R 11 須惠器杯 (第6図8)
 10 : R 13 須惠器杯 (第12図1)
 11 : R 14 須惠器杯 (第12図2)
 12 : R 15 須惠器杯 (第12図4)
 13 : R 16 須惠器杯 (第12図5)
 14 : R 18 土師器耳皿 (第12図8)
 15 : R 17 土製紡錘車 (第12図3)

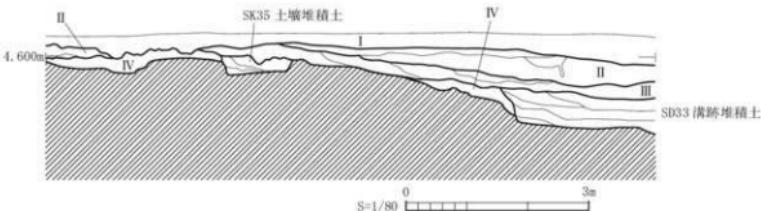
写真図版3

III-2 第11次調査の成果

1 基本層序

調査区における基本層序は次の通りである。調査区は東から西に傾斜しており、各層序は西に向かうにつれて厚くなる。

- I 層：暗オリーブ色のシルトで、現在の表土である。厚さ約20～50cmで調査区全域に分布する。
- II 層：暗オリーブ色のシルトである。厚さ約20～40cmで東側の一部を除きほぼ調査区全域に分布する。しまりは弱い。
- III 層：暗褐色のシルトである。厚さ約10～20cmで東側の一部を除きほぼ調査区全域に分布する。地山のブロックをわずかに含んでいる。SD34溝跡の検出面はIII層上面である。
- IV 層：にぶい黄褐色のシルトである。東側から西側に傾斜し始める所を除き、ほぼ調査区全域に分布する。SD33溝跡、SK35土壤の検出面はIV層上面である。
- V 層：明黄褐色のシルトで地山である。粘性を有する。SR32窯跡の検出面は地山上面である。



第1図 基本層序(調査区南壁面)

2 発見した遺構と遺物

本調査で発見した遺構は、窯跡1基、溝跡2条、土壤1基である。

(1) 窯跡

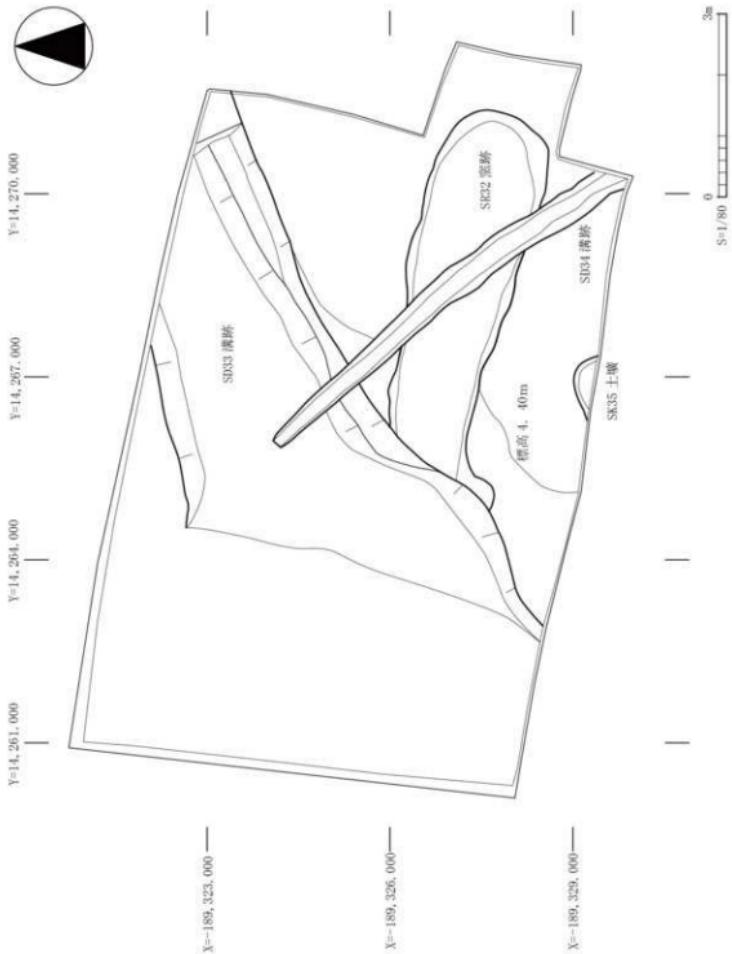
SR32窯跡
窯跡の調査は、工事で破壊の及ばない部分は可能な限り後世に残すため保存するという地権者との合意にもとづいて実施した。そこで、残存する焼成部・燃焼部は第2次床面まで完掘し、下部の状況を確認するために遺構のはば中央を縦断するようにサブトレーンチとして幅約20cmの溝を設定し、底面まで掘り下げた。焚口部は残存状況のより良好な南半分を床面まで掘り下げた。

〔位置・重複〕 調査区の南側に位置し、標高約5mの西側斜面に構築されている。窯跡の南側でSD33溝跡と、北側でSD34溝跡と重複しており、これらの溝よりも古い。

〔構造〕 窯の天井部を含む上部が削平及び崩落しているが、崩落した天井部の状況から地山を掘り抜いた地下式窯室と推測される。下方から焚口部、燃焼部と焼成部の一部を検出したが、削平や重複による破壊のため上位にある煙道部や下位の前庭部・灰原は確認できなかった。

〔方向〕 窯体の長軸はほぼ東西方向のE-12°-Wで、東でやや南に偏する。

〔平面形・規模〕 焚口部から焼成部まで残存し、その長さは約6.8mである。残存する平面形は、焼成部に最大幅(約18m)をもち、燃焼部・焚口部に向かって幅が狭くなる形状を呈している。ちなみに焼成部と燃焼部との境付近の幅は約10m、燃焼部と焚口部との境付近の幅も約10mである。焼成部の上位や煙道部は残存していないが、燃焼部は煙道部に向かって徐々に幅を狭め、窯体の全体形は胴張り型を呈するも



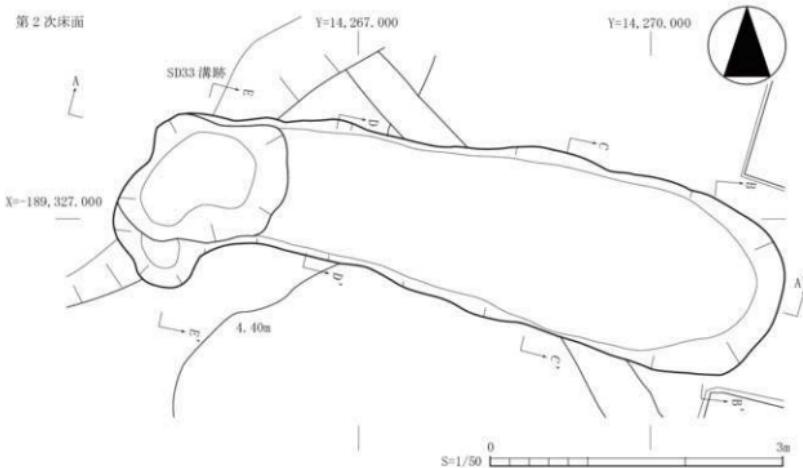
第2図 遺構配置図

のと推測される。なお、焚口部はSD33溝跡によって壊され、北側半分では10cm程度の壁面が残存するのみである。焚口部西半分の南側では平面形がやや丸みをもった長方形で底面より約15cm高い張り出しを確認できたが、削平の著しい北側ではその張り出しを認めることはできなかった。本来は、北側にも同様な張り出しが存在した可能性が考えられる。

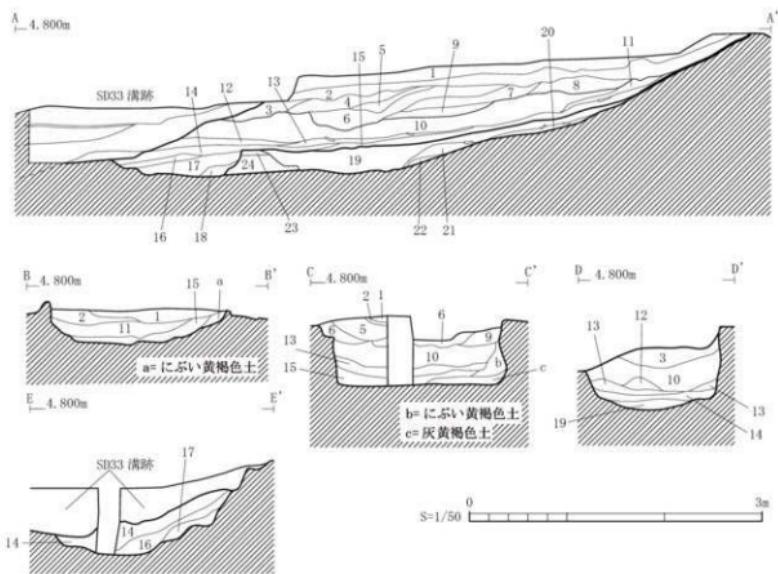
〔断面形〕 縦断面を見ると、焚口部から燃焼部にかけての底面の傾斜角度は平坦に近いほど緩やかであるが、焼成部から傾斜角度は徐々に増していく、全体的には弓状の弧を描く。次に横断面については、燃焼部や焼成部の床面から残存する壁面の立ち上がり角度をみると、やや内湾気味ではあるがほぼ直角に近い。天井を含む壁面の上部は削平を受けているため、窓の立面形は不明である。

〔焼成面〕 2面の存在が確認できた。第1次床面は単独では焚口部と燃焼部の境界付近で認められた。第1次床面に伴う天井の崩落土の下から長さ約0.8mにわたり加熱を受けた状態で残存している。また、焼成部の東端部分では長さ約1.4mにわたり加熱を受けた状態で残存している。この部分は第1次床面と第2次床面が同一で重複している。その間に挟まれた燃焼部や焼成部の西側においては、幅約20cmのサブトレーニチを設定し赤変した第1次床面と推定されるところまで調査したが、還元された面を検出することができなかった。のことから、第1次床面は第2次床面を構築する際に削り取られたものと判断した。

第2次床面は、焚口部から焼成部にかけての残存するすべて部分で認められる。焚口部は第1次床面上に堆積した天井の崩落土を地山まで掘り込んで底面としている。燃焼部と焼成部は本来の第1次床面をやや掘り下げたと思われる個所に最大で厚さ約25cm嵩上げして造られている。そのため、焚口部との境には約25cmの段ができる。焼成部における第2次床面の傾斜角度は約8度で、本来の第1次床面の傾斜角度は約15度と推測される。



第3図 S R 32窯跡 平面図



SR32 窟跡 土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
I	1 黄褐色土	崩落土。地山塊を含む。	II	13 灰オリーブ色土	砂質。固くしまる。
	2 明黄褐色土	崩落土。地山塊を含む。		14 黒色土	木炭層。硬化した地山土を含む。
	3 暗褐色土	崩落土。地山塊・木炭粒・燒土粒を含む。		15 灰オリーブ色土	砂質。固くしまる。
	4 暗褐色土	崩落土。赤変した地山塊を含む。		16 暗灰色土	木炭を多量に含む。
	5 黑色土	崩落土。硬化した壊壠落塊を含む。		17 黒色土	木炭層。地山土・燒土粒・燒土塊を含む。
	6 オリーブ褐色土	崩落土。木炭塊・燒土塊を含む。		18 暗灰色土	地山塊を多量に含む。
	7 暗褐色土	崩落土。硬化した木炭塊を含む。		19 灰褐色土	第2次床面の嵩上げ土。 砂質。固くしまる。木炭粒・燒土粒を含む。
	8 明暗褐色土	崩落土。地山塊を多量に含む。		20 オリーブ黒色土	第2次床面の嵩上げ土。砂質。固くしまる。
	9 黄褐色土	崩落土。木炭塊・燒土塊を含む。		21 暗オリーブ褐色土	第2次床面の嵩上げ土。砂質。固くしまる。
	10 にぶい 黄褐色土	窯壁鉢片・地山塊・燒土塊・木炭粒を含む。		22 明褐色土	第2次床面の嵩上げ土。 加熱を受け赤変。固くしまる。
II	11 明褐色土	粘性あり。		23 明黄褐色土	天井部の崩落土。上面が第2次床面。
	12 黑色土	木炭層。地山土・燒土粒・燒土塊を含む。		24 明黄褐色土	天井部の崩落土。下部が赤変色・還元色を呈す。固くしまっている。

第4図 S R 32 窟跡 断面図

〔堆積土〕 24層に区分したが、次の4層に大別された。

I層：天井及び側壁の崩落土である（1～11層）。特に第2次床面に近い7～10層には加熱を受けて固く変色した地山土が多量に含まれている。

II層：窓の廃絶後の堆積土で第2次床面を覆っている（12層～15層）。燃焼部と焼成部を覆っている堆積土のうち、床面に近くなる層ほど堅くしまっており、焼土・木炭を多量に含んでいる。

III層：焚口部を覆っている堆積土である（16層～18層）。16層～17層は黒色土で木炭を多量に含む。18層は焚口部の崩落土である。

IV層：第2次床面を構築するために嵩上げされた土で（19層～22層）、加熱を受けて堅くしまっている。19層上面は第2次床面となっている。また、23・24層は燃焼部を覆う天井部の崩落土で、23層上面は第2次床面となっている。22・23層の西側の面は第2次床面に対応した焚口部の壁面となっており、高さは約25cmである。

〔天井部〕 すべて残存する窓体内に崩落して堆積している。焚口部と境を接する燃焼部の天井の西端部は第1次床面の使用時に崩落し、その他の天井部は第2次床面での使用が終了し廃絶された後に崩落したものである。側壁の中で最も残存状態の良好な燃焼部の南側壁面で約60cmの高さであり、その壁面の断面は第2次床面から直線的に立ち上がっているが、天井の高さや立面形を推測することは困難である。

〔焼成部〕 削平を受けており、煙道部及び煙道部に近い部分は残存していない。第1次・第2次共通床面の西側では幅約20cmのサブトレンチによる調査の結果、第1次床面をやや削り取った後に土を嵩上げして第2次床面を構築していることが確認された。第1次・第2次共通床面及び第2次床面に対応する側壁は、地山の掘り方をそのまま使用しており、灰オリーブ色や暗青灰色に還元され硬化している。第1次・第2次共通床面や第2次床面には、拳大やそれよりやや大きめの石や須恵器壺の破片が認められ、焼台として使用されたものと考えられる。

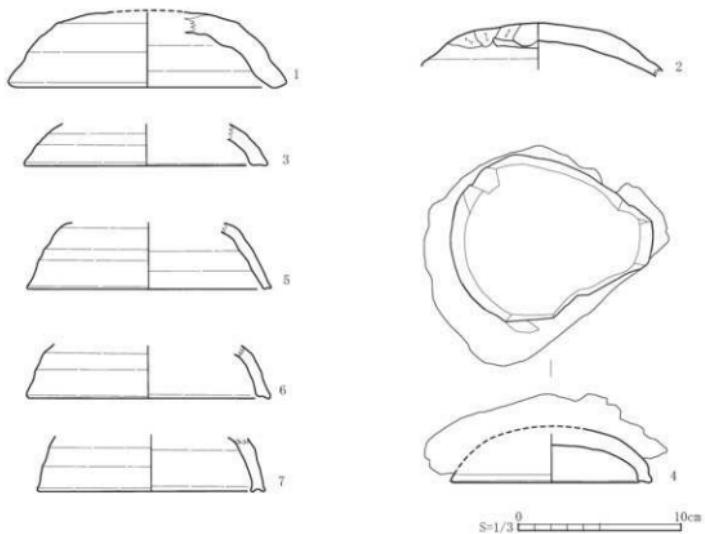
〔燃焼部〕 第1次床面は焚口部との境界付近で天井崩落土の直下で検出され、床面には還元された痕跡が認められる。天井崩落土の上面や嵩上げされた土の上面が第2次床面となっている。第1次・第2次床面ともほぼ平坦であり、焼成部との境は明瞭ではない。第2次床面上には焚口部との境から焼成部に向かって約80cmの範囲で炭化物の層が認められる。後世の攪乱や削平に加えて窓跡よりも新しいSD33溝跡に壊されており、側壁は南側で高さ約60cm、北側で約25cm残存するのみである。側壁は地山の掘り方をそのまま使用しており、赤褐色に変化し、やや硬くしまっている。

〔焚口部〕 底面は燃焼部の第2次床面からは約25cmの段差を有している。なお、燃焼部の天井崩落土直下で確認された第1次床面からはほぼ平坦に統一しており、焚口部の側壁もスムーズに燃焼部から連続している。これらのことから、現在残っている底面は燃焼部等の第2次床面に伴うものではあるが、第1次底面も第2次底面と共に共通して使用されたものと考えられる。平面的に見ると、南側には底面より一段高くなつたやや丸みをもつた長方形の張り出しが認められるが、後世の削平やSD33溝跡による破壊のため北側には現存しない。焚口部の堆積土は張り出し部の堆積土と同一である。これらのことから、張り出し部は焚口部と同時に機能しており、焚口部の一部と考えることもできる。焚口部の底面及び側壁は、第2次床面時の燃焼部との境の部分を除いて、地山の掘り方をそのまま使用している。両者とも加熱を受けて変色した痕跡は認められない。

〔出土遺物〕 須恵器と焼台が出土しているが、いずれも破片である（第1表）。須恵器には蓋・壺・瓶などがあるが、いずれにも海綿骨針は認められない。

蓋

15点(8.9%)出土しているが、そのうち図化できたものは7点（第5図）である。全体的に厚手につくられた蓋（蓋A類）と、薄手につくられた蓋（蓋B類）に大別され、蓋A類が10点で蓋B類は5点である。



番号	種類	遺物 部位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備 考
			外 面	内 面						
1	須恵器 蓋	直縁	口縁部・体部：ロクロナデ 天井部：ヘラ切り、手持ちハラケズリ	ロクロナデ	(17.0) 6/24	—	47		R28	A1類
2	須恵器 蓋	1次床面	体部：ロクロナデ 天井部：ヘラ切り、手持ちハラケズリ	ロクロナデ	—	(10.5) 12/24	—		R34	A類
3	須恵器 蓋	直縁	体部：ロクロナデ	ロクロナデ	(13.0) 1/24	—	—		R30	A2類
4	須恵器 蓋	2次床面	口縁部・体部：ロクロナデ	ロクロナデ	(12.4) 3/24	—	(34)	3-2	R13	A2類 粘土塊に付着
5	須恵器 蓋	2次床面	口縁部・体部：ロクロナデ	ロクロナデ	(13.6) 2/24	—	(45)		38	B類
6	須恵器 蓋	直縁	口縁部・体部：ロクロナデ	ロクロナデ	(15.0) 2/24	—	—		R29	B類 内外面に自然縫
7	須恵器 蓋	直縁	口縁部・体部：ロクロナデ	ロクロナデ	(14.0) 2/24	—	—		R31	B類 内外面に自然縫

第5図 SR 32窯跡 出土遺物1(蓋)

蓋A類をみると、1は丸底風の天井部をもち、体部が湾曲しながら口縁部に至る。天井部と体部の境には稜が形成される。口縁部は外傾気味に開き、口縁端部は丸みをもっておさまる（A1類）。天井部はヘラ切りの後、周縁部がヘラケズリ調整されている。2は体下部から口縁部を欠いている。丸底風の天井部をもち、体部はゆるやかに外傾している。天井部はヘラ切りされた後、全面に手持ちヘラケズリされており、一部体上部に及ぶところもある。ヘラケズリが天井部のみ施されたところには体部との境に稜が認められるが、ヘラケズリが体部まで及んだところでは天井部との境は不明瞭である。3は体下部から口縁部にかけて残存している。体部がやや内湾気味に口縁部に至る。口縁端部は外側にわずかにつまみ出され、平坦面には軽い窪みを一周させている（A2類）。そのため、受け口状にも見える。4は焼台に転用されたもので、粘土塊に天井部外面が貼り付いた状態になっている。天井部の内面を観察すると、天井部は丸底風である。天井部から体部の境には稜や段はないようで、体部から内湾気味に口縁部に至る。口縁端部は3と同様に外側にわずかにつまみ出し、平坦面には軽い窪みを一周させている（A2類）。その他、図化できなかつた天井部から体上部にかけての破片の中には、天井部がヘラ切りで天井部との境の体上部が手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリのものも認められる。

蓋B類をみると、5～7は天井部を欠いている。5は体部から口縁部まで外傾している。口縁端部は幅の狭い平坦面を形成し、わずかな窪みを一周させている。6は体部が内湾気味に口縁部に至り、口縁部が外反している。7は体部が内湾気味に口縁部に至り、口縁部が外傾している。6・7とも口縁端部には5よりも幅の広い平坦面が形成され、軽い窪みを一周させている。なお、6・7には自然釉がみられ、焼成は1～5よりもよい。

甕

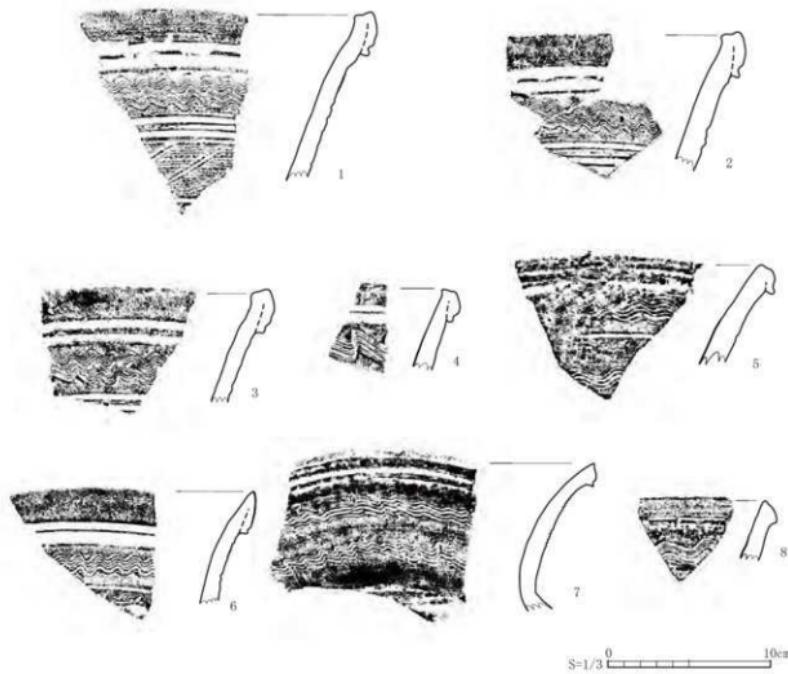
最も出土量の多い器種で、144点（85.7%）出土している。そのうち24点を図化した（第6図～第9図）。口縁部のある破片はその形態から3つに大別できる。

甕A類（第6図1～5）は頸部から外傾して口縁部に至り、口縁端部に近づくと外側に折り返して厚い突帯縁を作り出している。突帯縁の下部には1条の沈線、口縁端部の平坦面には軽い窪みが巡っている。甕A a類（1～3）は幅の広い突帯縁をもち、頸部は2条の横位の沈線で文様帶が区画されている。口縁部のすぐ下の文様帶には櫛描き波状文が施されている。1ではその下の文様帶には横位のカキメが施された後に、左斜め方向に手描きの刻線文が施され、さらにその下にも沈線が巡っている。2～3では上段の櫛描き波状文とその下の段のカキメまで確認できる。甕A b類（4・5）の突帯縁の幅は甕A a類に比べて狭い。頸部は1条の横位の沈線で文様帶が区画され、4では上段の櫛描き波状文まで、5ではその上下の櫛描き波状文が確認される。

甕B類（第6図6）は甕A類に比して薄手で、丁寧に製作されており、内外面とも自然釉が見られるなど胎土・焼成とも良好である。頸部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくと外側に折り返して突帯縁を作り出している。口縁端部に平坦面はない。突帯縁の下部には1条の沈線が巡っている。頸部は横位の沈線で文様帶が区画されている。口縁部のすぐ下の文様帶には櫛描き波状文が施されている。

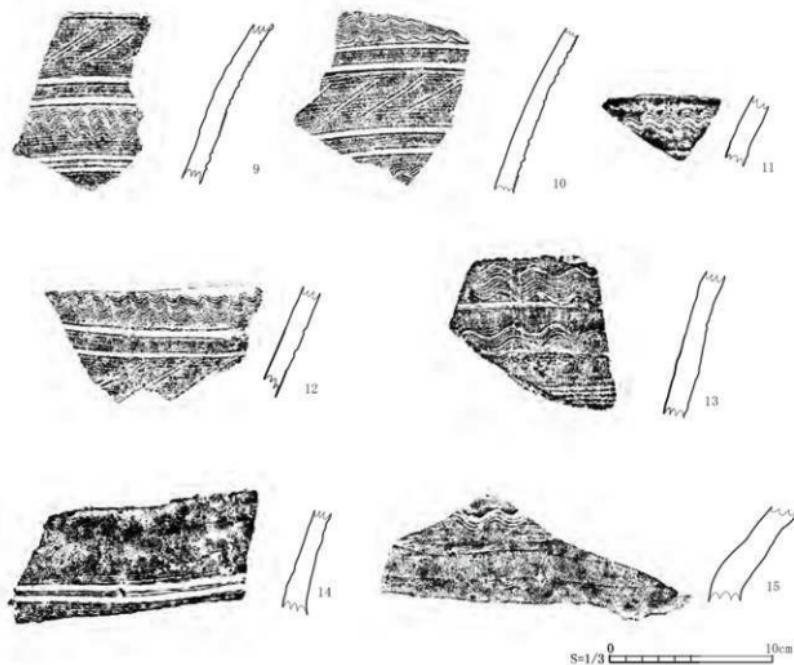
甕C類（第6図7～8）は頸部から外傾して口縁部に至り、口縁端部のやや下を外側につまみ出して突帯縁を作り出している。突帯縁のつまみ出しの上には浅い沈線が巡る。7の頸部には上下2段の櫛描き波状文が巡っているが、8では上段の櫛描き波状文が残存するのみである。

頸部の破片（第7図9～15）のうち9～12は、甕A a類に伴うものである。2条の横位の沈線で文様帶が



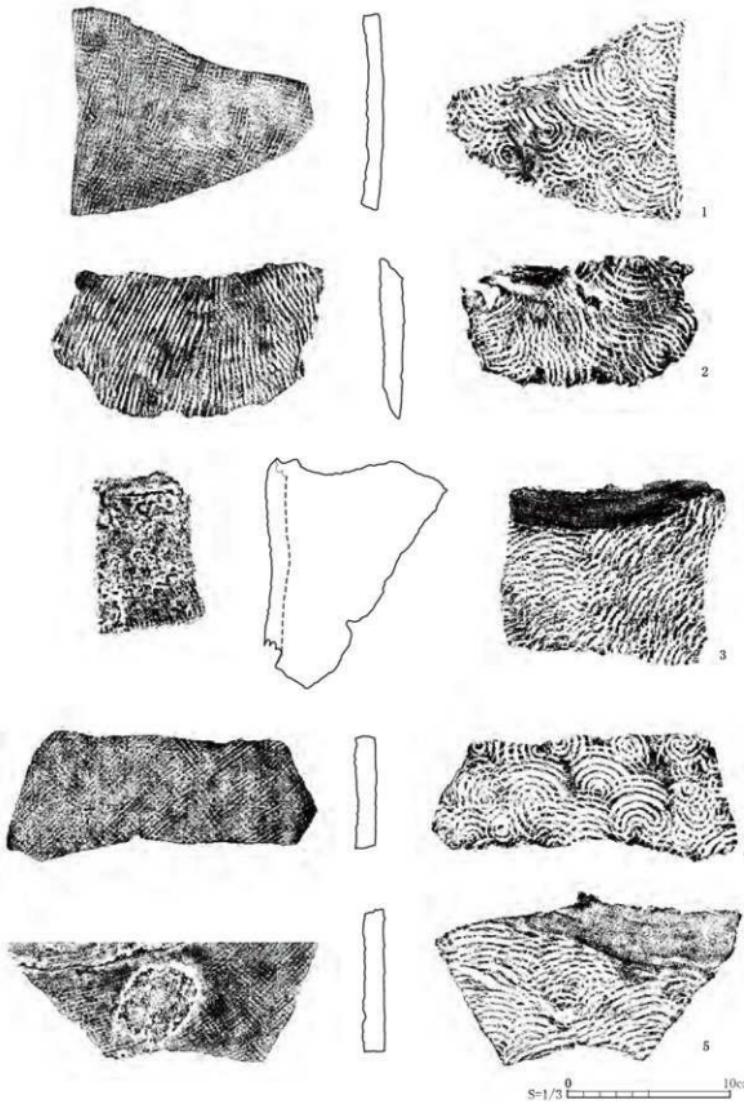
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
			外 面	内 面					
1	須志器 類	2次床面直上	ロクロナデ、沈縫 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R20	Aa類
2	須志器 類	N層	ロクロナデ、沈縫 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R24	Aa類
3	須志器 類	2次床面	ロクロナデ、沈縫 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R40	Aa類
4	須志器 類	2次床面直上	ロクロナデ、沈縫 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R43	Ab類 内方に自然縫
5	須志器 類	2次床面直上	ロクロナデ、沈縫 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R42	Ab類
6	須志器 類	2次床面直上	ロクロナデ 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R21	B類
7	須志器 類	2次床面	ロクロナデ 櫛目き波状文、ヘラケズリ	ロクロナデ	—	—	—	R41	C類
8	須志器 類	2次床面直上	ロクロナデ 櫛目き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R44	C類

第6図 SR 32窯跡 出土遺物2(甕)

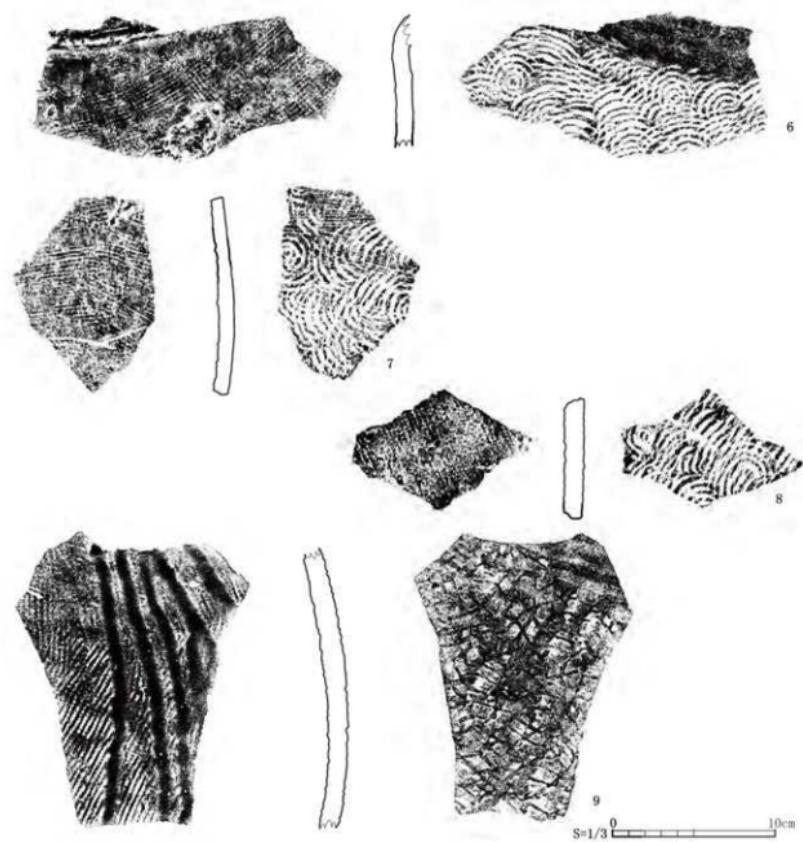


番号	種類	層位	等 雜		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備 考
			外 面	内 面					
9	頸部器 底	2次床面直上	ロクロナデ 横書き波状文、手描きの別面文	ロクロナデ	—	—	—	R22	Aa類
10	頸部器 底	2次床面直上	ロクロナデ 横書き波状文、手描きの別面文	ロクロナデ	—	—	—	R25	Aa類
11	頸部器 底	2次床面	ロクロナデ 横書き波状文、手描きの別面文	ロクロナデ	—	—	—	R23	Aa類
12	頸部器 底	2次床面	ロクロナデ、沈窓 横書き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R45	Aa類
13	頸部器 底	2次床面	カキメ、沈窓 横書き波状文、ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	R48	Ab類
14	頸部器 底	2次床面	ロクロナデ カキメ、沈窓	ロクロナデ	—	—	—	R46	
15	頸部器 底	2次床面	ロクロナデ 横書き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R47	Ab類

第7図 SR 32窯跡 出土遺物3(甕)



第8図 SR 32窯跡 出土遺物4(甕)



番号	種類	遺構 層位	特徴・参考	写真 図版	登録 番号	番号	種類	遺構 層位	特徴・参考	写真 図版	登録 番号
1	頸壺器 裏	2次床面	平行明き 同心円当て		R1	6	頸壺器 裏	2次床面	平行明き。粘土塊 同心円当て		R7
2	頸壺器 裏	2次床面	平行明き 同心円当て		R2	7	頸壺器 裏	1次床面	平行明き 同心円当て		R8
3	頸壺器 裏	1次床面	平行明き 同心円当て。粘土塊	3-2	R3	8	頸壺器 裏	2次床面	平行明き 同心円当て		R9
4	頸壺器 裏	1次床面	平行明き 同心円当て		R4	9	頸壺器 裏	2次床面直上	平行明き。自然縦 格子状当て		R18
5	頸壺器 裏	1次床面	平行明き。粘土塊 同心円当て		R5						

第9図 SR 32窯跡 出土遺物5(甕)

区画され、櫛描き波状文と左斜め方向に手描きの刻線文が交互に施される。13は1条の横位の沈線で文様帯が区画され、その上下に櫛描き波状文が施されていることから壺A b類に伴うものである。14は2条の横位の沈線が巡っているが、その下段に文様はなく、上段についてはわずかな幅しか残存していないため不明である。15には櫛描き波状文が施されている。

壺の口縁部や頸部の破片を観察すると、製作技法的には、始めに器形の整形後に頸部から体上部にかけて横位のカキメが施され、次いで横位の沈線を巡らせて区画帯を形成し、最後に区画帯に櫛描き波状文や手描きの刻線文が施されている。

胴部の破片(第8図～第9図)の中には、粘土の付着や再加熱を受けた痕跡から焼台として使用されたものも多い。第9図9を除く破片は、外面には幅の狭い平行の叩き痕が全面にわたって見られ、格子状を呈しており、内面には同心円状の当て具痕が認められる。第9図9は、外面には全面にわたって自然軸と幅の狭い平行の叩き痕が見られ、格子状を呈している。内面には幅の広い格子状の当て具痕が見られる。

器種不明品

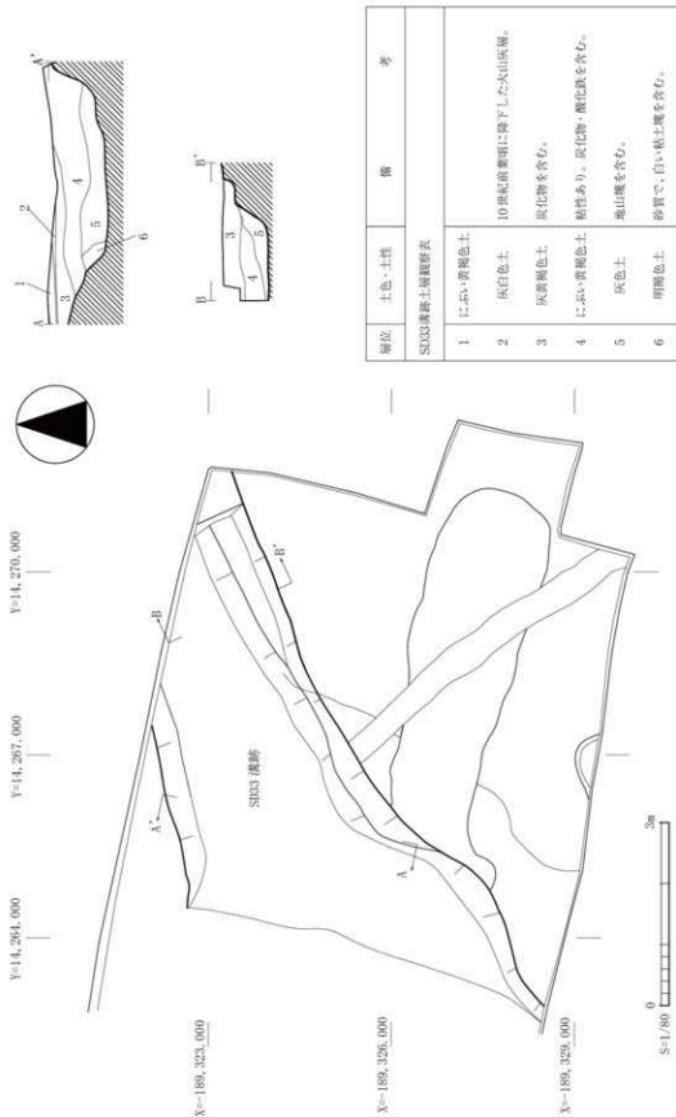
瓶類の破片と推測される破片が9点あるが、器種を特定するのは難しく、図化もできなかった。そのうち、2点は色調・胎土・焼成とも同じであるが、大きさや厚さなどに違いが認められる。両者とも外面には方向の異なるカキメが見られるが、内面は小型ものがきれいなナデ調整であるのに対して、大型ものは器面上に凹凸がありナデ調整が不明瞭である。小型のものは肩にあたる部分の破片と思われ、壺の破片である可能性もある。大型のものは内面の凹凸や破片の断面観察から、横瓶の体部の蓋をした部分と考えられる。もう1点は小型の器種で薄手であり、胎土・焼成とも良好で内外面に自然軸が見られる。胴部の最大径の部分の破片と思われ、外側は最大径の上部にはロクロナデ、下部は回転ヘラケズリが施されていることから、謙の可能性も考えられる。

(2) 溝 跡

S D 33溝跡

調査区北東隅から南西部にかけての第IV層上面で検出した。西側は削平や搅乱のため壊されているが、北東側はさらに調査区外に延びている。S R 32窯跡・SD 34溝跡と重複し、S R 32窯跡より新しく、SD 34溝跡より古い。確認できた長さは約10.2mである。上幅は2.7～5.2m、下幅は1.7～4.5mで、南西に向かって幅が広くなる。検出面から底面までの深さは最大で約0.8mである。底面はほぼ平坦で、西側にゆるやかに傾斜している。壁の立ち上がりは全体的に緩やかであるが、南側壁の一部では傾斜角度が変化したりテラス状になったりするところもある。堆積土はすべて自然堆積層である。そのうち第2層の灰白色土は10世紀前葉に降下したとされる厚さ2～5cmの灰白色火山灰である。

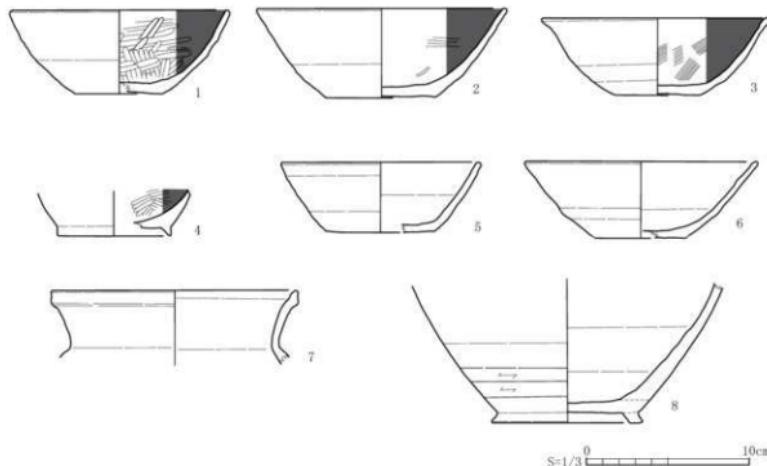
遺物は土師器杯・壺、須恵器杯・蓋・壺・長頸瓶、瓦、木製品などの破片が出土している(第11図～第13図、第1表)。土器類のうち第1層出土のものは土師器48点、須恵器17点・丸瓦1点・平瓦1点の計67点で、第3層以下から出土のものは土師器657点、須恵器426点・丸瓦5点・平瓦7点の計1092点であり、第3層以下から出土した土器が圧倒的に多い。第3層以下の遺物では4～6層出土のものは非常に少なく、第3層出土のものが大部分を占める。これらの堆積土から出土した土師器杯はすべてロクロ使用・内面黒色処理のもので、そのうち底部切り離しがわかる12点の杯では第3層出土のヘラ切り無調整(B III類)の1点を除くとすべて回転糸切り無調整(B V類)のものである。また、須恵器は全くみられない。図化できたのは第1



第10図 SD 33溝跡 平面図・断面図

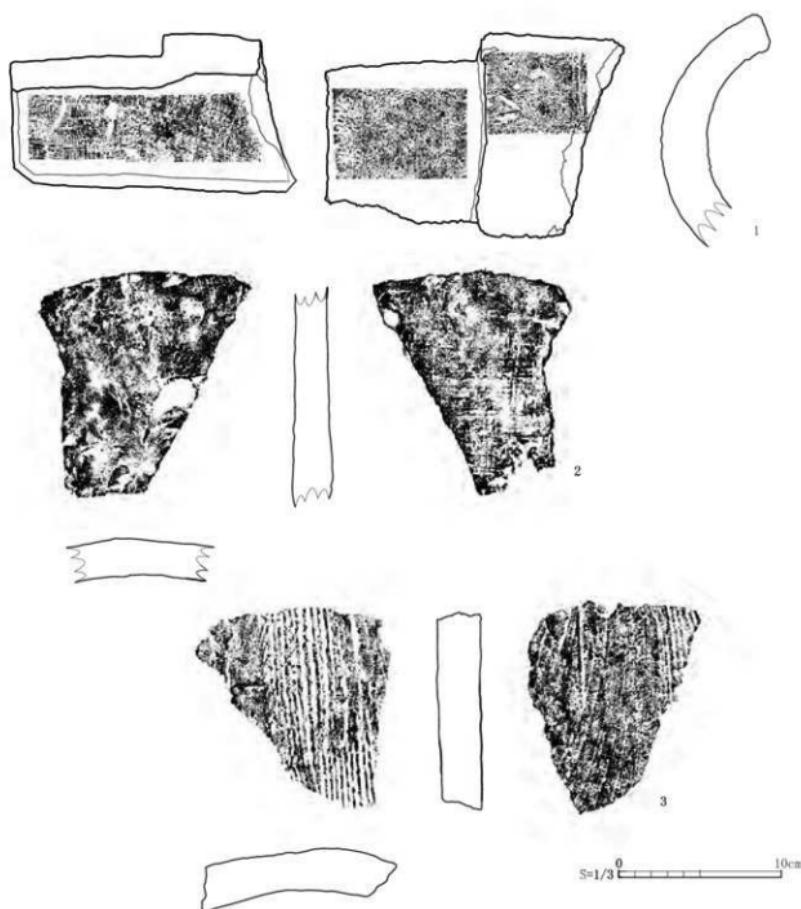
層では土師器杯の3点で、他は第3層以下の遺物である。

土師器(第11図1~4)では、第1層出土の杯(1~3)はいずれも製作にロクロが使用され、底部は磨滅のため不明な3を除き回転系切りで無調整(BV類)である。体部が内縁気味に立ち上がりそのまま口縁部が外傾するもの(1・2)と口縁部が外反するもの(3)がある。内面は黒色処理とヘラミガキが施され、体部外面はロクロナデ調整である。4は体下部と底部が残存する高台付杯で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。底部の切り離しは磨滅のため不明である。



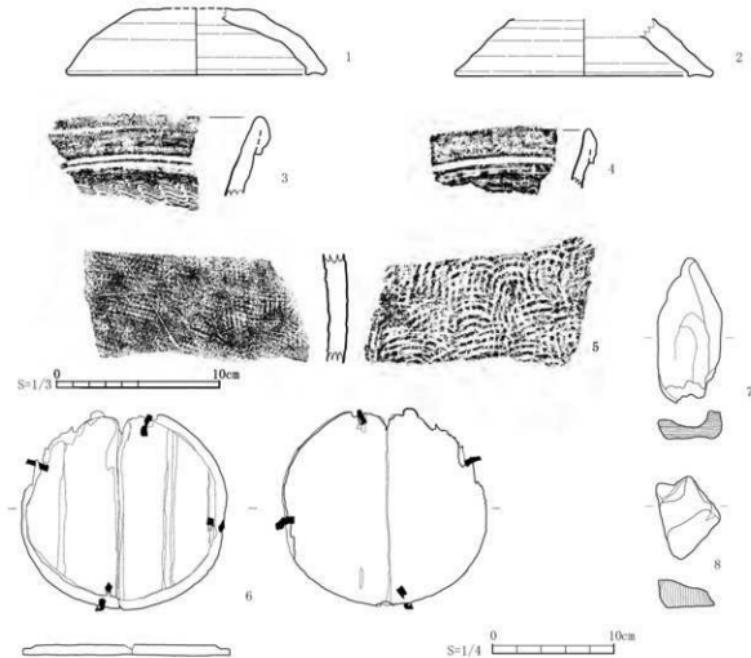
番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
			外 面	内 面					
1	土師器 杯	SD33溝跡 1層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転系切り	ヘラミガキ 黒色処理	(13.4) 6/24	(5.4) 9/24	5.1	R11	
2	土師器 杯	SD33溝跡 1層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転系切り	ヘラミガキ 黒色処理	(15.3) 3/24	(6.8) 24/24	5.5	R15	
3	土師器 杯	SD33溝跡 1層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：埋蔵のため不明	ヘラミガキ 黒色処理	(14.1) 9/24	(3.2) 24/24	4.7	R17	
4	土師器 高台付杯	SD33溝跡 1層	体部：ロクロナデ 底部：埋蔵のため不明	ヘラミガキ 黒色処理	— —/24	(6.8) —/24	—	R49	灰白色土の下層
5	埴生器 杯	SD33溝跡 3層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転系切り	ロクロナデ	(32.0) 9/24	(6.8) 4/24	4.3	R50	灰白色土の下層
6	埴生器 杯	SD33溝跡 3層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転系切り	ロクロナデ	(14.3) 3/24	(5.6) 6/24	4.7	R12	灰白色土の下層
7	埴生器 杯	SD33溝跡 3層	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.8) 7/24	—	—	R51	一部、口縁部に自然 縫
8	埴生器 瓶	SD33溝跡 4層	体部：下部に回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	—	—	R10	高台付き

第11図 SD 33溝跡 出土遺物1



番号	種類	遺構 部位	特 質		大きさ	多賀城政庁 分類	登録 番号	備 考
			外 面	内 面				
1	丸瓦	SD33溝跡	縫合き目、ナデ	布目	長さ：184 幅：143、厚さ：24	II Ba	R19	灰白色土の下層 粘土緑色作り
2	平瓦	SD33溝跡	縫合き目 ケズリ、ナデ	布目、凸型右压痕	長さ：136 幅：123、厚さ：23	I A-a	R65	灰白色土の下層 粘土緑色作り
3	平瓦	SD33溝跡 3個	縫合き目、ナデ	布目 素切り、粘土合せ目	長さ：124 幅：116、厚さ：26	II B-a2	R54	一枚作り

第12図 S D 33溝跡 出土遺物2



番号	種類	遺構 部位	特徴		L1# 2/24	成様 L/24	器高 (4.2)	登録 番号	備考
			外 面	内 面					
1	環状器 蓋	SD33溝跡 2号	口縁部・体部:ロクロナデ 天井部:ハラケズリ	ロクロナデ	(16.0) 2/24	(7.2) L/24	(4.2)	R11	A2類 灰白色土の下層
2	環状器 蓋	SD33溝跡 2号	口縁部・体部:ロクロナデ	ロクロナデ	(16.0) 2/24	—	—	R27	A2類 灰白色土の下層
3	環状器 蓋	SD33溝跡 2号	ロクロナデ, 沈縮 模様き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R52	日輪 灰白色土の下層
4	環状器 蓋	SD33溝跡 2号	ロクロナデ, 沈縮 模様き波状文	ロクロナデ	—	—	—	R53	日輪 灰白色土の下層
5	環状器 蓋	SD33溝跡 3号	体部:カキメ, 平行叩き	同心円凸	—	—	—	R14	内外面に自然縫
番号	種類	遺構 部位	特徴					登録 番号	備考
6	木製品 曲げ物	SD33溝跡 5号	円形曲げ物の蓋もしくは底板 直径:18.0, 厚さ:0.9 固定用の痕跡4箇所					R60	
7	木製品	SD33溝跡 5号	角柱の一部か 長さ:13.4, 幅:5.8, 厚さ:2.4 先端を丸めた状況の面取り					R61	
8	木製品	SD33溝跡 5号	角柱の一部か 長さ:6.7, 幅:5.7, 厚さ:3.0 片刃のように尖らした形状の面取り					R62	

第13図 SD 33溝跡 出土遺物3

須恵器(第11図5～8)では、5・6の杯は体部から口縁部まで外傾している。底部切り離しは5が回転ヘラ切り(Ⅲ類)、6が回転糸切り(V類)で、ともに無調整である。7は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、薄手であり小型の壺と思われる。推定される口縁径は14.8cmである。外反した頸部をもち、口縁部は上方につまみ出され、突帯縁状を呈している。内外面に自然釉が見られる。8は高台付瓶で、体下部から底部にかけての破片である。体下部からやや内湾気味に底部に至り、底部にはやや外に踏ん張った高台が付く。体下部から底部全面に回転ヘラケズリが施されており、底部の切り離しは不明である。

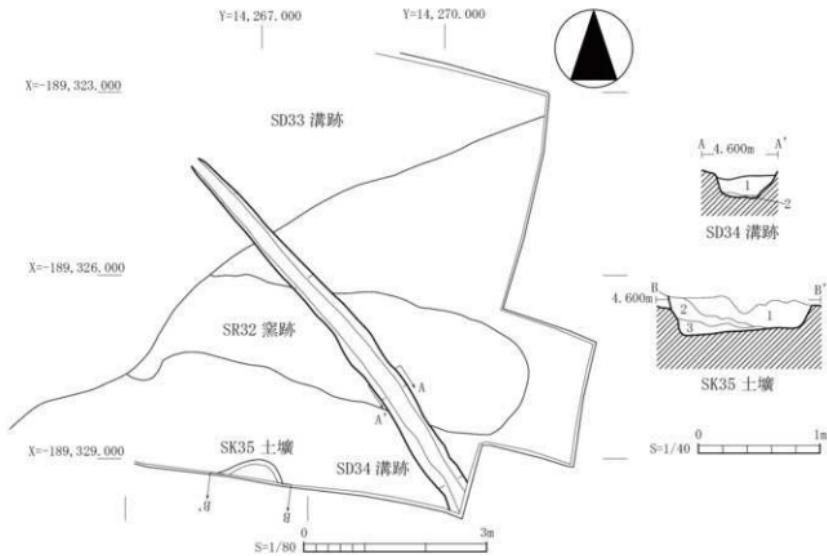
瓦(第12図1～3)には丸瓦と平瓦がある。1は丸瓦の破片である。粘土紐巻き作りの有段丸瓦である。凸面のほぼ全面にロクロナデ調整痕が見られるが、玉縁部の先端部や体部の一部にはそれ以前の工程の繩叩き痕が認められる。側面や小口面はヘラケズリ調整が施されている。宮城県多賀城跡調査研究所の分類によるⅡB類-aタイプに相当すると考えられる。2と3は平瓦の破片である。2は桶巻き作りで製作され、凹面には布目・ナデ・凸型台圧痕が、凸面には繩叩き目・ケズリ・ナデが認められることから、宮城県多賀城跡調査研究所の分類によるIA類-aタイプに相当すると考えられる。3は一枚作りで製作され、凹面には布目・ナデが、凸面には繩叩き目・凸型台圧痕が認められ、しかも繩叩き目が平瓦の長軸に平行し瓦自体が灰色ないし黒色を基調としていることから、宮城県多賀城跡調査研究所の分類によるⅡB類-a2タイプに相当すると考えられる。

なお、SD 33溝跡からはSR 32窯跡からの混入品と考えられる須恵器(第13図)の破片も出土している。1は厚手の蓋で、丸底風の天井部をもち、体上部はゆるやかに外傾し、やや屈曲気味に体下部と口縁部に至る。境には稜が見られる。天井部はヘラ切りされ、体上部は回転ヘラケズリされている。2も厚手の蓋で、天井部を欠いている。体部が外傾したまま口縁部に至る。1・2とも口縁端部の内側が約1mmつまみ出され段を形成するように一周し、口縁端部の平坦面には軽い窪みが一周している(A2類)。3・4は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。ともに口縁部が折り返され突帯縁が作り出されるが、口縁端部に平坦面はない(B類)。突帯縁の下部には1条の沈線が巡っている。口縁部の下には櫛描き波状文が施されている。5は壺の胴部破片である。内外面に自然釉が見られ、外面には平行の叩き痕が見られ、格子状を呈しているところもある。内面には同心円状の当て具痕が認められる。

本製品は第5層から3点出土している(第13図6～8)。6は円形曲げ物の蓋板もしくは底板と考えられる。ほぼ中央から二つに割れている。4か所に側面との固定用の樹皮がみられる。7・8は角材の一部かと思われる。両者とも斜め方向に面取りされており、7は杭状、8は片刃の楔状を呈している。

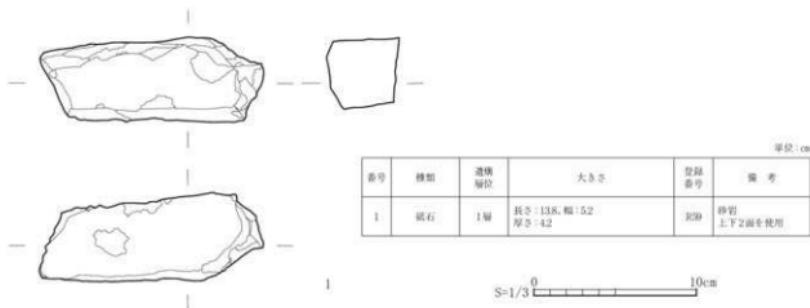
S D 34溝跡

調査区南東隅から中央部の第Ⅲ層上面で検出した。南東から北西方向に延びて、調査区のほぼ中央付近まで確認できた。南東隅からはさらに調査区外に延びている。SR 32窯跡・SD 33溝跡と重複し、両者より新しい。確認できた長さは約6.9mである。上幅は0.3～0.5m、下幅は0.2～0.3mで、北西に向かって狭くなっていく。検出面から底面までの深さは最大で約0.2mである。底面はほぼ平坦で西側にゆるやかに傾斜し、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土はすべて自然堆積層である。遺物は土師器の破片5点、須恵器の破片34点、砥石1点が出土しているが、土器類はいずれも細片である。わずかに砥石1点(第15図)を図化できたにすぎない。



層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD34 溝跡土層観察表					
1	灰黄褐色土	粘性あり。酸化鉄を含む。	1	にぶい黄褐色土	しまり有り。
2	にぶい黄褐色土	粘性あり。地山塊を含む。	2	にぶい黄褐色土	粘性有り。炭化物・酸化物を含む。
			3	暗褐色土	炭化物を含む。

第14図 SD 34溝跡・SK 35土壤 平面図・断面図



第15図 SD 34溝跡 出土遺物

(3) 土 壤

S K 35土壌

調査区の南端の地山面で遺構の北側部分を検出したのみである。そのため平面形等は不明である。規模は東西1.1m以上、南北0.6m以上で、深さは0.15~0.3mである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は出土していない。

(4) 遺構以外の出土遺物

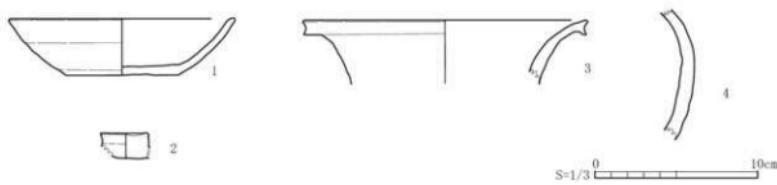
基本層序の第Ⅰ層と第Ⅱ層から出土した須恵器がある(第16図1~4)。いずれも破片であるが、4点図化できた。1は杯で、底部は大きいが器高は低く、体部は内縁気味に外傾して口縁部に至る。底部が回転系切りで無調整のものである。2は杯蓋のつまみで、外縁よりも低い宝珠のつまみである(註1)。3は甕の頸部で、頸部は外反している。口縁端部は上下につまみ出され、く字状の突帯縁を呈する。推定される口縁径は17.4cmである。4は瓶の胴部破片であるが器種の特定は困難である。

3 まとめ

今回の調査で発見された遺構は、窯跡1基、溝跡2条、土壌1基である。これらの遺構について年代を中心にしてまとめることにする。

(1) 窯 跡

S R 32窯跡は須恵器を焼成した地下式窯窯である。焚口部、燃焼部、焼成部の一部は検出できたが、削



番号	種類	遺構 層位	特 徴		口縁 残存率	底縁 残存率	器高	登録 番号	備 考
			外 面	内 面					
1	須恵器 杯	基本層序 Ⅰ層	口縁部・底部:ロクロナデ 底部:回転系切り	ロクロナデ	(13.9) 7/24	(6.9) 10/24	39	R16	
2	須恵器 蓋	基本層序 Ⅰ層			—	—	—	R57	
3	須恵器 甕	基本層序 Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	17.4	—	—	R56	
4	須恵器 瓶	基本層序 Ⅰ層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	R58	

第16図 基本層序第Ⅰ・Ⅱ層 出土遺物

(註1) 山王遺跡八幡地区 S D 100溝跡・山王遺跡 S I 491堅穴住居跡及び山王遺跡八幡地区 S D 2050河川跡第2A層から出土した杯蓋のつまみに類似している。これらの杯蓋は6世紀末頃~7世紀第1四半期頃と想定され、基本層序第Ⅰ層から出土したこのつまみは年代的にみても本窯跡の製品である可能性がある。

平や重複のため煙道部等は確認できなかった。

構造についてみると、焚口部西半分にあたる南側の場所には、平面形がやや丸みをもった長方形で底面が一段高くなった張り出しが認められる。北側はS D 33窯跡によって破壊されているため確認できなかつた。このような張り出しへは、福島県相馬市善光寺遺跡1・2A・7号窯跡でも認められ、前庭部とされている。前庭部は7世紀第1四半期から第2四半期にかけて長方形から崩れた方形へ変化することが指摘されている。本窯跡の張り出しが焚口部の底面より一段高くなっているのに対して、善光寺遺跡の窯跡では焚口部の底面と同じ高さではあるという相違点はあるが、7世紀前半の年代が想定されている善光寺遺跡1号窯跡で前庭部とされているものに位置や形態などが類似していると思われる。

次に遺物のうち出土量の多い蓋と壺について検討してみたい。蓋には厚手のもの（A類）と薄手のもの（B類）の2種類がある。蓋A類には口縁端部が丸くおさまるA1類と平坦面を形成しそこに軽い窪みを一周させるA2類があり、A1類よりA2類が多い。蓋B類は口縁端部の平坦面に軽い窪みを一周させる蓋のみである。蓋A類は丸底風の天井部をもち、体部が湾曲しながら口縁部に至る。天井部と体部の境には稜が形成される。天井部はヘラ切りの後、周縁部がヘラケズリ調整されている。蓋B類も天井部を欠いているが、蓋A類と体部・口縁部の形態や製作技法は同様である。すべて破片ではあるが図上復元をもとに法量を推定すると口径が12.4～17.0cm、器高が3.5～4.7cm、口径と器高が推定できる蓋では器高／口径比が0.276～0.300である。法量で見ると底部を欠くため器高等は確定できないが、口径は14～16cm程度と推定される。

これらに類似する蓋は近隣では市川橋遺跡伏石地区のS D 6517区画溝、同遺跡八幡地区S K 6777大土壙、高崎遺跡S R 1678窯跡などから出土している。

蓋A2類及びB類は市川橋遺跡伏石・八幡地区の調査報告書で記載される短頭壺蓋に相当するものと思われる（宮城県教育委員会：2009）。丸みをもつ天井部や浅い窪みが一周する平坦な口縁端部、ヘラ切り後に周縁部がヘラケズリ調整される天井部など、器形的・技法的には市川橋遺跡伏石地区的S D 6517区画溝及び八幡地区S K 6777大土壙出土の短頭壺蓋と類似している。法量でみると市川橋遺跡のS D 6517区画溝及びS K 6777大土壙出土の短頭壺蓋では、口径が11.8～13.6cm、器高が3.8～5.3cm、器高／口径比が0.306～0.500である。本窯跡出土の蓋では粘土塊が付着しているもののほぼ完形に近い蓋の法量と近似しているし、本窯跡出土の蓋は小破片からの図上復元が多く正確性に限界はあるが、器高はほぼ同じであり、口径値でも重なり合うもののが存在している。このほか、推定値でみれば市川橋遺跡の蓋よりやや口径が大きく器高／口径比が小さいもの、すなわち土器そのものがやや大きく天井部の丸みは弱いという蓋も存在する。なお、本窯跡に南側で隣接する高崎古墳群第7次調査においても本窯跡の製品と考えられる蓋が出土しており、その中には口径が14cmを超えると推定されるやや大きめの蓋も存在する。

次に本窯跡蓋A2類と高崎遺跡S R 1678窯跡出土の蓋と比較すると、厚手の土器で、天井部と体部との境に稜がみられること、口縁端部の平坦面に軽い窪みを一周させていること、天井部に手持ちヘラケズリがなされること等に共通性が認められる。高崎遺跡の蓋の法量をみると、口径が13.0～13.4cm、器高が2.5～2.6cm、器高／口径比が0.192～0.194であり、口径では本窯跡の蓋と重なるところもあるが、全体的に本窯跡の蓋よりも土器そのものが小さいこと、器高が低いこと、天井部がやや平坦であること、より粗雑なつくりであることなどに相違が認められる。

ここで、改めて本窯跡窯跡、高崎遺跡窯跡、市川橋遺跡区画溝・大土壙から出土した蓋（短頭壺蓋）の法

量をまとめて表記すると次のようになる。

遺跡・遺構名	口 径	器 高	器高／口径比
高崎古墳群 S R 32 窯跡	12.4 ~ 17.0cm	3.5 ~ 4.7cm	0.276 ~ 0.300
高崎遺跡 S R 1678 窯跡	13.0 ~ 13.4cm	2.5 ~ 2.6cm	0.192 ~ 0.194
市川橋遺跡 S D 6517 溝跡他	11.8 ~ 13.6cm	3.8 ~ 5.3cm	0.306 ~ 0.500

3遺跡の蓋を比較してみた場合、本窯跡の蓋は、丸底風の天井部をもち、器高もほぼ同じで口径径の範囲が重なりあうものが存在し、器高／口径比も近いなど、市川橋遺跡 S D 6517区画溝・S K 6777大土壙出土の蓋に高崎遺跡 S R 1678 窯跡の蓋に比してより近い同一性や類似性を認めることができる。

甕は口縁部の形態から3種類に大別される。甕A類と甕B類は口縁部を折り返して厚い突帯縁を作り出している。甕A類の口縁端部平坦面には軽い窪みが巡っているが、甕B類の口縁端部には平坦面はない。甕A類は突帯縁の幅の広いA a類と幅の狭いA b類に分けられる。甕C類では口縁端部のやや下を外側につまみ出して突帯縁を作り出している。

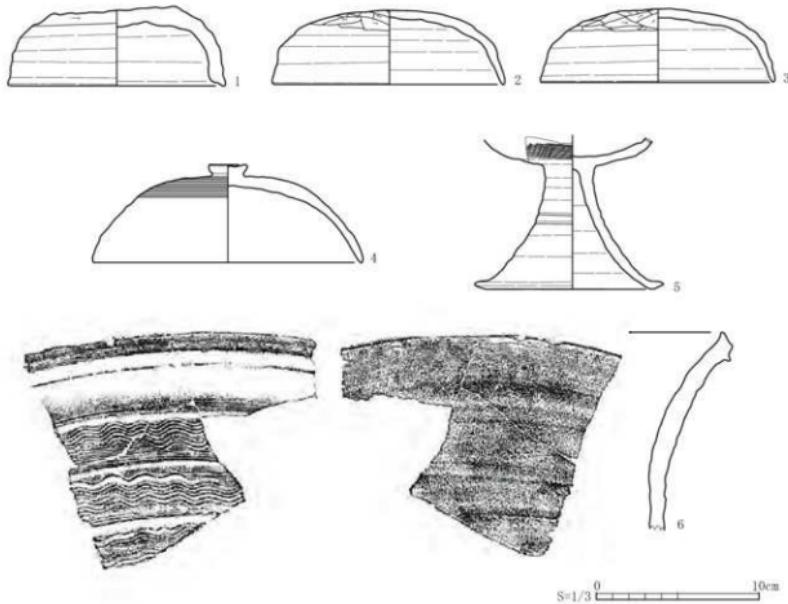
市川橋遺跡 S D 6517区画溝出土の甕をみると、本窯跡甕A a類と同様な口縁部をもつ甕C(大型)がある。頸部も2条の横位の沈線で文様帶が区画され、上から順に櫛掻き波状文、左斜め方向への手描きの刻線文、櫛掻き波状文で構成されている点でも酷似している。本窯跡甕C類と市川橋遺跡の甕B(中型)は2段の櫛掻き波状文で構成されている点でも酷似している。なお、市川橋遺跡 S D 6517区画溝から出土した突帯縁や頸部に櫛掻き波状文が施された甕B(中型)と同様な口縁部形態や文様を有する甕が、善光寺遺跡1号窯跡からも出土している。

高崎遺跡 S R 1678 窯跡の甕とは本窯跡C類のものが類似するが、突帯縁における浅い沈線の巡る位置等が相違している。また、頸部に櫛掻き波状文が施されるという共通点はあるものの、高崎遺跡では櫛掻き波状文の上の頸部上端に1条の沈線が巡るのに対して、本窯跡C類のものでは沈線が巡らない点や本窯跡の甕に比してより粗雑なつくりである点に相違が認められる。

以上のこと整理すると、本窯跡出土の蓋や甕は市川橋遺跡区画溝・大土壙出土のものに器形・製作技法・文様構成・法量等の多くの点で類似性を認めることができる。高崎遺跡 S R 1678 窯跡の蓋や甕とは器形・製作技法・文様構成に共通する点もあるが、いくつかの相違点が認められる。このことから、本窯跡と市川橋遺跡区画溝・大土壙はほぼ同年代と考えることができる。高崎遺跡 S R 1678 窯跡からは平城京分類でいう杯Gが出土しているのに対して、本窯跡からは出土していない。加えて完全に否定はしていないが市川橋遺跡区画溝・大土壙から杯Gの出土を見ないことからも、高崎遺跡 S R 1678 窯跡は本窯跡や市川橋遺跡区画溝・大土壙よりやや年代が降るものと考えられる。市川橋遺跡区画溝・大土壙出土の須恵器では、杯Gと同時期のものを大阪府陶邑窯跡群のTK 217型式期に併行する7世紀中頃～660年代末頃に位置づけられ、それ以前のものがTK 209型式に併行する6世紀末頃～7世紀第1四半期頃に位置づけられていることから、本窯跡も共通性や類似性の高い後者のTK 209型式に併行する6世紀末頃～7世紀第1四半期頃に位置づけることができる。

また、高崎古墳群 S R 32 窯跡で生産された須恵器は、蓋や甕の類似性及び地理的な位置関係などからみても市川橋遺跡に供給された可能性は極めて高いといえる。仙塩道路建設に関わって平成2～6年度に調

査された山王遺跡八幡地区のS D 100溝跡から出土した須恵器(第17図1~6)がある。1の蓋(短頭壺蓋)を本窯跡出土の蓋A2類やB類と比較すると、天井部を比較する資料がともに1点ずつという限界はあるが、本窯跡のものが丸みをもっているのに対して、SD 100溝跡のものはヘラ切りの凹凸がありいびつであるものの本窯跡のものよりやや平坦気味である。しかし、天井部と体部との境に稜がみられ、口縁端部の平坦面には沈線状の軽い窪みを一周させている点、天井部がヘラ切りで手持ちヘラケズリが施される点などが類似している。この蓋と共に杯蓋(2~4)、高杯(5)、壺(6)も出土している。4を除いていずれも焼成が良好で、内外面に自然釉が認められる。杯蓋の2・3はいわゆる杯Hとセットになるとされる杯蓋である。



番号	種類	層位	特徴		LJHR 既存率	既存率	部高	登録 番号	備考
			外 面	内 面					
1	須恵器 蓋	3層	口・体部:ロクロナデ 天井部:回転ヘラケズリ	ロクロナデ	33.4 22/24	47	4.7	R1	鉢蓋 「×」
2	須恵器 蓋	3層	口・体部:ロクロナデ 天井部:手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	44.3 /	—	4.5	R3	
3	須恵器 蓋	3層	口・体部:ロクロナデ 天井部:手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	44.5 21/24	—	4.5	R94	
4	須恵器 蓋	3層	口・体・ツマミ部:ロクロナデ 天井部:カキ目	ロクロナデ	(36.0) 14/24	7.4	5	R284	
5	須恵器 高杯	3層	断面:ロクロナデ、沈線 杯体部:叩き目	ロクロナデ	—	標記 10.5	—	R25	
6	須恵器 蓋	2層	ロクロナデ。サキメ 縫合き波状文	ロクロナデ 縫合き波状文	—	—	—	R285	

第17図 山王遺跡八幡地区 SD 100溝跡 出土須恵器

天井部が丸底で手持ちハラケズリが施され、体部が屈曲して口縁部に至る。杯蓋の4は、丸みをもった天井部にカキメが施され、低い宝珠のつまみがつくもので、カエリはない。5の高杯の脚部はラッパ状に開くもので、やや上部に2条の沈線が巡らされているがスカシはない。杯部の体下部には櫛描き列点文が施されている。6の甕は口縁部形態や頸部文様構成などが本窯跡C類に類似しているが、櫛描き波状文が外面突帯縁や内面口縁部に施文される点に相違がみられる。

杯Hにセットとされる杯蓋や宝珠のつまみをもった杯蓋に類似する蓋は山王遺跡S I 491堅穴住居跡及び山王遺跡八幡地区S D 2050河川跡第2A層から出土しており、山王遺跡S I 491堅穴住居跡及び山王遺跡八幡地区S D 2050河川跡第2A層は7世紀前半の年代が想定されている。また、杯Hにセットとされる杯蓋は市川橋遺跡区画溝・大土壙からも出土しており、この年代が6世紀末頃～7世紀第1四半期頃と想定されている。のことから、山王遺跡八幡地区S D 100溝跡から出土した須恵器と本窯跡及び市川橋遺跡S D 6517区画溝・大土壙出土の須恵器はほぼ同じ年代のものと考えることができる。

しかしながら、山王遺跡八幡地区S D 100溝跡の須恵器は、本窯跡の須恵器に比べて焼成等を含む製品としてのできばえが優れているし、若干の相違点もみられる。これが若干の時間的な差を示すものなのか、工人の違いに起因するものなのかについては今後の課題である。また、市川橋遺跡S D 6517区画溝と山王遺跡八幡地区S D 100溝跡の須恵器にも、高崎古墳群S R 32窯跡以外の須恵器が見られることから、近隣の遺跡といえども複数の窯跡から須恵器の供給を受けていた実態がうかがわれる。

2 溝跡・土壙

S D 33溝跡からは土師器杯、須恵器杯・蓋・甕・長頸瓶、丸瓦・平瓦などが出土している。第1層出土の土師器杯3点はいずれもB V類である。これらは灰白色土のすぐ上の第1層から出土しており、10世紀前半以降のものである。他はすべて第3層以下からの出土である。須恵器杯にはIII類とV類がある。器形や第3層以下の須恵器杯破片の底部切り離しの割合などから、両者は多賀城跡D群もしくはE群土器の範疇で把握できる。加えて第3層以下から須恵器土器が全く出土していないことからD群土器の年代には特定期が可能である。したがって第3層以下の年代はおむね9世紀後半と考えられることから、S D 33溝跡の年代はほぼ9世紀後半と考えることができる。このほかに少量ではあるが6世紀末頃～7世紀第1四半期頃と考えられるS R 32窯跡のものと同一の特徴を持った須恵器蓋や瓦が出土している。丸瓦は多賀城跡II B-aタイプであり多賀城跡I期からIV期まで使用されている。平瓦にはIA類-aタイプとII B類-a2タイプがある。IA類-aタイプは多賀城跡I期、II B類-a2タイプは胎土に砂粒を比較的多く含むことから多賀城跡II期ないしIII期に相当するものである。これらのことから須恵器蓋と瓦は混入品と考えられる。

S D 34溝跡は砥石1個と土師器・須恵器の細片が出土しているが、年代を決定することは困難である。また、S K 35土壙からは遺物も全く出土していないため、年代については不明である。

(引用・参考文献)

- 吾妻俊典『多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代』宮城考古学第6号 宮城県考古学会 2004
大阪府文化財センター『須恵器生産の成立と展開』2005年度(財)大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会 2006
菊池佳子 1994『多賀城以前の陳奥国と須恵器』歴史第82輯 東北史学会
佐藤隆『難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年—陶邑窯跡編年との再構築に向けて—』大阪歴史博物館研究紀要第

2号 2003

- 佐藤隆「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の併行関係—陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その2—」 大阪歴史博物館研究紀要第3号 2004
- 佐藤隆「7・8世紀の陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相」 (財)大阪府文化財センター他2005年度共同研究成果報告書 2007
- 佐藤隆「6世紀における須恵器大型化の諸様相—陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その3—」 大阪歴史博物館研究紀要第6号 2007
- 佐藤敏幸・大久保弥生『宮城県の湖西産須恵器』 宮城考古学第9号 宮城県考古学会 2007
- 佐藤敏幸『東北地方における7~8世紀の東海産須恵器の流通』 北杜一辻秀人先生還暦記念論集一 2010
- 白石耕治『須恵器の検討 谷山池地区の編年』「陶邑古窯跡群—谷山池地区の調査」 和泉丘陵内遺跡発掘調査会編 1992
- 白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』 研究紀要VI 宮城県多賀城跡調査研究所 1980
- 仙台市教育委員会『土手内一土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴B地点I発掘調査報告書一』 仙台市文化財調査報告書 第165集 1992
- 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡—平成元年度発掘調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第21集 1990
- 多賀城市教育委員会『山王遺跡I—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第45集 1997
- 多賀城市教育委員会『高崎遺跡—第56次調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第89集 2007
- 田辺正三『陶邑古窯跡群I』 平安学園考古学クラブ 1966
- 田辺正三『須恵器大成』 角川書店 1981
- 辻 秀人 1984『宮城の横穴と須恵器』 宮城の研究 清文堂
- 辻 秀人 1989『須恵器生産窯の同定について』 考古学論叢II 幕修堂
- 東北古代土器研究会『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編一(陸奥)』 研究報告3 2008
- 中村浩『泉北丘陵に広がる須恵器窯—陶邑遺跡群一』 新泉社 2006
- 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書X I 第1次大極殿地域の調査』 奈良国立文化財研究所30周年記念学報 第40冊 1982
- 西弘海『土器様式の成立とその背景』 小林行雄博士古希記念論文集考古学論考 平凡社 1982
- 福島県教育委員会(財)福島県文化センター『国道113号バイパス遺跡調査報告IV—善光寺遺跡一』 福島県文化財調査報告書第192集 1988
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政庁跡 図録編』 1980
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政庁跡 本文編』 1982
- 宮城県教育委員会『山王遺跡八幡地区的調査—県道泉塩釜線開通調査報告書I一』 宮城県文化財調査報告書第162集 1994
- 宮城県教育委員会『山王遺跡V—八幡・伏石地区一』 宮城県文化財調査報告書第174集 1997
- 宮城県教育委員会『山王遺跡八幡地区的調査2—県道泉塩釜線開通調査報告書IV一』 宮城県文化財調査報告書第186集 2001
- 宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査—県道泉塩釜線開通調査報告書Ⅴ一』 宮城県文化財調査報告書第218集 2009
- 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡(第66次調査)』 宮城県多賀城跡調査研究所年報1995 1996
- 村田晃一『7世紀集落研究の視点(1)』 宮城考古学第4号 宮城県考古学会 2002
- 村田町教育委員会『北日ノ崎窯跡』 村田町文化財調査報告書第6集 1988
- 柳澤和明『多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～梁圓式期の集落跡の様相』 宮城考古学第12号 宮城県考古学会 2010
- 山田隆博『宮城県出土の古墳時代須恵器』 多知波奈の考古学 2008
- 涌谷町教育委員会『長根窯跡群II』 1974
- 渡辺泰伸『東北古墳時代須恵器の様相と編年—須恵器編年試論—』 考古学雑誌第65巻第4号 1980

遺構・基本層序					SR32			S33		SD34		SD35		基本層序	
種類	器種	部種	製作 技法	調整	II・ III層	2次 床面	IV層	1次 床面	I層	3層 以下	堆積土	堆積土	I層	II層	
土師器	口縁部	体部			0	0	0	0	10	58	0	0	4	2	
					0	0	0	0	12	145	1	0	0	7	
	杯	系切り	B I c		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			B V類		0	0	0	0	2	9	0	0	2	1	
		ハラ切り	B I a		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			B III類		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
	高台付杯	底部	有り		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			無し		0	0	0	0	3	17	0	0	5	1	
	甕	口縁部			0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	
			頸部		0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	
		胴部			0	0	0	0	19	414	4	0	27	11	
			底部		0	0	0	0	0	11	0	0	2	1	
須恵器	口縁部	体部			0	0	0	0	1	35	0	0	6	2	
					0	0	0	0	2	76	0	0	5	2	
	杯	系切り	I c 類		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
			V類		0	0	0	0	2	13	0	0	4	2	
		ハラ切り	I a 類		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			III類		0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	
	高台付杯	底部	有り		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
			無し		0	0	0	0	1	4	0	0	0	1	
	甕	口縁部			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			頸部		5	10	3	0	0	12	0	0	3	1	
		胴部			0	7	0	0	0	14	0	0	2	0	
			底部		33	55	18	12	8	212	26	0	43	4	
	蓋	口縁部			0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	
			頸部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		天井部			2	7	0	0	1	24	5	0	6	4	
			底部		0	0	0	0	0	5	2	0	3	0	
須恵系	短頸甕	口縁部			9	3	0	2	1	7	0	0	0	0	
			体部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	瓦	天井部			0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	
			短頸甕		0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
		平瓦			0	0	0	0	1	7	0	0	1	1	
木製品	丸瓦				0	0	0	0	1	5	0	0	1	0	
	曲げ物他				0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	
	砥石				0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	
合計					49	83	21	15	67	1095	40	0	117	46	

表1 出土遺物統計

写真図版1



1 SR32 窯跡(右)・SD33 溝跡(左)検出状況(西より)



2 SR32 窯跡全景①(西より)



3 SR32 窯跡全景②(西より)

写真図版2



1 SR32窯跡焼成部(西より)



2 SR32窯跡焼成部 堆積土(南より)



3 SR32窯跡燃焼部・焚口部 張出し部(北より)

写真図版3



1 SR32窯跡燃焼部・焚口部 張出し部(西より)



2 SR32窯跡 粘土付着の蓋・壺胴部

VIII 西沢遺跡第18次調査

1 調査に至る経緯・経過と調査成果

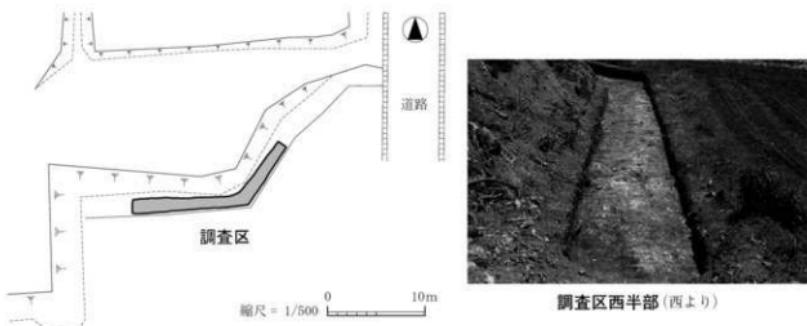
本調査は、市川字伊保石地内における個人住宅の専用通路に伴う擁壁設置工事を調査原因とする。平成22年1月15日に地権者より西沢遺跡における本工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、工事の際に最大幅約2.3m、延長約35mにわたり、最深0.58mの掘削を行うというものである。当該地では、平成21年度に専用通路部分で発掘調査を実施しており、厚さ40cm前後の表土下の地山面(岩盤層)において、掘立柱建物跡や溝跡等を発見している。そのため、遺跡への影響が懸念されたことから、本発掘調査を実施するに至ったものである。平成22年2月18日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、5月15日から現地調査を実施した。

調査は、北側隣接地で行った第19次調査と並行して実施したため、途中で中断期間を設けている。はじめに、重機により表土除去を行い、6月3日から遺構検出作業を開始した。その結果、遺構は発見されなかつた。引き続き、写真撮影、平面図作成を行い、6月8日に終了した。その後、6月19日にシート等の撤去を行い、調査を完了した。

調査の結果、厚さ約30cmの表土の下で直接岩盤層が露出し、遺構は発見されなかつた。また、遺物は表土中から須恵器と近代以降の陶磁器の破片が出土している。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

XIX 西沢遺跡第19次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、市川字奏社地内における個人住宅建設に伴うものである。平成22年2月14日に地権者より西沢遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象地全域に盛土を行うため、建物基礎工事に伴う掘削は、遺構面に影響を及ぼさないことが確認できた。しかし、専用住宅等の建物建設予定地の北端に、東西に長い擁壁を設置するほか、対象地南端部で既存道路からの通路を設けるため、この2箇所で遺構面まで達する掘削を行うということであった。このことから、記録保存のための本発掘調査が必要であることを地権者に回答し、合わせて対象面積が約550m²と広いことから、対象地全域の遺構の分布状況や構成を把握するための確認調査を実施したい旨を依頼した。これに対して、地権者から協力が得られたことから、平成22年3月30日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、5月15日から現地調査を開始した。

調査においては、擁壁部分に25m×12mの東西方向の調査区、通路部分に4m×125mの

東西方向の調査区を設定し、それぞれ1トレンチと2トレンチとした。つぎに、確認調査として、1トレンチの南側に25m×4mの南北方向の3トレンチを設定した。また、1トレンチの西端部に直交するかたちで、南側に延びる25m×115mの南北方向の4トレンチを設定した。さらに、調査開始後1トレンチから4トレンチにかけて、堅穴住居跡の東辺ラインを検出したことから、その東西の規模を確認するために、4トレンチの中央付近に、西側に延びる2.5m×6.5mの東西方向の5トレンチを設定した。

はじめに、重機により表土の除去を行い、1トレンチから順に遺構検出作業を行った。その結果、1トレンチの東側で南北方向の溝跡（S D 538溝跡）を検出し、これが3トレンチを経て2トレンチまで延びることを確認した。つづいて、1トレンチの西端部で堅穴住居跡（S I 537住居跡）の北東隅を検出し、4トレンチにかけて全体プランの把握を行った。5月22日から25日にかけて、平面図作成のための基準点設置を行った。本調査においては、トレンチごとに任意に基準点を設定し、調査終了後、測量成果を各点に落とすという方法をとった。調査は、5トレンチを新たに設定した後、表土の掘り下げを行い、S I 537住居跡の南辺ラインを検出した。6月4日からは、各遺構の掘り下げ作業を開始した。なお、S I 537住居跡については、



第1図 調査区位置図

EW00

E 03

E 06

E 09

E 12

E 15

E 18

E 21

E 24

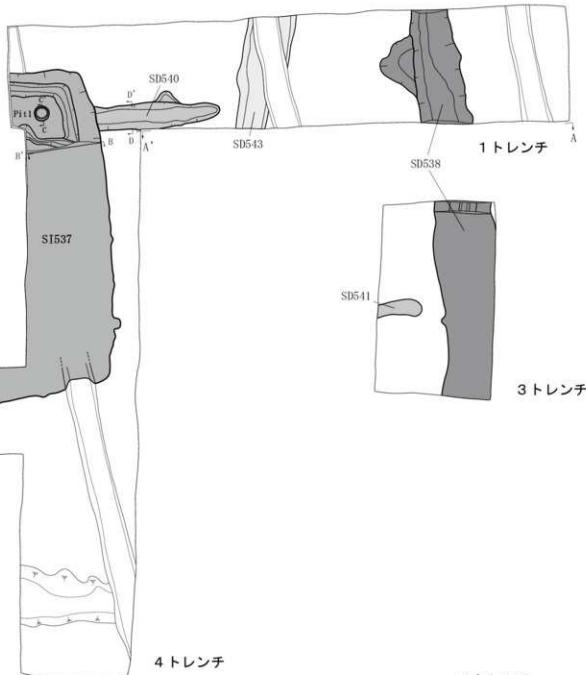
— N 03



□

NS00 • EW00 : X=-187,926,000
Y= 14,316,000

— NS00

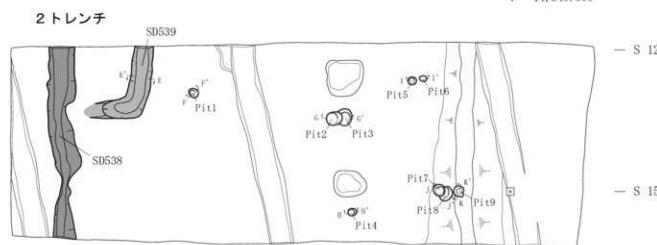


— S 03

— S 06

— S 09

S 15 • E 24 : X=-187,941,000
Y= 14,340,000



— S 12

— S 15

第2図 調査区各トレンチ平面図

本発掘調査部分にあたる1トレンチの範囲に限定して掘り下げを行った。これと並行して、確認調査部分にあたる3トレンチで、遺構検出状況を写真撮影した後、平面図作成を行った。その後、遺構ごとに埋土の掘り下げ、写真撮影、実測図作成等の一連の作業を順次行った。そして、2トレンチにおける各柱穴の完掘作業、平面図補足をもって、6月19日に調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。なお、調査対象地の南半部では、表土の下が直接地山になっている。

I 層：現在の表土で、北側の1トレンチで厚さ20～30cm、南側の2トレンチで厚さ40～60cmである。

II 層：灰黄褐色土で、厚さは10～20cmである。調査対象地の北半部に分布する。地山土である黄褐色土を斑状及びブロック状に含み、しまりはやや弱い。上面はSD 543溝跡の遺構検出面である。

III 層：にぶい黄褐色土で、厚さは約5cmと薄い。1トレンチの西側に限定的に分布する。黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。

(2) 発見遺構と遺物

S I 537住居跡(第2・4図)

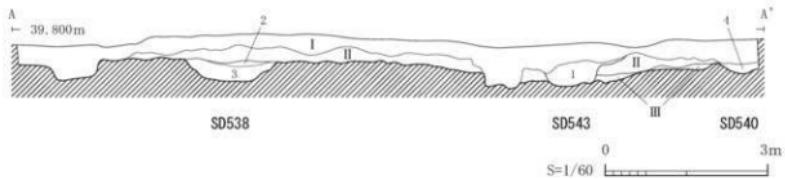
1・4・5トレンチの地山上で検出した堅穴住居跡である。重複関係から、SD 542溝跡より古く、SD 540溝跡より新しい。平面形は、長方形であり、規模は東西が南辺でみると380m、南北が東辺でみると6.58mである。方向は、北で約6度西に偏している。埋土の掘り下げを行った北東隅付近でみると、残存する壁の高さは、床面から約45cmである。壁沿いに周溝が巡り、その幅は25～30cm、深さは約10cmである。また、北東隅から約1.2m南側の床面上で、周溝から派生するように内側へ延びる溝跡を検出した。さらに、住居の主柱穴とみられる柱穴を検出した。掘り方の平面形は円形で、規模は径32cm、深さは48cmである。柱が抜き取られた痕跡が確認できる。住居内埋土は、3層に分けられる。1層は、にぶい黄褐色土を斑状に若干含む灰黄褐色土。2・3層は、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含むにぶい黄褐色土で、3層の方が土色はやや黄色が強い。これらは、堆積の状況から自然堆積と考えられる。遺物は、埋土中から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器碗、平瓦の破片が出土している。なお、須恵器杯には底部の破片が2点あるが、いずれも回転糸切り後、再調整を施したものである。

SD 538溝跡(第2・3図)

1～3トレンチの地山上で検出した南北方向の溝跡である。確認できた長さは18.96mである。方向は、北側の1トレンチでみると、北で約5度西に偏している。規模は、残存状況が良好な1トレンチで、上幅78～88cm、下幅18～52cmを測る。深さは、調査区南壁でみると約25cmである。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれもにぶい黄褐色土で、上層は黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。遺物は、土師器甕、須恵系土器皿の小破片が出土している。

SD 539溝跡(第2・4図)

2トレンチ西側の地山上で検出した溝跡である。鉤状を呈し、確認できた長さは2.55mである。方向は、南北方向でみると、北で約7度東に偏している。規模は、上幅40～45cm、下幅22～26cmを測る。深さは、



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
基本層位	SD538 埋土				
I	黒褐色土	表土。	2	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。
II	灰黄褐色土	しまりはやや弱い。 黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。	3	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状に若干含む。
SD543埋土	SD540埋土				
I	褐灰色土	しまりはやや弱い。	4	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状に若干含む。 また、風化物を若干含む。

第3図 1トレンチ南壁断面図

検出面から約10cmである。底面は丸みをもち、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は、地山の小レキを若干含む暗灰黄色土の単層である。遺物は、須恵器壺の小破片が出土している。形態から、竪穴住居跡の周溝の可能性も考えられる。

S D 540溝跡(第2・4図)

1トレンチ西半部の地山上で検出した東西方向の溝跡である。S I 537住居跡と重複し、これより古い。確認できた長さは2.67mである。方向は、東で約4度北に偏している。規模は、上幅48～56cm、下幅24～28cmを測る。深さは、検出面から約12cmである。底面はやや凹凸があり、壁は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。埋土は、黄褐色土を斑状に若干含むにぶい黄褐色土の単層である。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・須恵系土器杯の小破片が出土している。

S D 541溝跡(第2図)

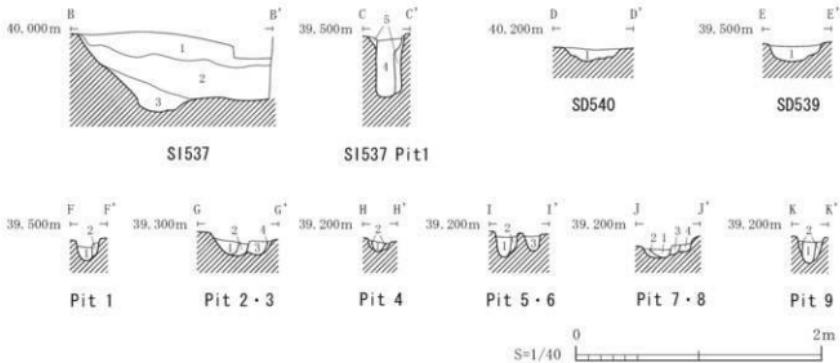
2トレンチ西側の地山上で検出した東西方向の溝跡である。確認できた長さは0.98mである。方向は、東で約7度北に偏している。掘り下げを行っていないため、このほかの詳細については、不明である。

S D 542溝跡(第2図)

5トレンチ中央部の地山上で検出した南北方向の溝跡である。S I 537住居跡と重複し、これより新しい。確認できた長さは1.85mである。中央でやや屈曲する平面形のため、方向は北側が北で約3度西に、南側が北で約9度東に偏し、場所によって傾きが異なる。規模は、上幅70～76cm、下幅18～24cmを測る。深さは、検出面から約15cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黄褐色土を斑状に含むにぶい黄褐色土の単層である。遺物は、土師器壺、須恵器壺の小破片が出土している。

S D 543溝跡(第2・3図)

1トレンチ中央部のII層上面で検出した南北方向の溝跡である。確認できた長さは234mである。方向は、北で約10度東に偏している。規模は、上幅62～64cm、下幅40～42cmを測る。深さは、調査区南壁でみると



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考		
SI537埋土		Pit4埋土					
1	灰黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に若干含む。	1	灰黄褐色土	柱抜取穴。0.2～1cmのレキを含む。		
2	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。	2	にぶい 黄褐色土	柱穴掘り方。0.5～1cmのレキを含む。		
3	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。 色調は上層より黄色が強い。	Pit5・6埋土				
4	黒褐色土	主柱穴抜取穴。0.5～3cmのレキを若干含む。	1	黒褐色土	P5柱抜取穴。0.5～2cmのレキを含む。		
5	黒褐色土	主柱穴掘り方。0.3～2cmのレキを含む。	2	灰黄褐色土	P5柱穴掘り方。0.2～0.5cmのレキを含む。		
SD540埋土		Pit7・8埋土					
1	にぶい 黄褐色土	黄褐色土を斑状に若干含む。 また、炭化物を若干含む。	1	灰黄褐色土	P7柱抜取穴。0.2～1cmのレキを含む。		
SD539埋土		Pit7・8埋土					
1	暗灰黃色土	細かなレキを若干含む。	2	灰黄褐色土	P7柱穴掘り方。0.5～2cmのレキを含む。		
Pit1埋土		Pit9埋土					
1	灰黄褐色土	柱痕跡。	3	灰黄褐色土	P8柱抜取穴。0.2～0.5cmのレキを含む。		
2	暗灰黃色土	柱穴掘り方。0.2～0.5cmのレキを若干含む。	4	灰黄褐色土	P8柱穴掘り方。0.5～2cmのレキを多く含む。		
Pit2・3埋土		Pit9埋土					
1	灰黄褐色土	P2柱抜取穴。しまりは弱い。	1	灰黄褐色土	柱痕跡。0.2～0.5cmのレキを若干含む。		
2	灰黄褐色土	P2柱穴掘り方。0.5～2cmのレキを若干含む。	2	灰黄褐色土	柱穴掘り方。0.2～1cmのレキを含む。		
3	灰黄褐色土	P3柱抜取穴。0.5cm程のレキを若干含む。					
4	灰黄褐色土	P3柱穴掘り方。0.5cm程のレキを多く含む。					

第4図 各遺構断面図

と約35cmである。底面はやや平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は、しまりがやや弱い褐色土の单層である。遺物は、出土していない。

その他の遺構（柱穴）（第2・4図）

2トレンチの東半部を中心に、9基の小規模な柱穴を検出している。これらは、直線的に並ぶものもみられるが、建物などとして組み合うまでには至らなかった。平面形はほぼ円錐を呈し、規模は径15～35cm、深さは検出面から10～22cmである。6基で、柱が抜き取られた痕跡が確認できる。遺物は、出土していない。

3 まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡1軒、溝跡6条、柱穴9基を発見した。これらは、対象地のほぼ全域に分布し、方向も類似したものが多い。しかしながら、いずれの遺構も出土遺物の量が僅少で、さらに、すべて破片のため、全体の形を復元できるものはない。したがって、詳細な遺構の年代を把握することはできなかった。わずかに、S I 537住居跡、S D 538溝跡、S D 540溝跡から、須恵系土器が出土していることから、これらの遺構については、須恵系土器が出現する10世紀以降のもので、下限は古代の範疇で捉えられると考えられる。このほかの遺構については、大きく古代以降のものというだけにとどまる。



1・3～5トレンチ
(東より)



1・4トレンチ
S I 537検出状況(北より)



4・5トレンチ
S I 537検出状況(南より)

写真図版1



写真図版2



1トレンチ
掘り下げ状況(東より)



1トレンチ SD 538溝跡
掘り下げ状況(南より)



3トレンチ SD 538溝跡
確認状況(南より)

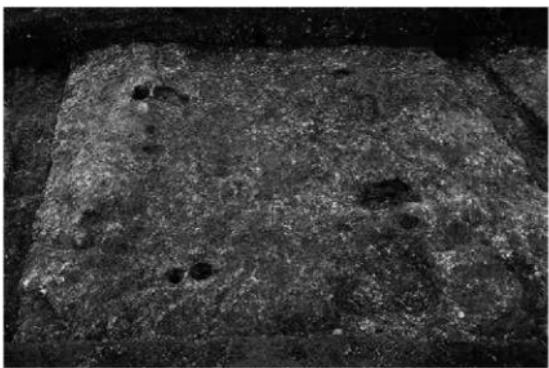
写真図版3



2トレンチ
掘り下げ状況(西より)



2トレンチ SD 538・539溝跡
掘り下げ状況(南より)



2トレンチ 東半部
柱穴掘り下げ状況(北より)

写真図版4

XX 西沢遺跡第20次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成22年11月19日に地権者より当該地における個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。その計画では、住宅の基礎工事の際に直径60cm、長さ4.25mの杭を38本施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。その後、平成22年12月2日に地権者より発掘調査に関わる依頼・承諾書の提出を受け、第20次調査として調査を実施したものである。

調査は12月7日から重機を使用して、盛土の除去を開始し、翌日まで本作業を行った。掘削土は調査区内の安全と調査面積確保のため、場外へ搬出した。掘削終了後、遺構検出作業に取りかかり、現地表面の約3m下で、北南方向に延びる溝状の落ち込みを発見した。重複関係を検討後、埋土を掘り上げる。今回の調査で発見できた遺構は溝跡のみであった。調査は、平面図作成のための地区設定の後、平面図および北・西壁の土層断面図を作成する。17日調査区内の全景写真を撮影、18日発掘機材の撤収作業、21日には土層堆積状況の注記を行い、現地調査を終了した。

なお、埋戻しについては、申請者の意向を受けて翌年1月14日に埋め戻し作業を行った。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

調査区内は、東から西側と北から南側に傾斜する地形に沿って、厚さ最大約2.3mの現代の廃棄物を含んだ盛土(Ⅰ層)が厚く堆積していた。この盛土(Ⅰ層)下で以下の層序を確認した。

第Ⅱ層 調査区南半部、北から南側に堆積するオリーブ黒色土で、厚さは10～30cmである。

第Ⅲ層 調査区南半部に堆積するオリーブ黒色土で、厚さは11～20cmである。第Ⅰ層に覆われている。

第Ⅳ層 調査区北側で、西から東側に傾斜する地形に沿って堆積する暗オリーブ褐色土で、厚さは10～40cm。SD 544溝跡を覆っている。

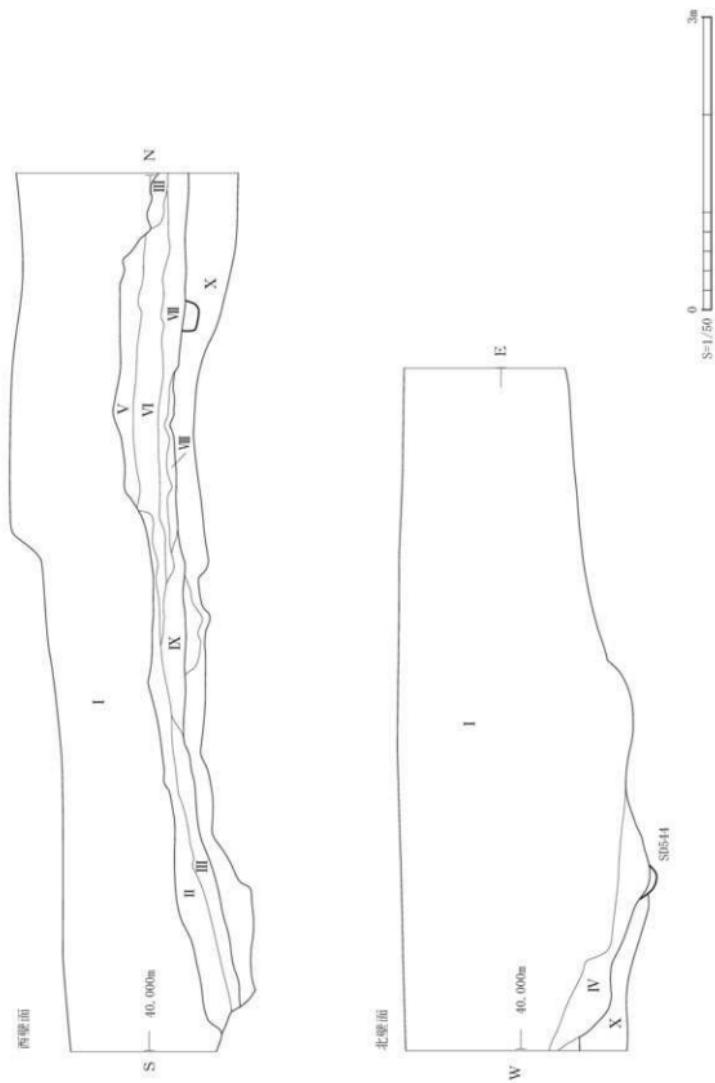
第Ⅴ層 調査区北西部に堆積する。黒褐色土である。厚さは10～20cmである。

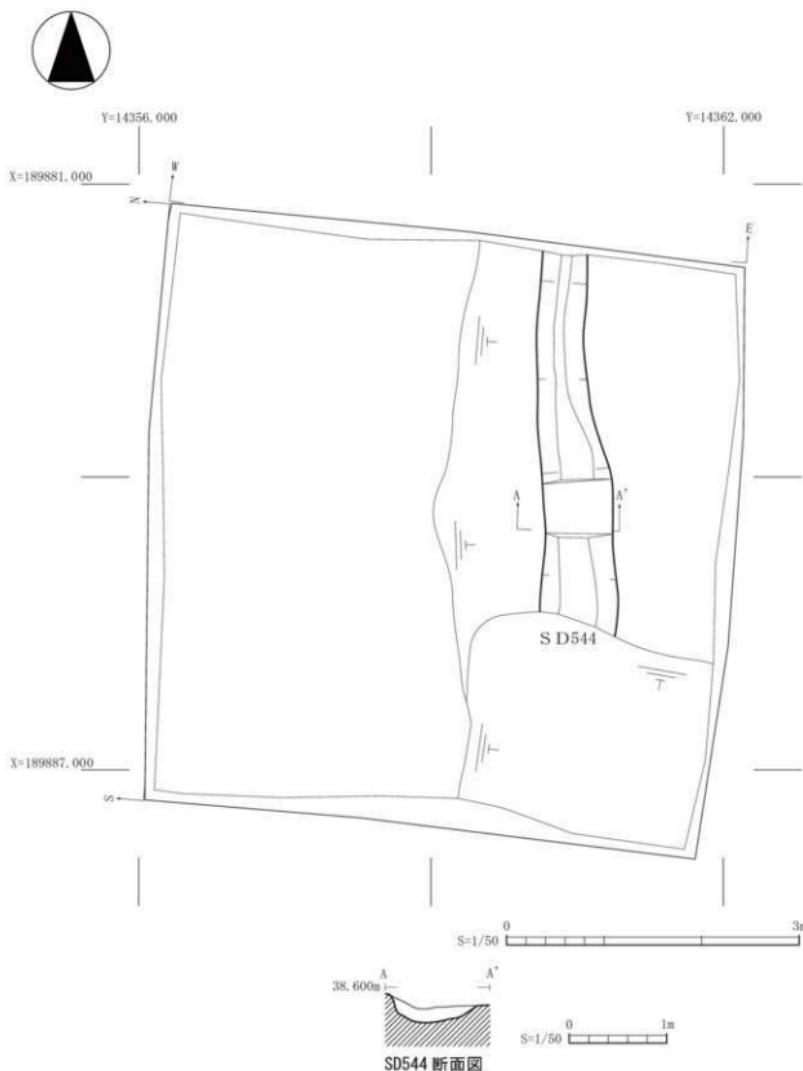
第VI層 調査区北西部に堆積する。暗オリーブ色土である。厚さは20～25cmである。



第1図 調査区位置図

第2図 層序(調査区西・北壁断面図)





第3図 遺構平面・断面図

- 第V層 調査区北西部に堆積する。暗オリーブ色土である。厚さは6~20cmである。
- 第VI層 調査区中央部で確認した。第VI層に覆われる黒褐色土である。厚さは5~10cmである。
- 第IX層 調査区中央部で確認した。にぶい黄褐色土である。厚さは10~26cmである。
- 第X層 黄褐色土。S D 544 溝跡は本層を掘り込んでいる。

(2) 発見した遺構

S D 544 溝跡 (第3図)

調査区東半部で第IV層を除去した後で発見した。発掘基準線に沿って南北方向に延びる溝跡である。確認できた長さは約3.7mで、北は調査区外に及び、南は後世の削平のため破壊されていた。底面は丸みを呈し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は上幅0.52m~0.8m、深さ0.25mである。埋土は地山ブロックを多く含んだ黒色粘土の単層で、人為的に埋め戻されている。遺物は土師器杯、須恵器甕の細片が出土している。

3まとめ

- (1) 今回の調査では南北方向に延びる溝跡1条を発見した。
- (2) 遺構の年代は、出土遺物から古代(平安時代)の範疇に収まるものと考えられる。
- (3) 当街区は、多賀城跡の東側に隣接する位置に相当するが、後世の土取りなどで、人為的に改変されていることが明らかになった。



調査区全景(南西より)

XXI 小沢原遺跡第17次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものである。平成22年7月29日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では、既存の住宅を撤去した後、新しく住宅を建てるもので、その基礎には直径600mm、長さ3.5mの杭を35本打ち込み、給排水管工事では、最深55cmの掘削を行うというものであった。当該地は南側の東北本線に向かって急激に標高が低くなっていることから、大きく地形が改変されていることが予想された。しかし、実際の遺構面までの深さは不明であったため、確認調査を行うこととなり、平成22年10月8日から着手した。

調査は、重機によって表土（I 1層）の除去

から取りかかった。調査区は3箇所設定した。1区と2区では表土の下は盛土（I 2層）が堆積し、遺構は発見できなかった。3区では基盤層（II層）を発見し、その上面で柱穴を発見した。この状況から、住宅の基礎が及ぶ範囲は、地形が大きく改変されていると考えられたことから、本発掘調査は行わず、実測図作成と写真撮影を行った後、埋め戻して現地調査の全てを完了した。

2 調査成果

（1）層序

I 1層：表土。厚さは55～60cm。

I 2層：現代の盛土層。厚さは確認できた1区で1.5m以上。

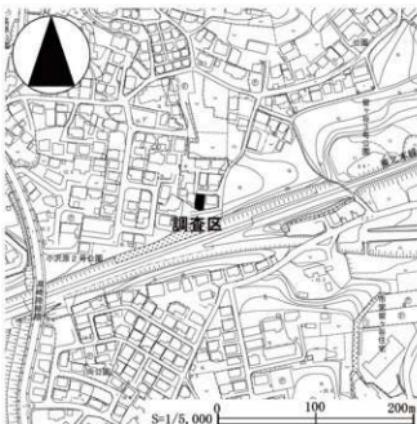
II 層：岩盤。3区でのみ確認した。遺構検出面。

（2）発見した遺構と遺物

1区と2区は大きく地形の改変が行われており、遺構や遺物を発見することはできなかった。3区ではII層上面で柱穴を発見した。規模は南北32cm、東西29cmである。遺物は出土していない。

3まとめ

当該地は、南側が大きく削り取られていることが確認された。3区で発見した柱穴の年代については、遺物などの手がかりが無いため不明である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



1区 (南から)



2区 (西南から)



3区 (北西から)

写真図版

XII 東田中窪前跡第6次調査

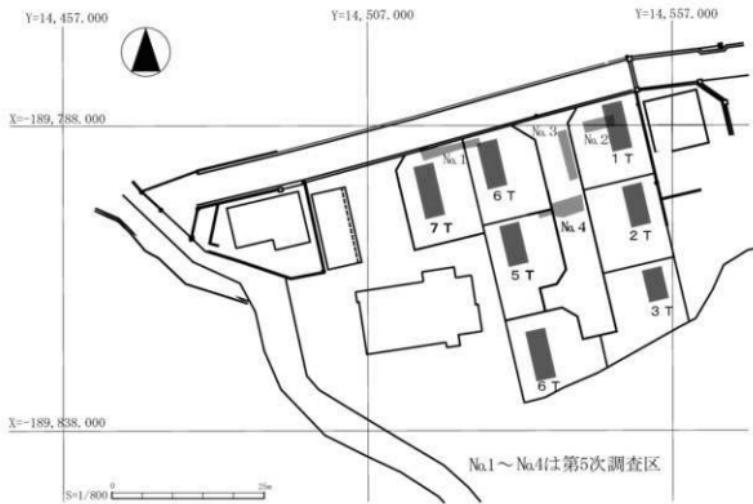
調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、建売分譲住宅建設に伴う発掘調査である。平成22年11月25日に地権者より当該地区における建売分譲住宅建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎工事の際に45cmの掘削を行うものであり、埋蔵文化財への影響も懸念された。このため、事前に遺構検出面の深さや遺構の分布状況を知る目的で確認調査を実施することとなった。12月15日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

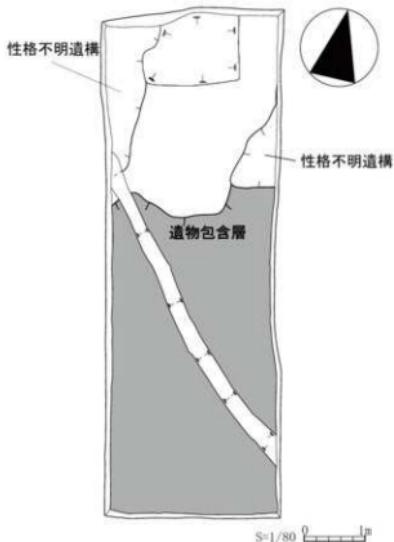
調査は12月16～17日に実施した。宅地部分の7ヶ所に調査区を設定した。重機により表土の除去を行ったところ、いずれの調査区も現地表面から30～70cmの深さで遺構検出面(地山)に到達した。1T～6Tでは後世の大規模な削平を受けており、遺構・遺物は発見されなかつた。7Tは残存状況が良く、古代の土器片を含む遺物包含層と性格不明遺構2基を検出した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



7T 検出遺構平面図



調査地遠景 (南より)



1T (北より)



2T (北より)



4T (北より)



5T (南より)



7T (北より)

XXIII 志引遺跡第3次調査

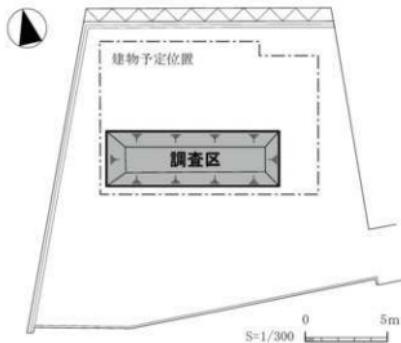
1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、東田中二丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成22年5月13日に申請者より志引遺跡の北東部における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。志引遺跡においては、古代の遺物が散布するほか、範囲の西側には土壇状の高まりに三重塔を線刻した板碑が建てられている。計画では、住宅基礎工事(表層改良)の際に最深1.9mの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更等が行えないか協議したが、対象地の現況や地盤の強度等から考慮して、現計画での実施が最も望ましいとの理由により、遺構の有無と旧地形の状況を把握することを目的に、調査を実施することに決定した。平成22年6月11日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6月18日に現地調査を実施した。

調査は、重機によって、1.5m×8mの範囲を掘り下げ、現地表から約2m下のにぶい黄褐色土層の上面で遺構検出作業を行った。その結果、遺構・遺物は発見されなかった。なお、土層の堆積状況の観察から、当該地の旧地形は北側に傾斜する斜面であったことが確認された。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



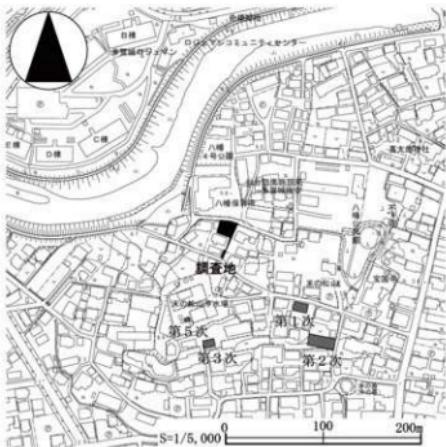
掘り下げ状況(東より)

XXV 八幡館跡第6次調査

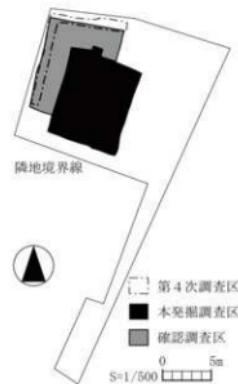
1 調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものである。平成22年10月5日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画は、基礎工事で直径500mm、最長25mの杭を37本打ち込むこと、給排水工事は最深70cmの掘削をすること、外構工事は最深1.1mの掘削の後、最大1.5mの盛土を施すものであった。平成21年度に同地で実施した第4次調査（第2図）では、現地表から10～60cmの深さで遺構を発見しており、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更の協議を行ったが、申請された方法以外では建物を支える強度が得られないとのことから、発掘調査を実施することとなった。平成22年11月25日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、12月1日から調査に着手した。

はじめに重機を使用して、表土（I層）を除去したところ、II層上面でSD40溝跡をはじめとする多数の遺構を確認した。これを踏まえて、工事によって遺構を破壊される部分は本発掘調査に切り替え、保存できる部分は確認調査にとどめた（第2図）。4日から遺構検出作業を開始し、8日にはII層上面検出遺構のほぼ全容を把握できた。9日に遺構検出状況の写真撮影を行った後、図面作成のための基準杭を調査区内に設置した。これ以降隨時、図面作成や写真撮影など必要な記録を作成した。11日からSD40溝跡の埋土の除去を開始し、16日にはSD40溝跡（D期）の一部が深くなっていることを確認した。また、一部II層を除去したところ下層（III層）にも竪穴住居跡や溝跡等の遺構を検出した。25日には年末年始に向けた遺構の保護を行った後、1月4日から再開した。5日から残っていたII層除去を開始し、7日にはSI16竪穴住居跡を検出した。13日には、それまで4時期の変遷と考えていたSD40溝跡について、断面観察を中心とした検討の結果、5時期の変遷であることを確認した。14日から調査区東側III層上面の精査を開始し、21日にSI17竪穴住居跡などを発見・調査した。2月8日に埋め戻し、10日にはプレハブと仮設トイレの撤去を行い、現地調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区位置模式図

2 調査成果

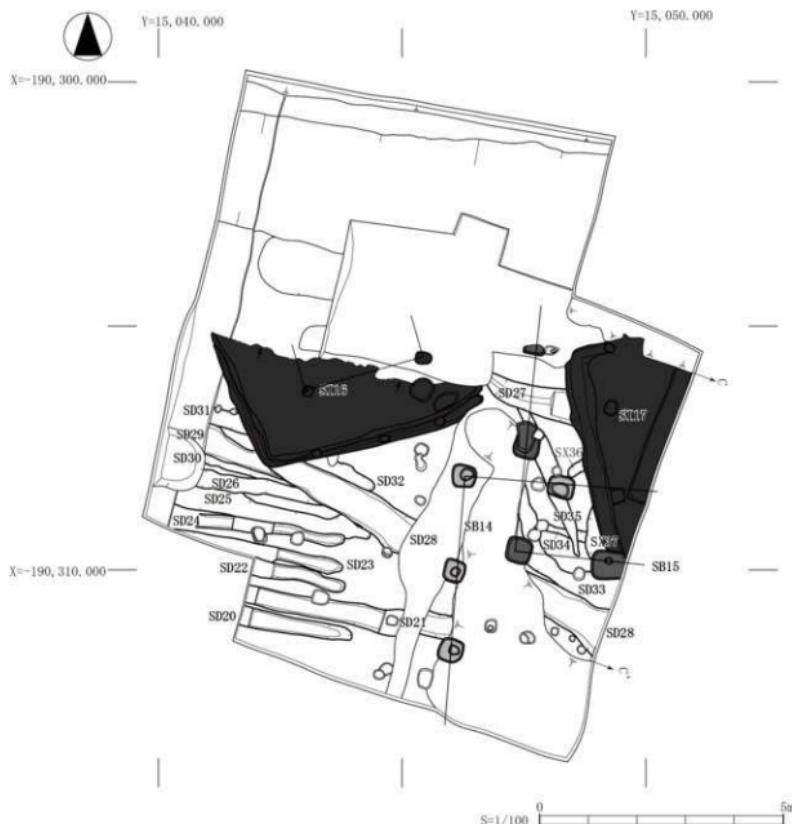
(1) 層序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである（第8・11図）。

I層 現代の盛土層で、厚さは9cm～1.0m。II層上面の遺構検出面が北側ほど低くなっているため、南側が薄く、北側が厚く堆積している。

II層 調査区の南端部を除いたほぼ全域を覆う暗褐色土で、厚さは5～33cm。北側が薄く、南側ほど厚く堆積している。SD40溝跡をはじめとする中世の遺構検出面となっている。遺物は、かわらけ（第17図）の他、石製模造品、土師器壺（B類）、須恵器杯・壺、須恵系土器、丸瓦（II類）が出土している。

III層 橙色の粘質土～岩盤で基盤層である。古代の遺構検出面である。



第3図 III層上面検出遺構

(2) 発見遺構と遺物

Ⅲ層上面検出遺構

S B 14 挖立柱建物跡（第3・4・7図）

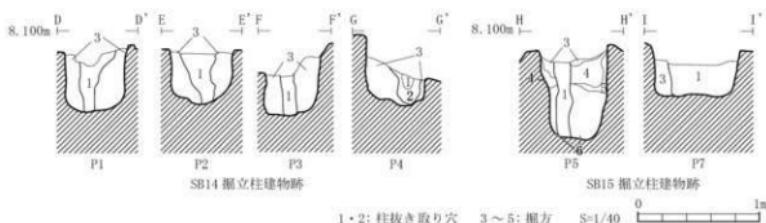
調査区の南東側で発見した東西2間以上、南北3間以上の規模をもつ掘立柱建物跡である。S B 15、S I 17、S D 21・28・33・34・35・39、S X 37と重複しており、S D 35より新しく、S D 28より古い。柱穴は4基検出した。全ての柱穴で柱抜き取り穴と柱のあたり痕跡が確認できた。方向は西側の柱列で、北で約4度36分東に偏している。規模は北側の柱列で3.8m以上、柱間は1.87mで、西側の柱列で4.9m以上、柱間は北から1.97m、1.61mである。掘方の平面形は方形で、規模は北西隅柱穴でみると長辺50cm、短辺45cm、深さ45cmである。掘方埋土は、褐色土とⅢ層に起因する土が斑状に堆積しており、柱抜き取り穴埋土は、褐色土にⅢ層に起因する土が斑状に多く含んでいる。

遺物は、柱抜き取り穴から土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器はいずれもA類である。

S B 15 挖立柱建物跡（第3・4・7図）

調査区の東側で発見した東西2間以上、南北3間以上の規模をもつ掘立柱建物跡である。S I 17・18・19、S D 27・33・34・35・39、S X 36・37・38と重複しており、S I 17・18・19、S D 33・35・39、S X 37より新しい。柱穴は4基検出した。西側柱列の南から2間目の柱穴は、Ⅱ層上面検出のS D 40に壊されているため堀方のみを確認した。それ以外の柱穴は柱抜き取り穴を確認し、そのうち南側柱列の西から1間目の柱穴では、柱のあたり痕跡が認められた。方向は西側の柱列で、北で約6度東に偏している。規模は南側の柱列で2.3m以上、柱間は約1.9mで、西側の柱列で4.3m以上、柱間は北から約2.0m、約2.1mである。掘方の平面形は方形で、規模は南側柱列の西から1間目の柱穴でみると長辺70m、短辺57m、深さ78cmである。掘方埋土は赤褐色～暗赤褐色粘質土にⅢ層に起因する土を斑状に多量に含んでおり、柱抜き取り穴の埋土はにぶい赤褐色土にⅢ層に起因する土を斑状に少量含んでいる。

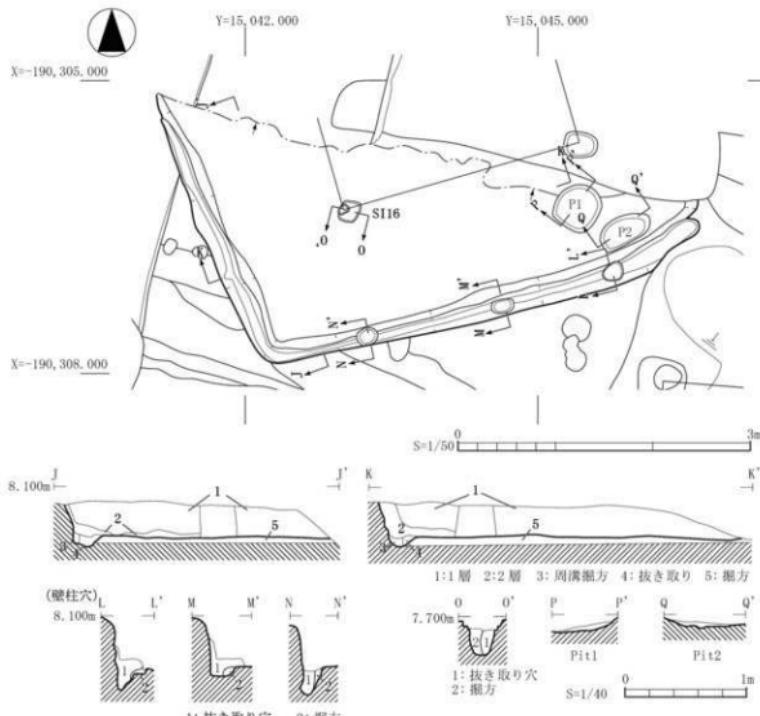
遺物は、柱抜き取り穴から土師器甕、堀方から須恵器杯・瓶が出土している。



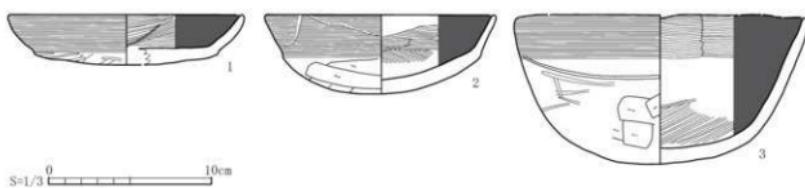
第4図 S B 14・15 挖立柱建物跡 柱穴断面図

S I 16 壁穴住居跡（第3・5・6図）

調査区のはば中央で発見した壁穴住居跡で、北側がⅡ層上面検出のS D 40によって大きく壊されている。S D 28・29・31・32と重複しており、S D 28より古く、それ以外より新しい。規模は南東辺で4.8m、南西辺で3.1m以上、方向は南東辺でみると東で13度北に偏している。壁面はほぼ垂直に立ち上がりつており、高さは最大28cmである。床はⅢ層に起因する橙色粘質土による貼床である。周溝は残存する各

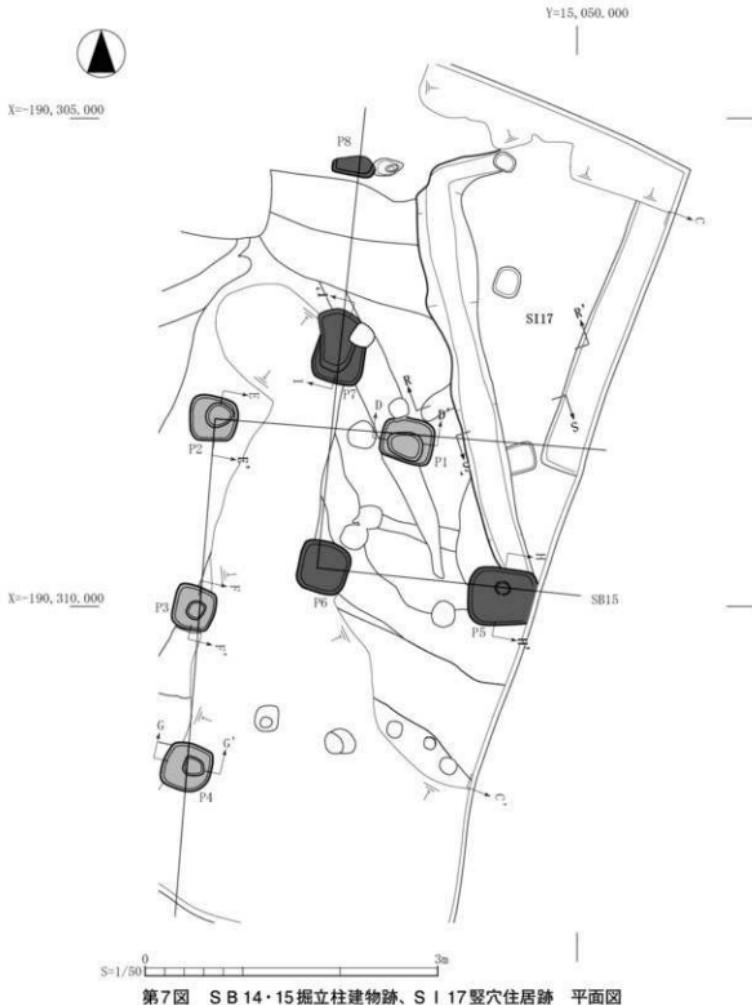


第5図 S I 16 竪穴住居跡 平面図・断面図



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 既存寸	底径 既存寸	器高	写真 回数	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	土器器・杯	SI16 1層	L1-体部:ヨコナデ 底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.3) 7/24	—	3.1	—	R16	
2	土器器・杯	SI17 1層	L1-体部:ヨコナデ 底部:ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.0) 7/24	—	4.8	—	R18	
3	土器器・杯	SI17 2層	口縁部:ヨコナデ 体部:手持ちハ タケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	(17.6) 22/24	—	9.2	—	R25	

第6図 S I 16・17 竪穴住居跡 出土遺物



第7図 SB 14・15 挖立柱建物跡、SI 17 壁穴住居跡 平面図

辺で確認した。周溝埋土は2層確認でき、1層は暗褐色土、2層は明黄褐色土である。いずれもⅢ層に起因する土を斑状に含んでおり、2層は1層より多い。断面観察より1層は壁材の抜き取り溝、2層は掘方と判断した。周溝の規模は、抜き取り溝で幅13~21cm、掘方で10cm以上、深さはいずれも10cmである。住居埋土は2層確認でき、1層はⅢ層に起因する土を斑状に含むにぶい黄褐色土で、2層は暗褐色土である。1・2層ともに炭化物を含む。主柱穴を2箇所で検出し、西側の柱については柱のあたり痕跡を確認した。

壁柱穴は南辺で3基、西辺で1基確認した。いずれも壁面を外側に掘り込んでつくられている。柱は抜き取られており、その埋土は、壁材の抜き取り埋土と同一である。東側では、Pit1とPit2を確認しており、いずれも埋土に焼土が入っている。この近辺にカマドがあった可能性が考えられるが、カマドは確認していない。

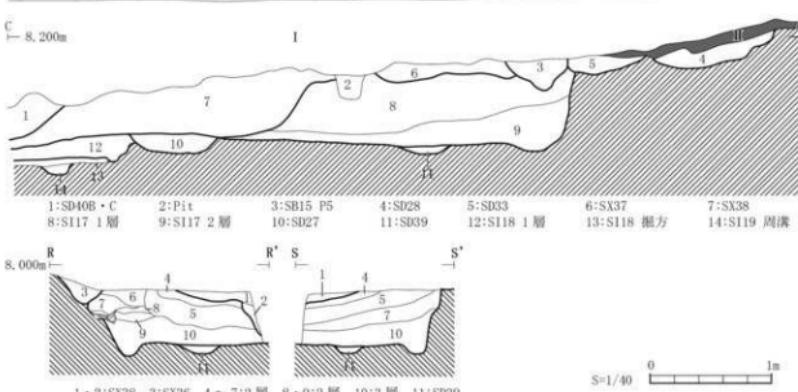
遺物は1層から土師器杯（第6図1）・甕・瓶、須恵器杯・甕、2層から土師器杯・甕、敲石、周溝から土師器甕、床面から土師器甕が出土している。土師器は全てA類である。

S I 17 壁穴住居跡（第3・6・7・8図）

調査区東側で発見した壁穴住居跡である。S B 14・15、S I 18・19、S D 27・39、S X 36・37・38と重複しており、S B 15、S X 37・38より古く、S I 18・19、S D 27・39、S X 36より新しい。規模は、西辺4.7m以上、北辺1.6m以上、方向は西辺でみると北で12度西に偏している。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、高さは最大57cmである。Ⅲ層もしくは古い造構の埋土で床をしている。周溝は発見した各辺で確認でき、規模は上幅30～57cm、深さ9～10cmである。埋土は3層に大別でき、1層は褐色土、2層は焼土層（註1）、3層は焼土粒と炭化物を含む暗褐色土である。1・3層はⅢ層に起因する土を斑状に含んでいる。床面はほぼ水平である。主柱穴を2箇所で検出しており、いずれも柱は抜き取られている。

遺物は、1層から土師器杯（第6図2）・甕、須恵器杯・甕、2層から土師器杯（第6図3）・甕、3層から土師器甕、須恵器杯・甕、主柱穴の抜き取り穴から土師器甕が出土している。土師器は全てA類である。

（調査区東壁）



第8図 S I 17 壁穴住居跡断面図

（註1） 焼土である2層は、S I 17壁穴住居跡の西壁中央付近とその壁面にかけての限られた範囲に分布していることから、カマドがこの場所に布設されていた可能性が考えられた。この焼土層は全て1層に覆われ、3層の上面に認められることから、3層が堆積した後に焼土が形成されたことがわかる。したがって、3層上面が床面である可能性を考慮し検討したが、3層上面で、カマド本体は確認されず、また断面観察の結果、3層そのものもレンズ状の堆積をしていた。このことから、3層上面が床面とはなりえないと考えられ、2層がカマドによる焼土の可能性は低いと考えられる。

S I 18 壺穴住居跡（第8・9図）

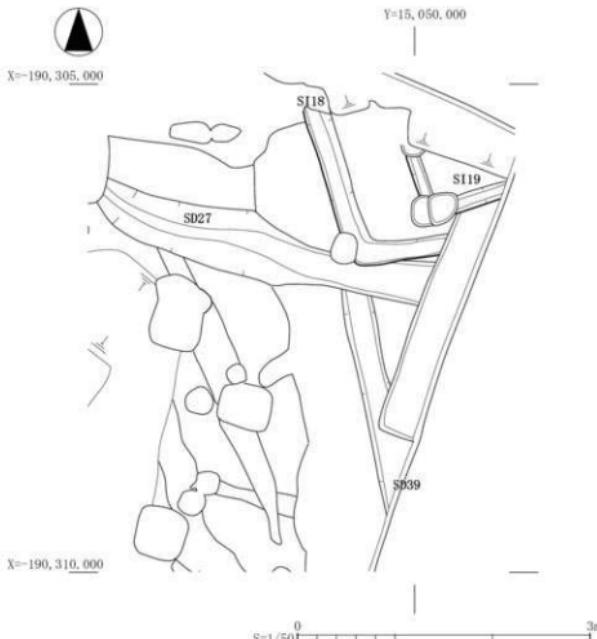
調査区東側で発見した壺穴住居跡である。S B 15、S I 17・19、S D 27、S X 37と重複しており、S I 19より新しく、S B 15、S I 17、S X 37・38、S D 27より古い。規模は西辺35m以上、南辺29m以上、方向は西辺で見ると北で17度西に偏している。Ⅲ層に起因する橙色粘質土で床としている。周溝は全ての辺で確認でき、規模は上幅39～51cm、深さ5cmである。埋土はⅢ層に起因する土を含む黒褐色土で、床面はほぼ水平である。主柱穴を1箇所で検出した。柱は抜き取られている。カマドや貯蔵穴などの施設は確認できなかった。

遺物は、1層から土師器甕・瓶、主柱穴の柱抜き取り穴から土師器杯が出土している。土師器は全てA類である。

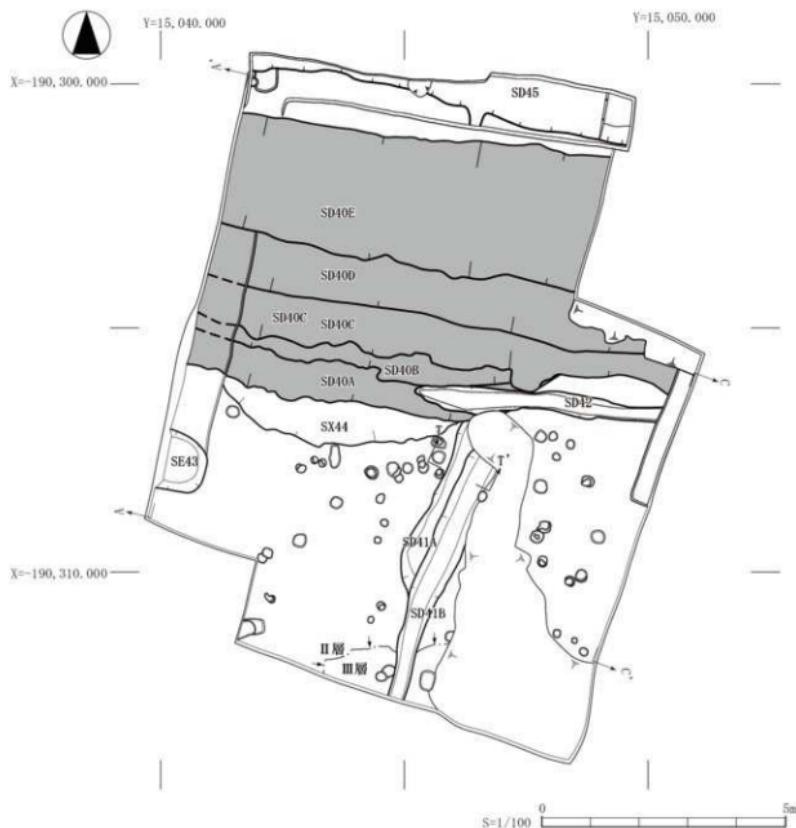
S I 19 壺穴住居跡（第8・9図）

調査区東側で発見した壺穴住居跡である。周溝のみを確認した。S B 15、S X 37、S I 17・18と重複しており、これらより古い。規模は西辺1.4m以上、南辺1.6m以上、方向は西辺で見ると北で20度西に偏している。Ⅲ層で床としている。周溝は全ての辺で確認でき、規模は上幅27～36cm、深さ9cmである。埋土はⅢ層に起因する土を含む暗褐色土で、床面はほぼ水平である。カマドや主柱穴、貯蔵穴などの施設は確認できなかった。

遺物は出土していない。



第9図 S I 18・19壺穴住居跡 平面図



第10図 II層上面検出遺構

II層上面検出遺構

S E 43 井戸跡（第10・11図）

調査区南西角で発見した素掘りの井戸跡である。西側半分が調査区外にある。平面形は円形と推測され、規模は南北1.2m、東西87cm以上である。埋土は工事によって壊される範囲を掘り下げるにとどめた。埋土はIII層に起因する土を斑状に含んだ黒褐色土である。

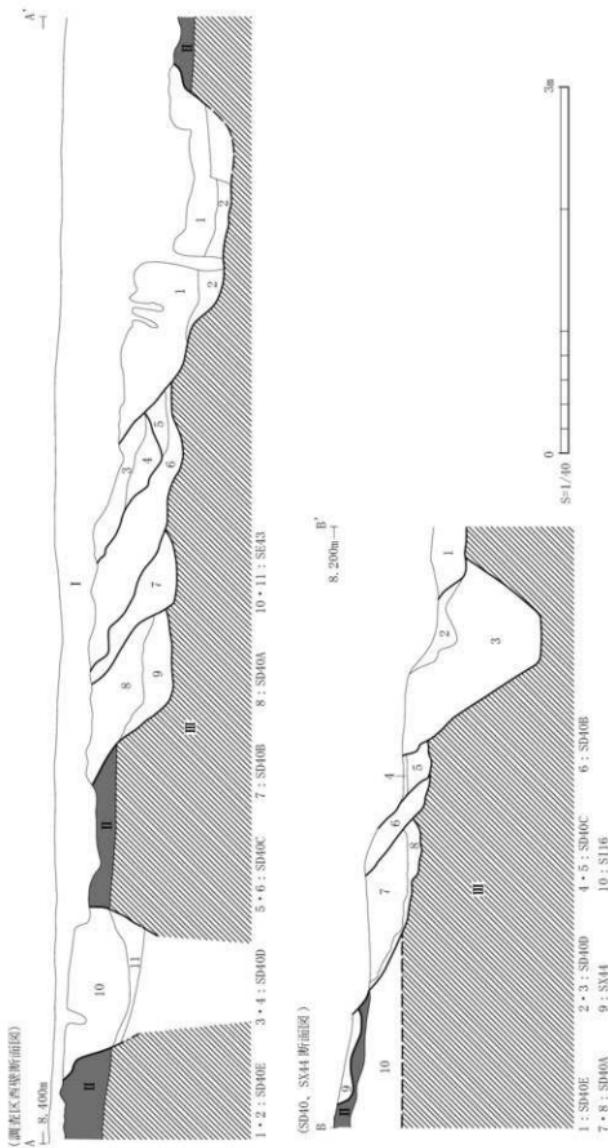
遺物は、古代の土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。

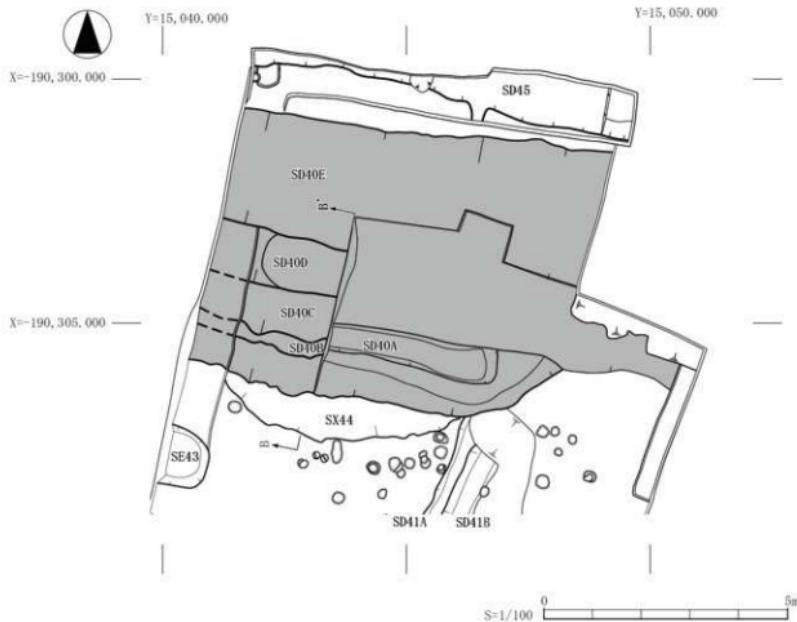
S D 40 溝跡（第8・10・11・12・13・14図）

調査区北側で発見した東西方向の溝跡である。5時期の変遷（A→E期）を確認した。以下古い順に説明する（註2）。

（註2） 調査に至る経緯・経過でも記したとおり、B・C期については、主に断面観察から区分されたものであることから、規模などについては判明しているものだけを記述する。

第11図 SD40掘跡、SE43井戸跡 断面図





第12図 SD 40 (A期) 溝跡 平面図

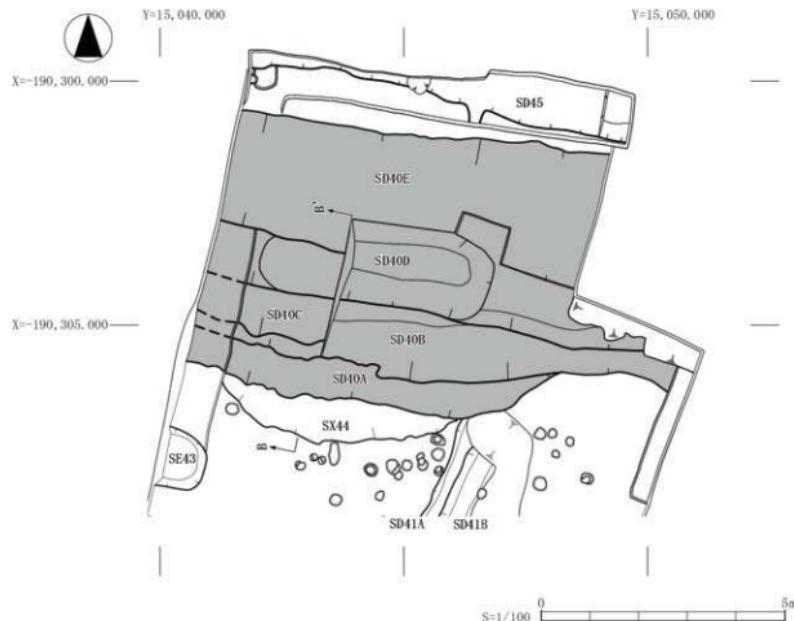


第13図 SD 40 (E期) 溝跡 出土遺物

A期: SD 41 A・42、SX 44と重複しており、SD 41 A、SX 44より新しく、SD 42より古い。調査区の東端まで延びないことから、東側が土橋となっているか、北へ向かって曲がる可能性のいずれかが考えられる。長さ7.6m以上、深さ67cm、方向は東で12度南へ偏している。底面は、東西3.9mにわたってやや窪んでおり、深さは11~18cmである。底面の比高はほとんど無い。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層確認でき、1・2層ともⅢ層に起因する土を斑状に含んだ褐色土で、2層は1層より固く締まっている。

遺物は、全て古代のもので、土師器杯・甕・鉢、須恵器杯・瓶、須恵系土器杯が出土している。

B期: 長さ10.3m以上検出した。深さ70cm、方向は東で8度南へ偏している。底面の比高はほとんどない。



第14図 SD 40 (B・C・D期) 溝跡 平面図

壁は斜めに立ち上がっている。埋土は黒褐色土で、上方ほどⅢ層に起因する土を斑状に多く含んでいる。

C期：深さ75cmで、底面の比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層確認でき、いずれも黒褐色土であるが、2層はⅢ層に起因する土をブロック状に含んでいる。

遺物は、古代の土師器壺・甕、須恵器壺が出土している。

D期：長さ9.1m以上、方向は東で10度南に偏している。深さについては、調査区東西の端は浅く38～60cmであるが、中央部は深く1.1mを計る。壁は、浅い場所では斜めに立ち上がっているが、深い場所では急に立ち上がっている。中央部の深い場所での断面形は、逆台形を呈している。なお、調査区の東西両端でみると、底面は同じ高さである。埋土は2層確認でき、1層はⅢ層に起因する土を斑状に含む黒褐色土で、2層はⅢ層に起因するブロック状の石である。いずれも人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、古代の土師器壺、須恵器壺・甕が出土している。

E期：長さ7.5m以上、方向は東で10度南に偏している。深さ92cmで、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層確認でき、いずれも黒褐色土で、1層には、Ⅲ層に起因する土をブロック状に含んでいる。

遺物は、1層から施釉陶器折縁深皿（第13図）、無釉陶器壺、瓦質土器が、検出面から無釉陶器壺・甕、瓦質土器・擂鉢、砥石が出土している。古代の遺物では、土師器壺・甕、須恵器壺、須恵系土器が出土している。

S D 41 溝跡（第10・15図）

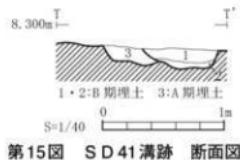
調査区南側で発見した南北方向の溝跡である。2時期の変遷（A→B期）の変遷を確認した。以下、古い順に説明する。

A期：S D 40 Aと重複しており、これより古い。規模は長さ3.7m以上、幅48cm以上、深さ5~12cmである。方向は北で25度東に偏している。壁は斜めに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、北に向かって低くなっている。その比高は15cmである。埋土は1層確認でき、Ⅲ層に起因する土を斑状に少量含む暗褐色土である。

遺物は、出土していない。

B期：規模は長さ5.3m以上、幅38~68cm、深さ16cmである。方向は北で20度東に偏している。壁は斜めに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、北に向かって低くなっている。その比高は30cmである。埋土は2層確認でき、いずれも黒褐色砂質土であるが、下層ほどⅢ層に起因する土を斑状に多く含んでいる。

遺物は、かわらけ（第16図）の他、古代の土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

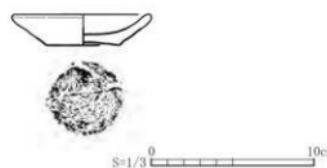


第15図 S D 41溝跡 断面図



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外 面	内 面						
1	かわらけ	ロクロナデ 底部「静止系切り」	ロクロナデ、施釉	—	(6.6) 10.24	—	—	R1	

第16図 S D 41 (B期) 溝跡 出土遺物



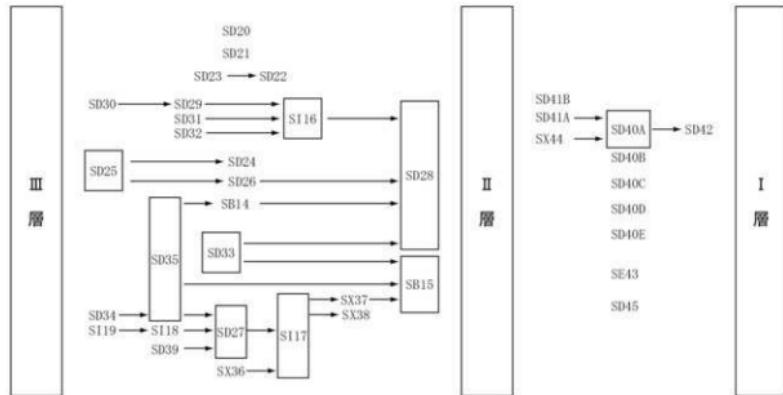
番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外 面	内 面						
1	かわらけ	ロクロナデ 底部「回転系切り」	ロクロナデ	(9.2) 13.24	4.4 24/24	2.0	—	R20	
2	かわらけ	ロクロナデ 底部「回転系切り」	ロクロナデ	(8.4) 16.24	4.5 24/24	1.9	—	R21	

第17図 II層 出土遺物

3 遺構の変遷について

今回、II層上面とIII層上面の2面において遺構を検出し、それによりIII層上面検出の遺構群（S B 14・15 堀立柱跡、S I 16～19 壁穴住居跡、S D 20～35・39 溝跡、S X 36～38）とII層上面検出の遺構群（S D 40～42 溝跡、S E 43 井戸跡、S X 44）に分けることができる。これら層序及び発見した遺構の重複関係を整理すると第18図のような変遷を捉えることができる。

III層上面検出のS I 16・17 壁穴住居跡から出土した遺物壁穴住居跡から出土した土師器杯の特徴は、7世紀末から8世紀中葉頃の山王遺跡S D 180 溝跡出土土器（参考文献1・2）と共に点あることから、壁穴住居跡の年代もこの頃を中心とした年代と推定される。II層上面検出のS D 40 溝跡は、最も新しいE期から古瀬戸後期様式の折縁深皿（註3）が出土していることから、15世紀後葉以降と考えられる。



第18図 遺構変遷模式図

4 まとめ

- ・遺跡の北側斜面を調査し、III層上面で壁穴住居跡、堀立柱跡、溝跡、II層上面で井戸跡、溝跡を発見した。遺構の年代は、II層上面が中世、III層上面が古代と考えられる。
- ・本遺跡で7世紀末～8世紀中葉頃の壁穴住居を初めて発見した。今後当該期の居住域を探る上で、重要と考えられる。
- ・S D 40 溝跡は、南側隣接地の通称「本丸」（末の松山浄水場）と呼ばれている台地を開むようにあることや、5時期の変遷があることから、維持・管理が行われていたものと推察される。第3次調査では、大規模なS D 13 溝跡を確認し、八幡館に付随する空堀の可能性が考えられており、今回発見したS D 40 溝跡も同様な堀跡の可能性が考えられる。今後、調査が進むことでS D 13 溝跡とS D 40 溝跡の関係をはじめ、館跡全体の構造や変遷が明らかになることが期待される。

（註3）出土した折縁深皿は古瀬戸後期様式の第5・6型式にあたり、この時期のものは鉢口深皿の可能性も考えられている（参考文献6）。

参考文献

- (1) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡—第10次発掘調査概報—』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991
- (2) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡—第12次発掘調査概報—』多賀城市文化財調査報告書第30集 1992
- (3) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡—土地区画整理事業に係る発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第70集 2005
- (4) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1—平成15年度発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第77集 2005
- (5) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2—平成18年度発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第87集 2007
- (6) 藤澤良祐『中世古瀬戸窯の研究』 2008



SD 40溝跡検出状況(南西から)



SD 40溝跡(東から)



SD 40溝跡断面(東から)



SE 43井戸跡(北東から)

写真図版1



S III上面全景(北東から)



S I 16 竪穴住居跡(西から)



S I 17 竪穴住居跡(北東から)

写真図版2

XX 橋本町横穴墓群第1次調査

1 調査に至る経緯・経過と調査成果

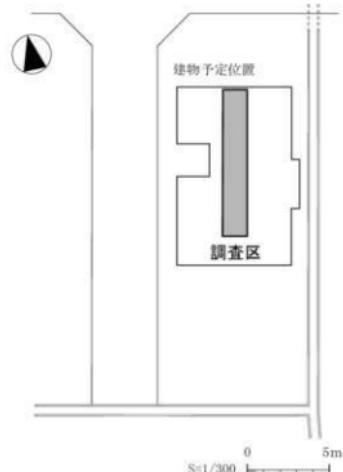
本調査は、大代五丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成22年6月22日に地権者より橋本町横穴墓群における住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。本遺跡は、東西約80m、南北約90mの範囲を有し、緩やかな南斜面に占地する。これまで発掘調査は実施されていないが、多くの遺跡が隣接する地域にあたり、特に西側約100mには30基以上の横穴墓が群集する大代横穴墓群が所在する。計画では、住宅基礎工事(表層改良)の際に最深1.5mの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、工法変更等が行えないか協議したが、基礎構造の強度を得るために必要不可欠であるとの理由から、遺構の有無と土層の堆積状況を把握することを目的に、調査を実施することに決定した。平成22年7月9日に、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、7月13日に現地調査を実施した。

調査は、重機によって、1.5m×9mの範囲を1.3~1.4m下まで掘り下げたが、遺構・遺物は発見されなかった。なお、当該地には現代の盛土の下に、褐色砂質土、暗褐色砂質土、黒褐色粘質土、黄褐色砂が20~35cmの厚さで堆積していることが確認された。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



掘り下げ状況(西より)

XXVI 大代遺跡第2次調査・橋本囲横穴墓群第2次調査

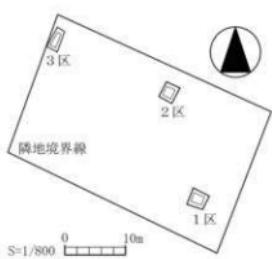
1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は賃貸住宅新築工事に伴うものである。平成22年11月5日に地権者より当該地における賃貸住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画の最深掘削深度は、基礎部分が45cm、給排水工事のうち宅内部分が80cm、本管接続部分が1.2m、フェンス設置部分が40cm、アスファルト施工工事が15cmであった。当該地周辺は調査の実績が少ないことから、遺構検出面までの深さが不明であり、また計画面積がおよそ1,000m²に及ぶことから確認調査を行うこととなった。調査は平成22年11月18日から着手した。

調査区は3箇所(1～3区)設定した(第2図)。はじめに、重機によって表土(1層)の除去から取りかかった。1区と2区では現地表から約13m下まで表土が厚く堆積しており、その下で砂層(II層)を発見した。3区では約15mまで掘り下げたが、盛土や瓦礫がそれ以上深く堆積していた。いずれの調査区においても、遺構・遺物は確認できず、写真撮影と図面作成を行ったのち、調査区を埋め戻し、現地における一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



写真 1区 調査区断面(北西から)

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき2
書名	多賀城市内の遺跡2
副書名	平成22年度発掘調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第103集
編著者名	武田健市、石川俊英、島田敬、相澤清利、村松稔、高橋守克
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134
発行年月日	西暦2011年7月29日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第63次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺12-2	042099	18012	38度 17分 40秒	140度 58分 01秒	20100416 ~ 20100520	35m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第64次)	宮城県多賀城市 新田字後2-4	042099	18012	38度 17分 49秒	140度 57分 39秒	20100521	8m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第65次)	宮城県多賀城市 新田字北関合30-2	042099	18012	38度 17分 15秒	140度 58分 00秒	20100527	2m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第66次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺21-3	042099	18012	38度 17分 44秒	140度 58分 02秒	20100609 ~ 20100805	60m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第67次)	宮城県多賀城市 新田字後11-14の一部	042099	18012	38度 17分 47秒	140度 57分 53秒	20101110 ~ 20101202	52m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第68次)	宮城県多賀城市 新田字後32-6	042099	18012	38度 17分 47秒	140度 57分 46秒	20110202	13m ²	個人住宅 建設
山王遺跡 (第81次)	宮城県多賀城市 山王字山王四区185-6	042099	18013	38度 17分 34秒	140度 58分 43秒	20100409 ~ 20100514	49m ²	個人住宅 建設
山王遺跡 (第82次)	宮城県多賀城市 山王字山王二区129外	042099	18013	38度 17分 38秒	140度 58分 37秒	20100528	100m ²	宅地造成
山王遺跡 (第84次)	宮城県多賀城市 山王字山王二区129外	042099	18013	38度 17分 38秒	140度 58分 37秒	20100728 ~ 20100807	138m ²	宅地造成
山王遺跡 (第85次)	宮城県多賀城市 山王字山王四区185-7	042099	18013	38度 17分 33秒	140度 58分 43秒	20100818 ~ 20100930	43m ²	個人住宅 建設
山王遺跡 (第86次)	宮城県多賀城市 市川字多賀前地内	042099	18013	38度 17分 31秒	140度 59分 16秒	20101105 ~ 20101112	201m ²	農業用水路 改修
市川橋遺跡 (第80次)	宮城県多賀城市 城南一丁目12-17	042099	18008	38度 17分 42秒	140度 59分 38秒	20100610	12m ²	個人住宅 建設

市川橋遺跡 (第81次)	宮城県多賀城市 城南一丁目2-11	042099	18008	38度 17分 46秒	140度 59分 23秒	20100910 / 20101001	67m ²	個人住宅 建設
高崎遺跡 (第83次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目81-11・13	042099	18018	38度 17分 35秒	140度 59分 50秒	20100421	8m ²	個人住宅 建設
高崎遺跡 (第84次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目51-3	042099	18018	38度 17分 36秒	140度 59分 55秒	20100507	8m ²	店舗増築
高崎遺跡 (第85次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目185-1 外	042099	18018	38度 17分 37秒	140度 59分 59秒	20100910 / 20100921	47m ²	賃貸住宅 建設
高崎古墳群 (第10次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目505-3、507	042099	18002	38度 17分 37秒	140度 59分 45秒	20100501 / 20100629	46m ²	個人住宅 建設
高崎古墳群 (第11次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目505-1	042099	18002	38度 17分 38秒	140度 59分 45秒	20100508 / 20100726	86m ²	個人住宅 建設
西沢遺跡 (第18次)	宮城県多賀城市 市川字伊保石21-1～7	042099	18017	38度 18分 20秒	140度 59分 49秒	20100515 / 20100619	26m ²	擁壁設置工事
西沢遺跡 (第19次)	宮城県多賀城市 市川字奏社35-6・7	042099	18017	38度 18分 21秒	140度 59分 49秒	20100515 / 20100619	121m ²	個人住宅 建設
西沢遺跡 (第20次)	宮城県多賀城市 市川字奏社31-7	042099	18017	38度 18分 22秒	140度 59分 51秒	20101207 / 20101225	33m ²	個人住宅 建設
小沢原遺跡 (第17次)	宮城県多賀城市 浮島二丁目38-3	042099	18043	38度 17分 59秒	141度 00分 16秒	20101008	85m ²	個人住宅 建設
東田中塙前 遺跡 (第6次)	宮城県多賀城市 東田中一丁目242-22外	042099	18037	38度 17分 23秒	140度 59分 57秒	20101216 / 20101217	147m ²	建壳住宅 建設
志引遺跡 (第3次)	宮城県多賀城市 東田中二丁目124-18	042099	18020	38度 17分 22秒	141度 00分 11秒	20100618	12m ²	個人住宅 建設
八幡館跡 (第6次)	宮城県多賀城市 八幡二丁目327-2	042099	18021	38度 17分 07秒	141度 00分 18秒	20101201 / 20110210	106m ²	個人住宅 建設
橋本開 横穴墓群 (第1次)	宮城県多賀城市 大代五丁目63の一部	042099	18004	38度 17分 14秒	141度 02分 42秒	20100713	14m ²	個人住宅 建設
橋本開横穴 墓群・大代 遺跡 (第2次)	宮城県多賀城市 大代六丁目46-1、48-2	042099	18004 18039	38度 17分 12秒	141度 02分 41秒	20101118	21m ²	賃貸住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新田遺跡 (第63次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世	溝跡	土師器・須恵器 須恵系土器・無軸陶器				
新田遺跡 (第64次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世						
新田遺跡 (第65次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世						

新田遺跡 (第66次)	集落・屋敷	古墳・古代・中世	掘立柱建物跡 溝跡・道路跡 烟跡	土師器・須恵器 ミニチュア土器 無釉陶器・綠釉陶器 褐釉陶器・青磁・白磁	古墳時代の特異なミニチュア土器が出土。
新田遺跡 (第67次)	集落・屋敷	古墳・古代・中世	溝跡・土壤	土師器・須恵器	
新田遺跡 (第68次)	集落・屋敷	古墳・古代・中世			
山王遺跡 (第81次)	集落・都市	古墳・古代・中世	道路跡・溝跡	土師器・須恵器	道路跡は、西9道路に相当する。
山王遺跡 (第82次)	集落・都市	古墳・古代・中世	溝跡・小溝群		
山王遺跡 (第84次)	集落・都市	古墳・古代・中世	土壤		
山王遺跡 (第85次)	集落・都市	古墳・古代・中世	道路跡・溝跡 土壤・小溝群	土師器・須恵器 須恵系土器	道路跡は、西9道路に相当する。
山王遺跡 (第86次)	集落・都市	古墳・古代・中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器・瓦	
市川橋遺跡 (第80次)	集落・都市	古墳・古代・中世			
市川橋遺跡 (第81次)	集落・都市	古墳・古代・中世	河川跡		
高崎遺跡 (第83次)	集落・城館	古墳・古代・中世	井戸跡		
高崎遺跡 (第84次)	集落・城館	古墳・古代・中世			
高崎遺跡 (第85次)	集落・城館	古墳・古代・中世	溝跡		
高崎古墳群 (第10次)	高塚古墳 集落	古墳・古代・中世	竪穴住居跡 溝跡・土壤		
高崎古墳群 (第11次)	高塚古墳 集落	古墳・古代・中世	溝跡・窯跡	土師器・須恵器・瓦	窯跡は、6世紀末頃～7世紀第1四半期頃に位置付けられる。
西沢遺跡 (第18次)	集落	古中代世			
西沢遺跡 (第19次)	集落	古中代世	竪穴住居跡 溝跡	土師器・須恵器 須恵系土器・瓦	
西沢遺跡 (第20次)	集落	古中代世	溝跡	土師器・須恵器	
小沢原遺跡 (第17次)	集落	古中代世	柱穴		
東田中窓前 遺跡 (第6次)	集落・城館	古中代世			遺物包含層を発見。
志引遺跡 (第3次)	散布地 城館	古中代世			
八幡館跡 (第6次)	集落・城館	古中代世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 堀跡	土師器・須恵器 須恵系土器・瓦 無釉陶器・綠釉陶器 かわらけ・瓦質土器	竪穴住居跡は、8世紀前半頃に位置付けられる。
橋本開 横穴墓群 (第1次)	散布地 横穴墓	古墳			

橋本開横穴 墓群・大代 遺跡 (第2次)	散布地 横穴薄	繩文・古 墳・古代			
		新田遺跡第63次調査では、中世の溝跡を発見した。			
		新田遺跡第64次調査では、遺構検出面までの深さを確認した。			
		新田遺跡第65次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		新田遺跡第66次調査では、古墳時代の烟跡、奈良時代の道路跡、中世の溝跡を発見した。			
		新田遺跡第67次調査では、古代～中世の土壌を発見した。			
		新田遺跡第68次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		山王遺跡第81次調査では、古代の道路跡、溝跡を発見した。			
		山王遺跡第82次調査では、古代の烟跡を発見した。			
		山王遺跡第84次調査では、古代以降の溝跡を発見した。			
		山王遺跡第85次調査では、古代の道路跡、中世の溝跡などを発見した。			
		山王遺跡第86次調査では、古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡を発見した。			
		市川橋遺跡第80次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		市川橋遺跡第81次調査では、中世以降の河川跡を発見した。			
要 約		高崎遺跡第83次調査では、古代の井戸跡を発見した。			
		高崎遺跡第84次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		高崎遺跡第85次調査では、古代の溝跡を発見した。			
		高崎古墳群第10次調査では、古代の堅穴住居跡、溝跡、土壌を発見した。			
		高崎古墳群第11次調査では、古墳時代の窪跡、古代の溝跡を発見した。			
		西沢遺跡第18次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		西沢遺跡第19次調査では、古代の堅穴住居跡、溝跡などを発見した。			
		西沢遺跡第20次調査では、古代の溝跡を発見した。			
		小沢原遺跡第17次調査では、古代以降の柱穴を発見した。			
		東田中窪前遺跡第6次調査では、古代の遺物包含層を発見した。			
		志引遺跡第3次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		八幡館跡第6次調査では、古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡や中世の堀跡などを発見した。			
		橋本開横穴墓群第1次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			
		橋本開横穴墓群第2次調査・大代遺跡第2次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。			

多賀城市文化財調査報告書第103集

多賀城市内の遺跡2

—平成22年度発掘調査報告書—

平成23年7月29日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の日西町2番10号

電話 (022) 288-6123

